埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集

上敷免遺跡（第2次）
上敷免北遺跡

1985.3

深谷市教育委員会

第　　号
昭和 61.11.15 日
川本町教育委員會

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集

上敷免遺跡（第2次）
上敷免北遺跡

1985.3
深谷市教育委員会

序

現在深谷市では、総合的な秩序ある都市としての発展を目指し、「緑に囲まれた、生産、生活環境の整った都市」の実現のために、様々な事業を推進しております。都市基盤整備事業の一環として進められている、公共下水道中央１号汚水幹線の工事もその一つです。此の度、この工事に伴い、市内明戸地区、上敷免地区で遺跡発掘調査を実施いたしました。本書は、その成果をまとめたものです。

中央１号汚水幹線が通る明戸地区、上敷免地区は、現在は豊かな田園風景が開けております。赤城山を眼前に望み、利根川の恩恵に育まれたこの一帯は、古くから人々の生活の舞台となっておりました。昭和52年に上敷免地区の入枝で弥生時代の再葬墓、古墳時代と平安時代の住居跡、奈良時代の土師器窖窯などが調査され、昭和55年には上敷免地区の東本郷で平安時代の住居跡などが調査されました。此の度も、古墳時代の住居跡などの貴重な知見を得ることができ、現在の私たちの文化が、まさに有史以来の連綿たる人々の歴史のうえに成り立っていることを実感いたしました。本書がこうした歴史の生きた証として、様々に活用されることを願ってやみません。

最後に、この発掘調査にあたり、調査員を快く御承引くださった小俣悟氏をはじめ、御指導、御協力をいただいた関係者のみなさまや地元のみなさまに、深く感謝申し上げます。

昭和60年３月

深谷市教育委員会
教育長　鳥塚　恵和男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市公共下水道中央１号汚水幹線工事に伴う、深谷市明戸107―１番地先ほか、及び深谷市上敷免491番地先ほか所存遺跡の発掘調査報告書である。事業名は、前者を上敷免遺跡第２次発掘調査、後者を上敷免北遺跡発掘調査とした。

2．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、上敷免遺跡第２次発掘調査は昭和58年２月14日から３月11日まで、上敷免北遺跡発掘調査は昭和58年６月14日から７月９日まで行った。

3．調査経費は、昭和57年度～59年度国庫補助事業公共下水道中央１号汚水幹線工事費より支出した。

4．上敷免遺跡第２次発掘調査中の写真撮影は小俣悟が、上敷免北遺跡発掘調査中の写真撮影は澤出晃越が遺物の写真撮影は澤出晃越・玉田浩一が行った。

5．出土遺物の整理及び図版の作成等は整理参加者全員で行った。なお、挿図中の方位は、座標北を示している。

6．本書の執筆及び編集は澤出晃越が行った。なお、遺構の報文については小俣悟が若干の補足をした。

7．本書の作成にあたり、下記の方々から御助言・御指導を賜わった。

磯崎一、井上肇、今井宏、梅沢太久夫、小川望、柿沼幹夫、金子真土、金子正之、栗島義明、笹森健一、寺社下博、田中正夫、利根川章彦、中村倉司、橋本富夫、板東隆秀、坂野和信、水村孝行、大和修

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教育長　鳥塚恵和男

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　武井克己

課長補佐兼文化財保護係長

水野四郎（昭和57年度）

島田良一（昭和58年度）

河田記久平（昭和59年度）

主事　大屋貞夫　小林京子

調査担当者　埼玉大学教養部研究生（昭和57年度当時）　小俣　悟（上敷免遺跡第２次発掘）

深谷市教育委員会社会教育課主事　澤出晃越（上敷免遺跡第２次整理／上敷免北遺跡）

調査補助員　玉田浩一、星川勝広、山口徹（以上埼玉大学生、昭和57年度当時）

調査参加者　宇賀地桂子、笠木ヒロ子、加藤佳子、菅野キサ子、倉上多美子、里山まり子、鈴木令子、滝口知子、田村喜代子、浜端春子、平野安喜子、平本法子、溝越教子、横山洋子、渡部けい子、

薄井仁、香留郁二、鯨井博之、小柳美奈子、斉藤衣世、斉藤誠、篠崎智子、柴崎弥生、嶋田義雄、清水健治、鈴木透、鈴木靖夫、田中秀逸、中野浩之、中村英子、萩原由枝、羽石正隆、早坂広人、平井巌、星野務、星野美佐男、

大浜慶子、金谷恵美子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、砂田伊久子、都築百合子、細川ケイ子、水野祥代、本橋玲子、森光代、渡辺哲子

目　　次

序
例言
目次・凡例

Ⅰ　発掘調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境……2

Ⅲ　上敷免遺跡第2次発掘調査……6
　1．調査の概要……6
　　(1)　調査の経過……6
　　(2)　調査結果の概要……7
　2．遺構と遺物……7
　　(1)　A区の調査……7
　　(2)　B区の調査……45
　　(3)　C区の調査……54

Ⅳ　上敷免北遺跡発掘調査……56
　1．調査の概要……56
　　(1)　調査の経過……56
　　(2)　調査結果の概要……56
　2．遺構と遺物……59
　　(1)　A区の調査……59
　　(2)　B区の調査……67

Ⅴ　結語……69

写真図版

挿図目次

第1図　遺跡位置図
第2図　調査区位置図
上敷免遺跡第2次発掘調査
第3図　A区全測図
第4図　A区第1号住居跡カマド実測図
第5図　A区第1号住居跡遺物出土状態
第6図　A区第1号住居跡出土遺物(1)
第7図　A区第1号住居跡出土遺物(2)
第8図　A区第1号住居跡出土遺物(3)
第9図　A区第1号住居跡出土遺物(4)
第10図　A区第1号住居跡出土遺物(5)
第11図　A区第1号住居跡出土遺物(6)
第12図　A区第1号住居跡出土遺物(7)
第13図　A区第1号住居跡出土遺物(8)
第14図　A区第1号住居跡出土遺物(9)
第15図　A区第1号住居跡出土遺物(10)
第16図　A区第1号住居跡出土遺物(11)
第17図　A区第1号住居跡出土遺物(12)
第18図　A区第1号住居跡出土遺物(13)
第19図　A区第1号住居跡出土遺物(14)
第20図　A区第1号住居跡出土遺物(15)
第21図　A区第1号住居跡出土遺物(16)
第22図　A区第2号住居跡遺物出土状態・カマド実測図
第23図　A区第2号住居跡出土遺物
第24図　B区全測図
第25図　B区第1号住居跡焼土・炭化物検出状態・カマド実測図
第26図　B区第1号住居跡出土遺物(1)
第27図　B区第1号住居跡出土遺物(2)
第28図　B区中世以降の遺構
第29図　B区第1号土坑出土板石塔婆
第30図　C区全測図
上敷免北遺跡発掘調査
第31図　A区全測図
第32図　A区土層断面図
第33図　A区出土遺物(1)
第34図　A区出土遺物(2)
第35図　A区出土遺物(3)・B区出土遺物
第36図　B区全測図

写真図版目次

上敷免遺跡第２次発掘調査

図版１　１．Ａ区全景（北より）

２．Ａ区第１号住居跡カマド

図版２　３．Ａ区第１号住居跡遺物出土状態(1)

４．Ａ区第１号住居跡遺物出土状態(2)

図版３　５．Ａ区第１号住居跡遺物出土状態(3)

６．Ａ区第１号住居跡遺物出土状態(4)

図版４　７．Ａ区第２号住居跡カマド

８．Ｂ区全景（北より）

図版５　９．Ｂ区第１号住居跡遺物出土状態

10．Ｃ区全景（北より）

図版６　11．Ａ区第１号住居跡出土遺物(1)

図版７　12．Ａ区第１号住居跡出土遺物(2)

図版８　13．Ａ区第１号住居跡出土遺物(3)

図版９　14．Ａ区第１号住居跡出土遺物(4)

図版10　15．Ａ区第１号住居跡出土遺物(5)

図版11　16．Ａ区第１号住居跡出土遺物(6)

17．上敷免遺跡第２次発掘調査出土玉類

18．Ａ区第２号住居跡出土遺物

図版12　19．Ｂ区第１号住居跡出土遺物

上敷免北遺跡発掘調査

図版13　20．Ａ区全景（北より）

21．Ａ区第１号溝状遺構遺物出土状態

図版14　22．上敷免北遺跡出土遺物

出土遺物観察表・凡例

ア．土師器坏・埦（第６図１～第10図170）

番　号	器　種	口　径	器　高	特　　徴	残存率
1	杯	13.7	5.4	口唇部やや尖る。OB～BℓB。	80%

番号は挿図番号に一致する。

法量の数値の単位はcm。（　）内の数値は推定値または残存値である。なお、甕などの胴径は胴部最大径を示す。―は値が不明なもの。

特徴は、技法・形態などの特徴を記す。胎土・焼成は特に他と異なり目立つものだけを記す。色調はアルファベットで記す――Ｌ：淡色　Ｄ：暗色　Bℓ：黒色　Ｂ：褐色　Ｒ：赤色　Ｏ：橙色　Ｙ：黄色　Ｇ：灰色　Ｗ：白色――　例・LOB＝淡橙褐色

なお、見出し（上の例では、ア、土師器坏・埦）に挙げた遺物の観察表の後に、一般的にみられる特徴や補足などを付け加えた。

Ⅰ　発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を隔てて群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正２年（1456）頃に上杉房憲が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約88,000人、面積約70km^{2}で、農業生産高は県内随一を誇り、近年は工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。

こうした都市化の波に対し、深谷市では様々な事業を推進しているが、都市基盤整備事業の一環として進められた、公共下水道中央１号汚水幹線工事もその一つである。中央１号汚水幹線は、市内の汚水を集積して市内上敷免地内の小山川沿いにある浄化センターへ流すことを目的としている。日本煉瓦製造株式会社旧専用線（全線を遊歩道用地として市が買収中）の地下に埋設することを予定し、昭和57年度より３ヶ年度事業として工事が開始された。

昭和57年度は、福川以北の約１kmの工事が予定された。この工事予定地は、昭和57年度の遺跡詳細分布調査により確認された、土師器片などが散布している広い範囲の中央を南北に通っていた。中央１号汚水幹線工事は、泥水推進工法により地表面下約10mを横方向に掘削するため、遺跡にはほとんど影響しないものと考えられたが、数ヶ所に地表面に通ずる50～60m^{2}ほどの立坑が掘削される予定であった。工事担当課の市建設部下水道課は、昭和58年１月18日付けの文書により、市教育委員会に立坑３ヶ所の試掘調査を依頼した。１月27日に試掘調査を実施したところ、３ヶ所とも遺構を確認した。

そこで市建設部と市教育委員会は協議を重ね、昭和58年２月10日付けで委託協定が取り交わされた。市教育委員会は発掘調査の準備を進め、上敷免遺跡第２次発掘調査として、昭和58年２月12日に重機による表土削除を行い、調査を開始した。

中央１号汚水幹線の工事は、昭和58年度には、更に北側の浄化センターに至る約800mが予定された。立坑予定地７ヶ所について、市建設部より市教育委員会に、昭和58年２月28日付けの文書により試掘調査の依頼があった。５月９日・10日に試掘調査を実施したところ、立坑予定地２ヶ所に遺構が確認された。

そこで市建設部と市教育委員会は昭和58年６月10日付けで発掘調査の委託協定を取り交わし、市教育委員会は準備を進めた。発掘調査は、上敷免北遺跡発掘調査として、６月14日に重機による表土削除を行い、開始された。

古墳・奈良・平安時代の遺跡
（その他との複合遺跡を含む）

第１図　遺跡位置図（1／20,000）

１．新開荒次郎館跡　２．内ヶ島氏館跡　**３．上敷免北遺跡**　**４．上敷免遺跡**　５．皿沼城跡　６．伝幡羅太郎館跡　７．深谷城跡　８．深谷町遺跡　９．桜田馬場　10．曲田城跡　11．城下遺跡　12．木の本古墳群　13．東方城跡　14．庁鼻和城跡　15．萱場松原遺跡　16．鼠裏遺跡　17．割山埴輪窯跡　18．桜ヶ丘組石遺跡　19．秋元氏館跡　20．小台遺跡　21．人見館跡

II　遺跡の地理的・歴史的環境

深谷市周辺の地形を概観すると、ほぼ東西に走る国鉄高崎線付近を境界線として、南側の櫛挽台地と北側の妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる洪積扇状台地であり、妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、晩冬から初春にかけてはひどい土埃に悩まされることもしばしばである。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花・植木などの栽培も盛んになりつつある。また台地北端部は、居住環境の整備等により住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼ高崎線沿いの崖線で、比高５～10ｍをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５ｍをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面40～50ｍ、寄居面が32～36ｍ、妻沼低地が30～31ｍである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南側には、荒川を挟んで下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘である標高98.0ｍの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4ｍの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近に、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は利根川流域に広がる低い低地である。南は熊谷市付近を境として、秩父山塊になる台地や丘陵と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は行田市付近を境として加須低地に連なる。妻沼低地内は、利根川の流路の変遷や氾濫により自然堤防が発達していたものと思われ、深谷市内には血洗島、矢島、大塚島、内ヶ島などの島地名が多いこともこのことを裏付けている。市内明戸地区では「昔は畑七分に田が三分」と言ったらしいが、現在では耕地整理が進みかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である，しかし、深谷市遺跡詳細分布調査（註１）によれば、寄居面北端部付近から西北へ、主に古墳時代後期以降の遺跡が島地名の土地を包括して連続していることが確認された。このことは、自然堤防の様子をよく表しているものと思われる。また、昨年７月より開始された、国道17号深谷バイパス建設工事に伴う発掘調査（註２）による成果が期待されるところである。なお、妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の市街地があり、周辺では住宅が急増している。

上敷免遺跡は、上敷免から明戸にかけて広がる大きな遺跡である。妻沼低地上の、前記した自然堤防上の遺跡列に含まれている。昭和52年度の発掘調査（註３）で、須和田期の再葬墓が調査されたことで著名な遺跡であるが、同時期の集落跡等は確認されていない。この発掘調査では、鬼高期と国分期の住居跡や、真間期の土師器焼成窖窯なども調査されており、鬼高期から国分期にかけての大集落跡とも考えられる。第１図の範囲は主に土師器片の散布範囲である。

上敷免北遺跡は、上敷免遺跡の北側を、やはり上敷免から明戸にかけて東西に延びる大きな遺跡である。土師器片・須恵器片などが散布している。昭和55年に遺跡の北側で、東京電力籠原線設置

工事に伴う鉄塔建設部分の発掘調査が行われた。この時点では遺跡の範囲がはっきりしていなかったため、東本郷遺跡という名称で、国分期の住居跡４軒等が調査された。

今回の調査も含め、上敷免遺跡と上敷免北遺跡は、現状では点としての調査しか行われておらず、その全体像を把握することは甚だ困難であり、今後の調査が期待される。

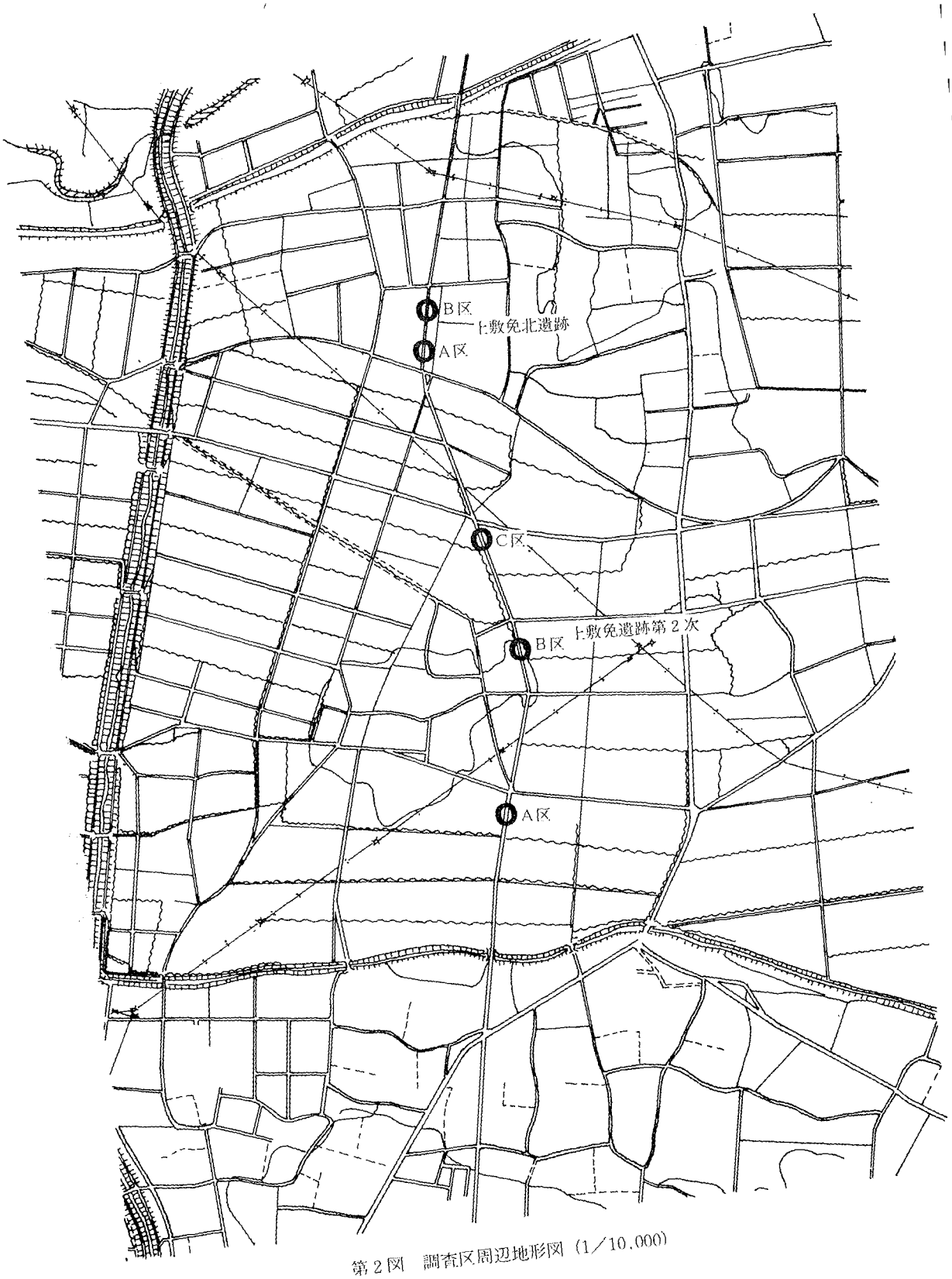
周辺に目を転じると、妻沼低地の一帯では弥生時代中期須和田期の遺跡が比較的多く知られていることが目立つ。上敷免遺跡をはじめ、岡部町四十坂遺跡（註４）、妻沼町飯塚遺跡（註５）、熊谷市三ヶ尻上古遺跡（註６）、池上遺跡（註７）などで、池上遺跡では集落跡の調査が行われている。これらの遺跡は、低地に臨む台地先端部や低地内の微高地上に立地し、水稲耕作の伝播以来、低地の開発が進行していったことを示しているといえよう。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての状況は、深谷市内ではあまり明瞭ではない（註８）が、市街地の北端部にある深谷町遺跡で、昭和58年１月に和泉期と推定される水稲耕作用の水路跡が調査され（註９）木製鋤などが出土した。また、行田市池守遺跡（註10）や熊谷市東沢遺跡（註11）でも農耕具などの木製品が出土しており、この頃に灌漑土木技術が発達し、低地を中心に大規模な開発が進行して生産力が高まったことが推定される。

こうした状況を背景として、古墳時代後期以降になると遺跡数は激増し、ほとんど自然堤防全体に広がる様相を示し、条里制の時代へ受け継がれていったのであろう。

平安時代も後期になると、低地の生産力を基盤とした在地武士たちが登場してくる。深谷市内の低地側には、いわゆる武蔵七党の猪俣党の諸氏、荏原氏、蓮沼氏、内ヶ島氏の館跡推定地や、渡来系氏族秦氏の子孫と伝えられる新開氏の館跡推定地があるが、遺構はほとんど残されていない。

註１　昭和56年度・57年度に実施。調査主体は深谷市教育委員会。
註２　調査主体は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
註３　蛭間真一他　「上敷免遺跡」　昭和53年３月　深谷市教育委員会
註４　栗原文蔵　「四十坂遺跡の初期弥生土器」　上代文化第30輯　昭和35年　国学院大学考古学会
註５　増田逸朗　「飯塚遺跡」　埼玉県土器集成　昭和51年　埼玉考古学会
註６　高山清司他　「三ヶ尻上古遺跡」　埼玉県土器集成４　昭和51年　埼玉考古学会
註７　中島宏他　「池守・池上」　昭和59年　埼玉県教育委員会
註８　昭和60年２月～３月に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の国道17号深谷バイパス用地の発掘調査で、吉ヶ谷期、五領期の集落跡が確認された。
註９　澤出晃越他　「深谷町遺跡」　昭和60年３月　深谷市教育委員会
註10　斉藤国夫　「池守遺跡」　昭和56年３月　行田市教育委員会
註11　新井寿郎他　「中条条里遺跡調査報告書Ⅰ」　昭和54年２月　熊谷市教育委員会



第２図　調査区周辺地形図（1／10,000）

Ⅲ　上敷免遺跡第２次発掘調査

１．調査の概要

(1)　調査の経過

昭和58年２月12日、重機により３地点に分かれた調査区の表土を削除し、調査区は南よりＡ区、Ｂ区、Ｃ区と呼称することにした。

２月14日　工事の事情もあって、Ｂ区の精査により作業を開始した。住居跡の存在を確認し第１号住居跡としたが、覆土と地山の判別が困難なため、プランは明確にはならなかった。また、第１号住居跡を切っている第１号溝状遺構が検出された。

２月15日　サブトレンチを設定し、Ｂ区第１号住居跡のプランの確認を急いだ。

２月16日　Ａ区、Ｂ区、Ｃ区に基準杭を設定した。

２月17日　雪のため作業中止。

２月18日　午前中は遺構内にたまった水の扱み出し。Ｂ区第１号溝状遺構から中世常滑焼と思われる小破片が出土した。

２月19日　Ａ区の調査を開始した。精査を行い住居跡を確認し、Ａ区第１号住居跡としたが、やはりプランの確認は困難であった。精査段階で土師器の小破片が出土し、遺物は多量に包蔵されているものと推定された。

２月21日　Ａ区第１号住居跡は、時間の都合もあり、遺物の出土状況からベルトを設定し、掘り進めることにした。Ｂ区第１号土坑より板石塔婆が出土した。

２月23日　Ｃ区の精査を開始し、性格不明の竪穴遺構を検出した。

２月24日　雪のため作業中止。

２月25日　Ａ区第１号住居跡は予想以上に遺物の出土量が多く、遺物出土状態の写真撮影及び実測を行いつつ掘り進めることにした。

２月26日　Ｂ区第１号住居跡の覆土中層に、焼土・炭化物が浅く広く堆積していることを確認。

２月28日　Ｃ区の調査を終了した。Ａ区では第１号住居跡の南側に別の住居跡のカマドを検出し、第１号住居跡を切って構築されている第２号住居跡を確認した。

３月１日　Ｂ区第１号住居跡の床面直上の炭化材を検出。同住居跡の南隅が袋状となっていることを確認。

３月２日　雨のため午前中のみ作業を行った。

３月３日　Ａ区第１号住居跡の壁を検出し、全体のプランを確認した。

３月５日　Ｂ区の調査を終了した。

３月７日　ようやくＡ区第１号住居跡の壁面が確認できた。

３月９日　Ａ区第１号住居跡及び第２号住居跡のカマド及び柱穴の調査を行った。

3月10日　A区第1号住居跡及び第2号住居跡のカマドの掘り方を確認した。
3月11日　A区の全景写真を撮影し、A区の測量を行って調査を終了した。

当初、現地の発掘は3月初旬に終了する予定であったが、毎週水曜日に雪や雨が降り、覆土と地山の判別が困難だったことや、特にA区第1号住居跡から大量の遺物が出土したこともあって、終了は予定よりかなり遅れる結果となった。

(2)　調査結果の概要

調査区は3地点に分かれており、南からA区、B区、C区と呼称した。各区には基準杭を設定し、特にグリッド等は設定しなかった。各区の全測図は平板により測量し、カマドや遺物出土状態の平面図は簡易な遣り方を組んで測量した。

A区の遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡2基などである。第1号住居跡からは非常に多量の遺物が出土しており、この報告書に図示したものだけでも315点を数える。第2号住居跡は第1号住居跡を破壊して構築されており、古墳時代終末期頃に構築されたものと考えられる。切り合い部分の付近では、両住居跡の遺物が混入していたようであり、さらにその東側は2基の土坑によって破壊されていた。

B区の遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡1基、中世の土坑1基と溝状遺構2条などである。第1号住居跡は、中層に焼土や炭化物が浅く広く堆積していることが認められ、床面直上では焼土塊と炭化材が検出された。第1号土坑からは、ほぼ完形の小型の板石塔婆が出土した。第1号溝状遺構からは、中世常滑焼の小破片と思われる遺物などが出土したが、図示しうるものはなかった。

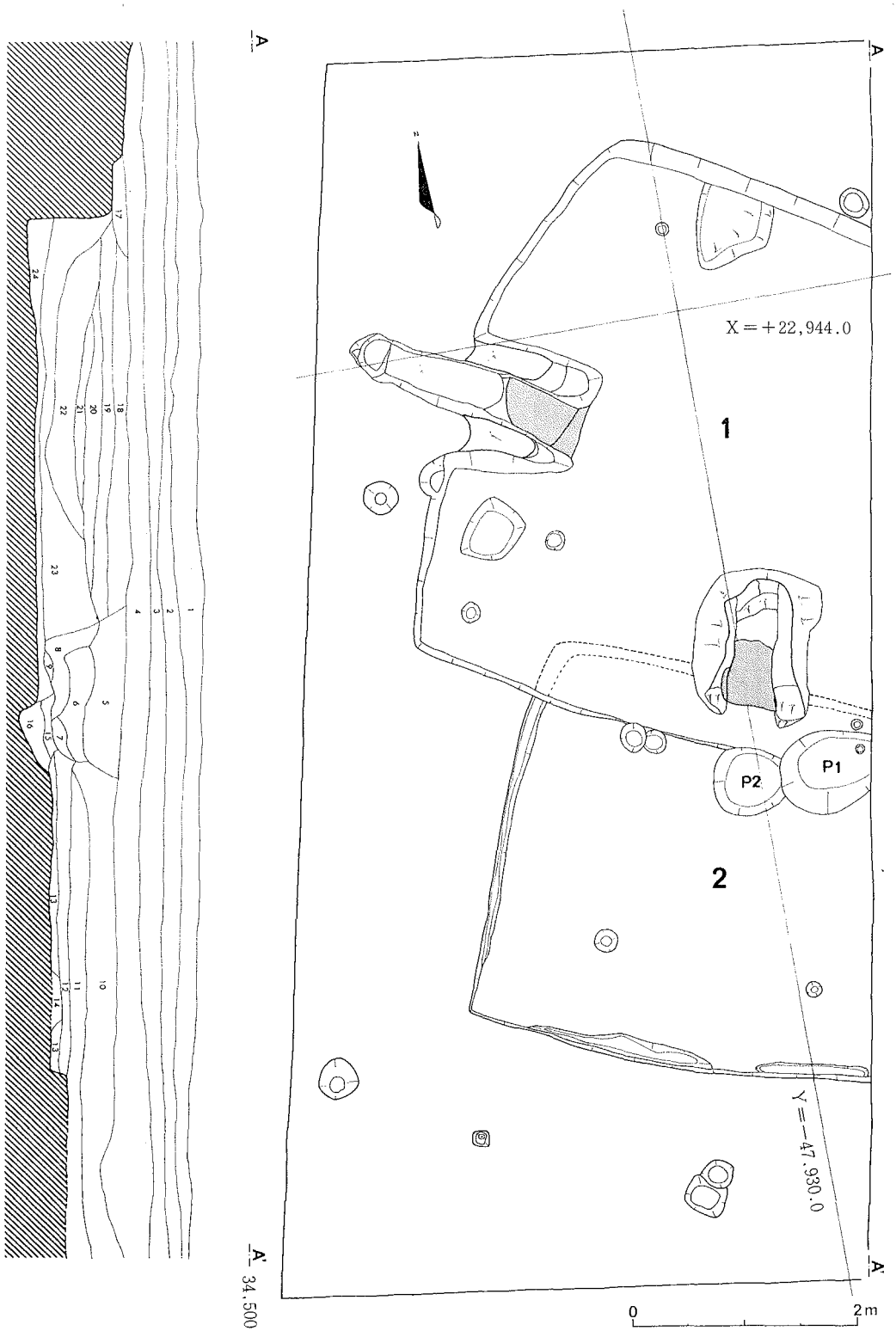
C区の遺構は、構築時期・性格ともに不明の竪穴遺構1基などである。第1号竪穴遺構は、コーナーが内向きに丸くなっており、出土遺物はない。なお、C区からは弥生土器の小破片と思われる遺物も出土したが、図示しうるものはなかった。

A区、B区、C区とも調査面積が50～60m^{2}と狭かったため、住居跡や竪穴遺構は、全体が把握できたものはなかった。また、遺構の覆土は暗灰褐色土を主体とし、地山との判別が非常に困難であった。

2．遺構と出土遺物

(1)　A区の調査

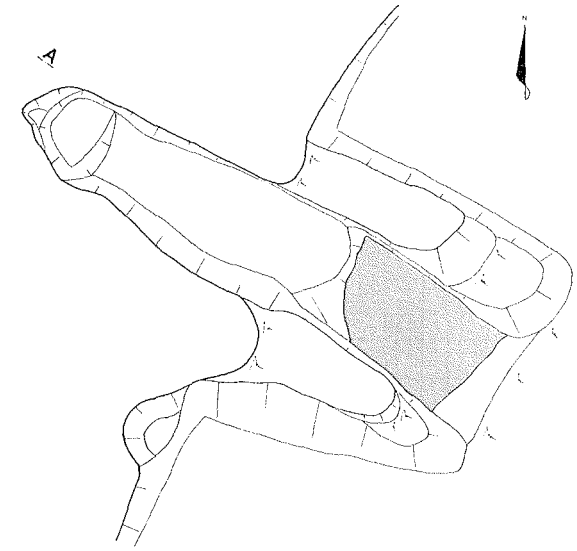
a．第1号住居跡（第3図）



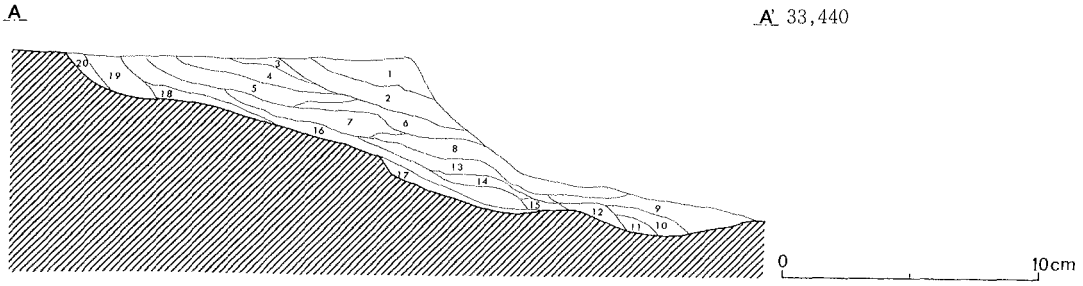
第3図　A区全測図（1／60）

前ページの土層注記

1．表　　土
2．褐 色 土（炭化物を少量、小石を含む。しまり悪い）
3．灰褐色土（炭化物を少量、浮石を多量に含む。しまり悪い）
4．暗褐色土（焼土・炭化物・浮石を少量含む）
5．　〃　（焼土・炭化物を少量含む）
6．黒褐色土（焼土・炭化物を多く含む）
7．　〃　（焼土・炭化物を少量含む）
8．黄褐色土（焼土・炭化物を少量、砂を含む）
9．灰褐色土（焼土・炭化物を少量含む。粘性強い）
10．黒褐色土（焼土・炭化物・砂を少量含む）
11．　〃　（焼土・炭化物を少量含む）
12．黄褐色土（焼土・炭化物を少量、砂を多く含む）
13．褐 色 土（焼土・炭化物を少量含む）
14．黄褐色土（焼土・炭化物を少量含む。粘性強い）
15．暗灰褐色土（焼土・炭化物を多く、砂を少量含む）
16．黄灰褐色土（焼土・炭化物を少量、砂を多く含む）
17．灰褐色土（焼土・炭化物を少量、砂を多く含む）
18．灰褐色土（焼土を少量含む。しまり良い）
19．褐 色 土（焼土を少量含む。しまり良い）
20．暗褐色土（焼土を少量含む。しまり良い）
21．黒褐色土（焼土を含む。粘性強い）
22．黒褐色土（焼土を多量に含む。粘性強い）
23．灰褐色土（焼土・炭化物を少量含む。粘性強い）
24．褐 色 土（焼土・炭化物・砂を少量含む）



1．黄褐色土（砂を少量含む）
2．　〃　（焼土・炭化物を少量含む）
3．焼　　土
4．褐 色 土（焼土を含む）
5．焼　　土
6．黒褐色土（炭化物を含む）
7．焼　　土
8．黒褐色土（焼土をわずかに含む）
9．黄褐色土（砂質）
10．　〃　（砂質、焼土をわずかに含む。しまり悪い）
11．　〃　（褐色土混入）
12　〃（砂質、褐色土混入。11より明るい）
13．焼　　土（ブロック状、黒色土混入）
14．黒褐色土（砂質、焼土塊を少量含む。しまり悪い）
15．黒 色 土（砂質、炭化物を多く、焼土を少量含む）
16．黄褐色土（砂質、焼土をわずかに含む。しまり悪い）
17．焼　　土
18．黄褐色土（焼土を少量含む）
19．暗褐色土
20．褐 色 土（焼土をわずかに含む）



第4図　A区第1号住居跡カマド（1／30）

第5図　A区第1号住居跡遺物出土状態（1／40）

A区の北側に位置する。住居跡全体の約80%を調査しえたものと思われる。

主軸方向はN—61°—Wで、カマドは西辺のほぼ中央に構築されている。西辺は長さ5.0mで、カマドを中心に若干張り出している。南辺は第2号住居跡、第1号土坑、第2号土坑により破壊されている。床面はほぼ平坦であり、深さは確認面より70cm前後で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は認められなかった。

カマドの南脇に皿状の浅い土坑がある。0.6m×0.45mの長円形状を呈し、深さは約20cmである。北辺際の不整形を呈する土坑も深さ約20cmほどの浅いものである。柱穴状のピットも認められたが、径10～20cm、深さ8～15cmほどの小さなものである。

カマドはわずかに北を向いており、主軸方向はN—60°—Wである。袖は枯土質の暗灰褐色土、暗褐色土により作られており、袖中にも焼土層などがみられた。焚き口は床面より少し低くなっており、幅は45cmである。燃焼部は壁の内側にあり、下半部のみ残存した支脚が置かれていた。少しの段差をもって緩やかに高くなる煙道部が壁外へ延び、その先端は確認面よりの深さ約40cmのピットとなっている。なお、燃焼部の土層において、崩れ落ちた天井部が認められた。

遺物は住居跡の全面から何重にも重なった状態で非常に多量に出土した。そのほとんどが土師器であり、須恵器は微少破片が数点出土したのみである。土玉、滑石製臼玉なども出土した。

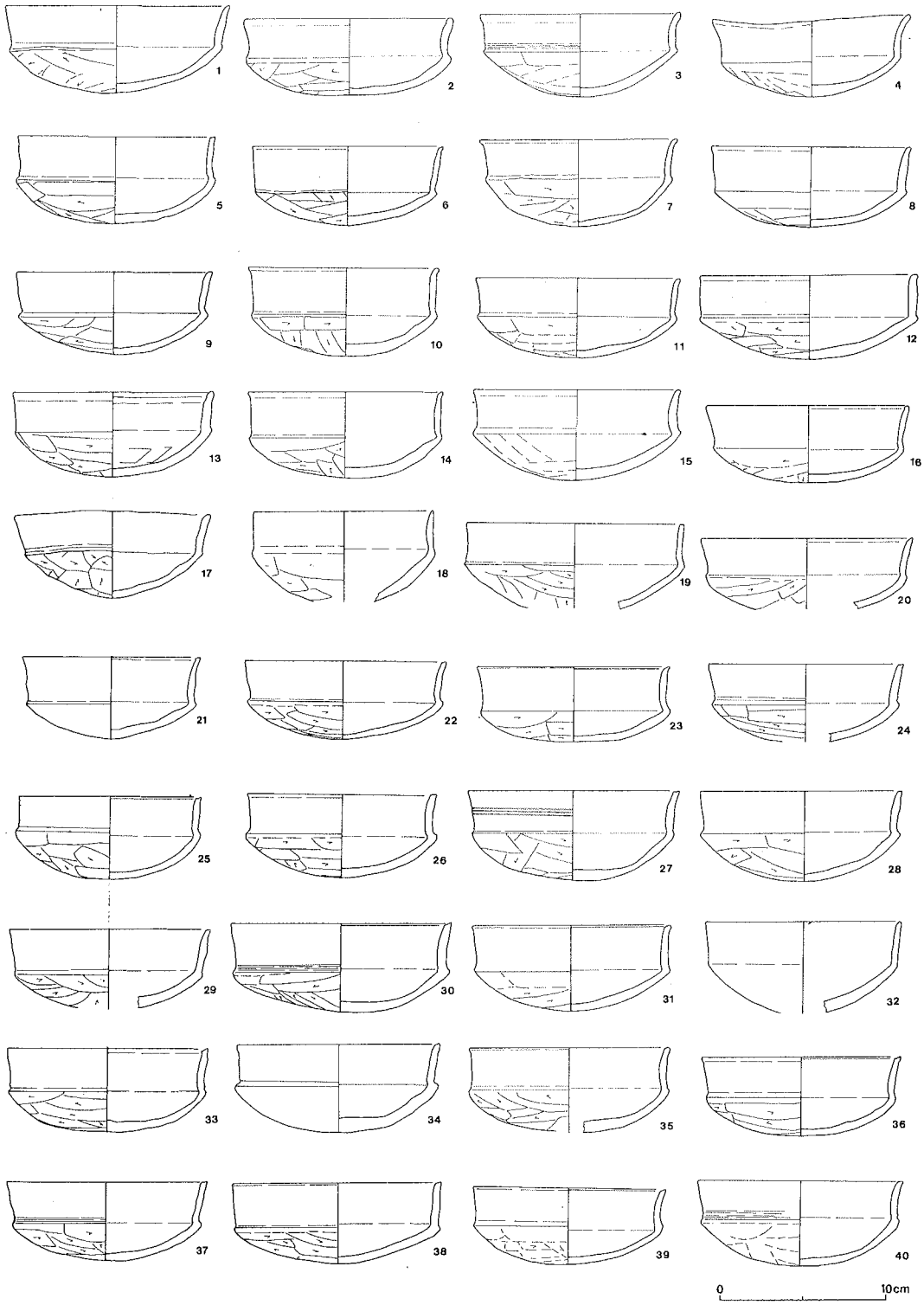
覆土は暗灰褐色土を主体とし、覆土中には焼土・炭化物を多量に含んでいた。

第1号住居跡出土遺物（第6図～第22図）

ア．土師器坏・埦（第6図1～第10図170）

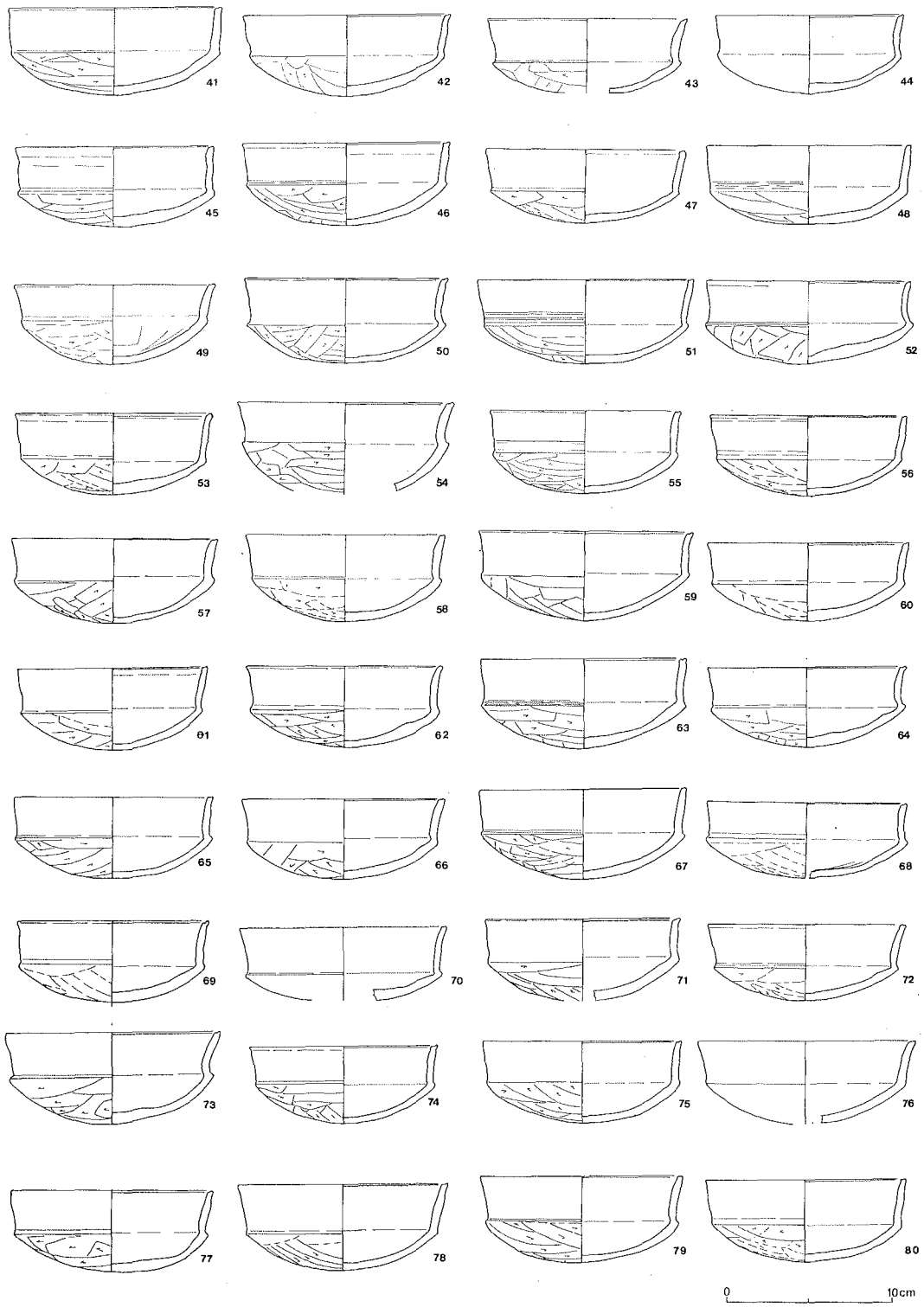
番号	器種	口　径	器高	特　　徴	残存率
1	坏	13.7	5.4	口唇部やや尖る。OB～BℓB。	80%
2	〃	12.6	4.7	口唇部は丸い。LB。	50%
3	〃	12.2	5.1	口唇部は丸く、稜直上に細い沈線。胎土砂を少量含む。DB。	80%
4	〃	12.0	4.0	やや歪曲。口唇部は丸い。O。	90%
5	〃	(12.0)	5.4	口唇部は上面が平坦で沈線あり。O、体部外面Bℓ。	50%
6	〃	11.5	4.8	口唇部は上面が平坦で沈線あり。LB。	90%
7	〃	(12.0)	5.4	体部は比較的深い。胎土砂を含み、焼成やや不良。LB。	50%
8	〃	(12.0)	4.9	口唇部は上面がやや平坦。LB。	40%
9	〃	(12.0)	5.1	口唇部は丸い。DB。	30%
10	〃	11.5	5.2	口唇部は丸い。胎土砂を少量含む。OB～YW。	90%
11	〃	12.5	4.9	口唇部は丸い。OB～DB。	60%
12	〃	(13.0)	5.2	口唇部は上面がやや平坦。焼成良好。外面DB～Bℓ。内面OB。	40%
13	〃	(11.5)	4.7	口唇部は丸く、内面に沈線。体部内面ヘラナデの後指ナデ。胎土砂を含み、焼成良。RB。	40%
14	〃	(12.0)	5.3	口唇部は内側がやや平坦。LB。	50%
15	〃	(12.5)	5.6	口唇部は丸い。OB。	50%
16	〃	12.5	4.7	口唇部内面に沈線。胎土砂を少量含み、焼成やや不良。LB。	60%
17	〃	12.0×10.5	5.4	かなり歪曲。口唇部は丸い。胎土砂・小石を含む。O。	完形
18	〃	(11.0)	(5.8)	口唇部やや尖る。胎土砂を少量含み、焼成やや不良。O～YW。	20%
19	〃	(13.0)	(5.3)	口唇部は上面がやや平坦。焼成良好。YW～YB。	20%
20	〃	(13.0)	(4.3)	口唇部は内面が平坦でやや尖る。焼成良好。DB～OB。	20%

番号	器種	口　径	器高	特　　徴	残存率
21	坏	(11.0)	(5.0)	口唇部内面に沈線。胎土砂を少量含む。ＬＢ～Ｏ。	20%
22	〃	12.2	4.8	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＹＷ～Ｏ。	90%
23	〃	11.7	4.6	かなり歪曲。口唇部上面平坦。胎土砂を少量含む。Ｏ～ＯＢ。	完形
24	〃	(12.0)	4.7	口唇部は上面が平坦で沈線あり。Ｏ～ＯＢ。	40%
25	〃	11.2	5.1	かなり歪曲。口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ～ＹＷ。	完形
26	〃	(13.0)	5.1	口唇部上面平坦、沈線不明瞭。胎土砂を少量含む。ＯＢ～ＤＢ。	50%
27	〃	12.8	5.5	口唇部上面平坦、口縁部中位に細い沈線。胎土砂を含む。ＬＯ。	完形
28	〃	(12.0)	5.5	口唇部は上面がやや平坦。胎土砂を少量含む。Ｏ。	50%
29	〃	12.2	4.8	口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＯＷ～Ｏ。	80%
30	〃	13.2	5.4	口唇部上面平坦。稜直上に数条の細い沈線。Ｏ、底面Bℓ。	90%
31	〃	12.2	5.2	口唇部は上面が平坦。Ｏ～ＯＢ。	完形
32	〃	(11.5)	(4.8)	口唇部は内側がやや平坦。ＹＷ～ＯＢ。	50%
33	〃	12.2	5.1	口唇部上面平坦沈線あり。胎土砂を少量含み、焼成良好。ＲＢ。	60%
34	〃	12.1	5.4	口唇部上面やや平坦。稜直上に沈線。胎土砂を少量含む。ＹＷ。	90%
35	〃	(12.0)	(5.1)	口唇部上面に沈線あり。胎土砂を多く含み、焼成良好。ＲＢ。	30%
36	〃	(12.0)	(4.8)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	30%
37	〃	12.5	4.8	口唇部上面平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＤＢ～ＯＢ。	完形
38	〃	12.6	4.9	口唇部上面やや平坦。ＯＷ～Ｏ。	完形
39	〃	11.8	4.8	口唇部上面平坦で沈線の痕跡あり。ＯＷ～Ｏ、体部外面に黒斑。	90%
40	〃	12.4	5.2	口唇部上面平坦。稜直上に数条の細い沈線。ＯＷ～Ｏ。	完形
41	〃	(13.0)	(5.2)	口唇部上面平坦で沈線あり。体部内面へラナデの後指ナデ。Ｏ。	40%
42	〃	(12.0)	(5.0)	口唇部は上面が平坦。ＯＢ。	30%
43	〃	(12.0)	(4.6)	口唇部上面平坦。稜は一部がつぶれている。ＯＷ。	20%
44	〃	(11.5)	(4.8)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	30%
45	〃	11.9	4.9	口唇部は上面が平坦。稜直上に沈線。ＹＷ～Ｏ。	90%
46	〃	12.6	5.1	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。焼成良好。ＤＢ。	70%
47	〃	12.0	4.5	口唇部上面平坦で沈線あり。胎土砂を含む。ＬＯ。	80%
48	〃	12.5	4.8	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に数条の細い沈線ＯＷ～Ｏ。	80%
49	〃	12.2	4.9	口唇部上面平坦沈線あり。体部内面へラナデの後指ナデ。ＯＢ。	完形
50	〃	12.4	5.2	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＲＢ。	完形
51	〃	13.0	5.2	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。焼成良好。ＲＢ。	70%
52	〃	12.4	5.1	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＬＲＢ。	90%
53	〃	11.9	5.0	口唇部は内側が平坦で沈線あり。Ｏ～ＯＷ。	80%
54	〃	(13.0)	(5.8)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＯＢ～BℓB。	40%
55	〃	11.5	5.1	口唇部上面平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＤＢ～ＯＢ。	80%
56	〃	11.9	4.9	口唇部上面平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＯＢ～ＯＷ。	完形
57	〃	12.4	5.2	口唇部は上面が平坦で沈線が巡る。ＹＷ。	60%
58	〃	12.2	5.3	口唇部は上面が平坦で一部沈線あり。ＤＢ。	完形
59	〃	12.9	5.4	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ～ＲＢ。	完形



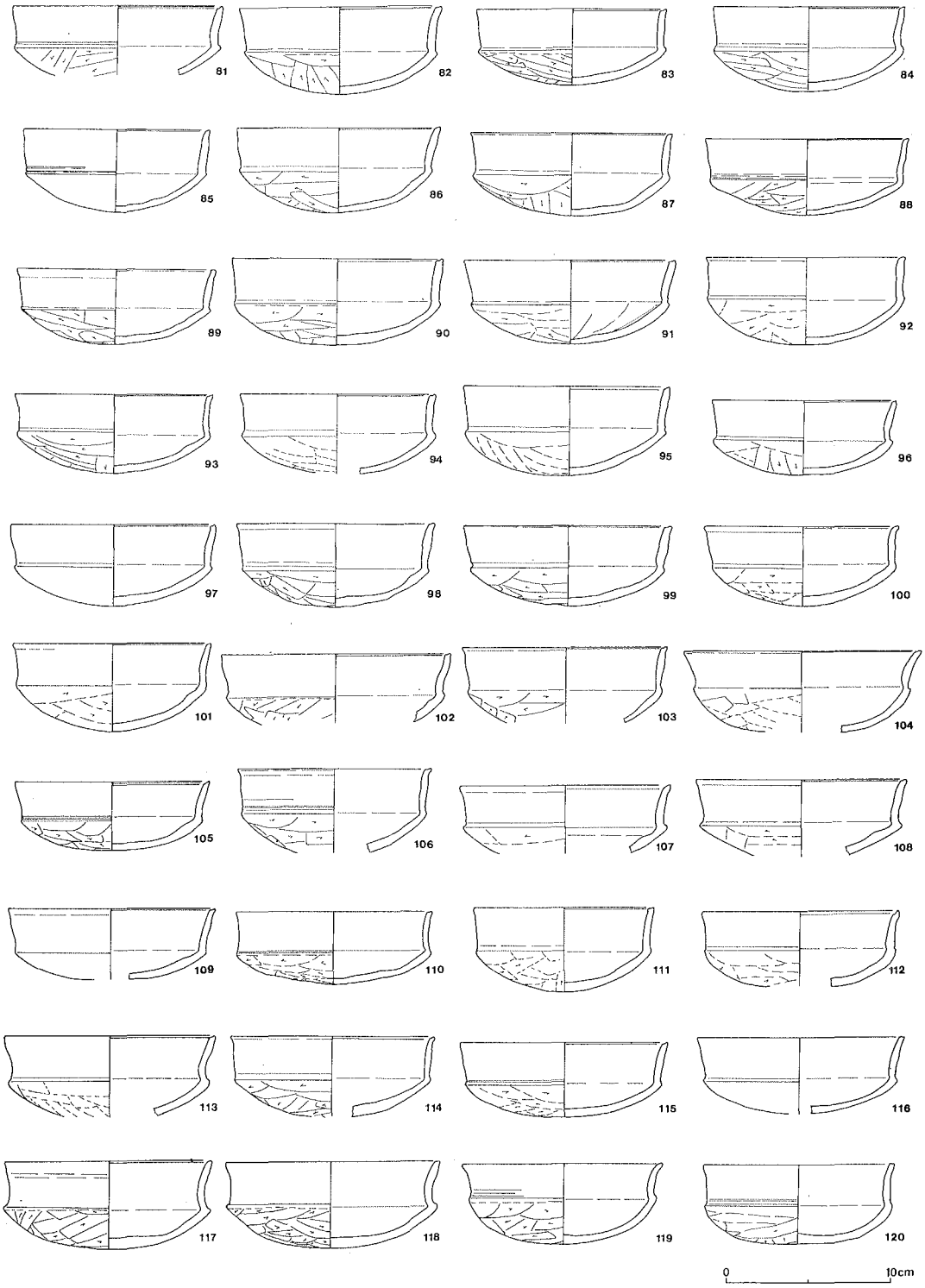
第6図　A区第1号住居跡出土遺物(1) (1/4)

番号	器種	口　径	器高	特　　徴	残存率
60	坏	(12.0)	4.8	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	50%
61	〃	11.5	5.0	口唇部上面平坦沈線あり。口唇部内面も沈線状。ＯＢ。	60%
62	〃	12.0	5.0	口唇部上面やや磨滅しているが沈線の痕跡あり。ＯＢ。	90%
63	〃	12.5	5.5	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。Ｏ～ＤＢ。	60%
64	〃	12.0	4.9	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＲＢ～ＯＲ。	完形
65	〃	12.0	5.0	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＯＷ～Ｏ。	完形
66	〃	12.4	4.9	口唇部上面平坦、沈線の痕跡が一部にあり。ＬＢ。	90%
67	〃	12.5	5.5	口唇部上面やや平坦で一部に沈線あり。稜直上に細い沈線。焼成良好。ＤＲＢ。	90%
68	〃	(12.0)	4.6	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上浅い沈線状。ＤＢ～ＬＢ。	50%
69	〃	11.6	5.0	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	完形
70	〃	(12.5)	(4.5)	やや歪曲。口唇部上面平坦一部沈線あり。焼成やや不良。ＬＢ。	40%
71	〃	(12.0)	(5.0)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。Ｏ。底部外面黒斑。	50%
72	〃	(12.5)	(4.7)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。Ｏ。	50%
73	〃	12.0	5.6	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＲＢ。	90%
74	〃	11.6	4.8	口唇部上面平坦沈線あり。体部内面ヘラナデの後指ナデ。ＯＢ。	90%
75	〃	12.0	5.0	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	80%
76	〃	(12.0)	5.1	口唇部は上面が平坦で沈線の痕跡あり。Ｏ。	40%
77	〃	12.2	5.0	口唇部は上面が平坦で一部に沈線あり。焼成良好。Ｏ。	完形
78	〃	12.8	5.3	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。ＯＢ。	60%
79	〃	12.4	5.2	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成良好。ＲＢ。	90%
80	〃	12.2	5.4	口唇部は上面が平坦で沈線あり。Ｏ。	完形
81	〃	(12.5)	(4.3)	口唇部上面平坦で内傾し沈線あり。稜直上に細い沈線。Ｏ。	30%
82	〃	12.2	5.4	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ～ＬＢ。	完形
83	〃	11.5	4.0	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＲＯ～ＬＢ。	完形
84	〃	11.8	5.2	口唇部上面が平坦で沈線の痕跡あり。Ｏ。	完形
85	〃	11.2	5.0	口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。胎土砂をやや多く含み、焼成やや不良。ＬＢ～Ｏ。	70%
86	〃	12.4	5.3	口唇部は上面が平坦。ＤＢ～ＯＢ。	80%
87	〃	12.2	5.1	口唇部は上面が平坦。体部はやや歪曲。ＯＢ。	90%
88	〃	12.8	4.7	やや歪曲。口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＬＢ。	80%
89	〃	12.0	4.6	口唇部上面平坦、内面細い沈線状。稜直上に細い沈線。Ｏ。	完形
90	〃	12.8	5.3	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＢ～ＯＢ。	完形
91	〃	(13.0)	5.1	口唇部上面平坦沈線あり。体部内面に縦の砂の動き。ＬＢ～Ｏ。	40%
92	〃	12.2	5.3	口唇部は上面がやや平坦。Ｏ～ＤＢ。	60%
93	〃	(12.0)	4.9	口唇部上面平坦で浅く沈線状。稜直上に細い沈線。ＤＢ～ＲＢ。	50%
94	〃	(12.0)	4.9	口唇部は上面が平坦で沈線あり。Ｏ～ＬＧＢ。	40%
95	〃	12.6	5.5	口唇部上面平坦で一部に沈線あり。稜直上に細い沈線。Ｏ。	80%
96	〃	11.2	4.6	やや歪曲。口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＬＢ～Ｏ。	完形

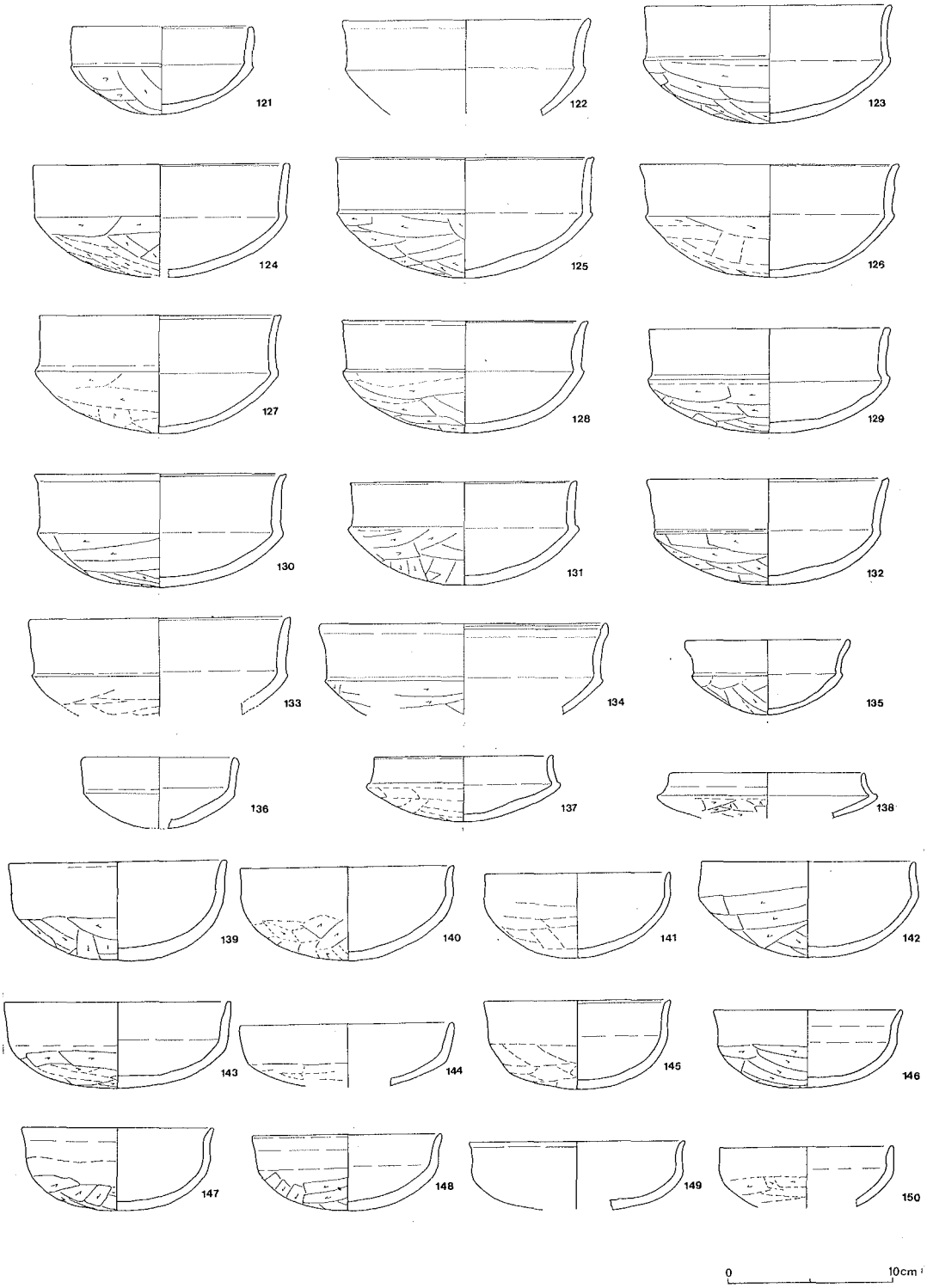


第７図　Ａ区第１号住居跡出土遺物(2)（1／4）

番号	器種	口　径	器高	特　　徴	残存率
97	坏	(12.5)	5.0	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＹＷ～Ｏ。	30%
98	〃	(12.0)	5.2	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。Ｏ。	70%
99	〃	(12.5)	4.7	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に太い沈線。ＬＯ～ＯＢ。	50%
100	〃	11.9	4.9	口唇部上面平坦沈線あり。稜直上に細い沈線。ＬＲＢ～ＤＢ。	90%
101	〃	12.0	5.4	口唇部は上面が平坦。ＬＤＢ。	60%
102	〃	(14.0)	(4.3)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	30%
103	〃	(12.5)	(4.6)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成やや不良。ＯＢ。	20%
104	〃	(14.5)	(4.5)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＯＢ。	20%
105	〃	(12.0)	4.2	口唇部平坦面が内傾し沈線あり。稜直上に細い沈線。ＤＢ～Ｂℓ。	20%
106	〃	(12.0)	(5.2)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＬＢ。	20%
107	〃	(13.0)	(4.2)	口唇部は平坦面が内傾し一部に沈線あり。ＤＢ～ＲＢ。	20%
108	〃	(13.0)	(4.7)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＹＷ。	20%
109	〃	(12.5)	(4.4)	やや歪曲。口唇部上面平坦で沈線あり。焼成やや不良。ＬＢ。	20%
110	〃	(12.0)	4.5	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＯＢ。	20%
111	〃	(11.0)	5.1	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＹＷ。	20%
112	〃	(12.0)	(4.6)	口唇部やや尖り内側に沈線あり。ＬＢ～ＬＯ。	20%
113	〃	(13.0)	(5.0)	口唇部は上面が平坦で浅く沈線状。焼成良好。ＬＢ。	30%
114	〃	(12.5)	4.7	口唇部上面平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＯＢ～ＹＷ。	30%
115	〃	(12.5)	4.1	口唇部上面平坦沈線の痕跡。稜直上に細い沈線。ＢℓＢ～ＹＷ。	20%
116	〃	(12.5)	(4.2)	口唇部は上面が平坦。ＲＢ。	20%
117	〃	12.6	5.4	口唇部上面やや平坦。焼成良好。ＲＢ～ＬＢ。	完形
118	〃	13.2	5.3	口唇部は上面が平坦。ＲＯ～ＬＢ。	完形
119	〃	12.1	5.0	口唇部やや丸い。稜直上に細い沈線。Ｂℓ～ＹＷ。	90%
120	〃	(11.5)	4.8	口唇部は上面が平坦で沈線あり。胎土砂を含む。ＤＢ。	40%
121	〃	(11.0)	5.4	口唇部は上面が平坦。胎土砂を含む。Ｏ。	40%
122	〃	(15.0)	(5.8)	口唇部は丸い。稜直上に細い沈線。ＯＢ。	20%
123	〃	(15.0)	7.3	口唇部はやや尖る。体部内面へラナデの後指ナデ。ＯＢ～ＢℓＢ。	60%
124	〃	(16.0)	(7.0)	口唇部上面やや平坦、内面に細い沈線。ＲＢ。	30%
125	〃	(16.0)	7.4	口唇部上面平坦で沈線あり。稜直上に細い沈線。ＯＢ～ＬＢ。	40%
126	〃	15.6	7.0	口唇部は上面が平坦で沈線の痕跡あり。ＬＯＢ。	80%
127	〃	.8	7.3	口唇部上面平坦で沈線あり、内面にも浅く沈線状。ＹＷ。	完形
128	〃	15.0	6.9	口唇部は上面が平坦。ＬＢ～Ｏ。	80%
129	〃	14.6	6.4	口唇部上面平坦沈線の痕跡あり。稜直上に細い沈線。Ｏ～ＹＷ。	70%
130	〃	15.9	7.0	やや歪曲。口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＲＢ。	80%
131	〃	13.6	6.4	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＤＢ～ＯＢ。	80%
132	〃	14.7	6.5	口唇部上面平坦沈線の痕跡。稜直上に細い沈線。ＤＢ～ＯＢ。	80%
133	〃	(16.0)	(6.0)	やや歪曲。口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＲＢ～ＢℓＢ。	40%
134	〃	(17.5)	(5.6)	口唇部やや尖り内面に沈線。稜直上に細い沈線。ＤＢ～ＯＢ。	10%
135	〃	(10.0)	4.6	口縁部外反しやや開く。口唇部は丸い。ＤＢ～ＯＢ。	50%



第８図　Ａ区第１号住居跡出土遺物3)（1／4）

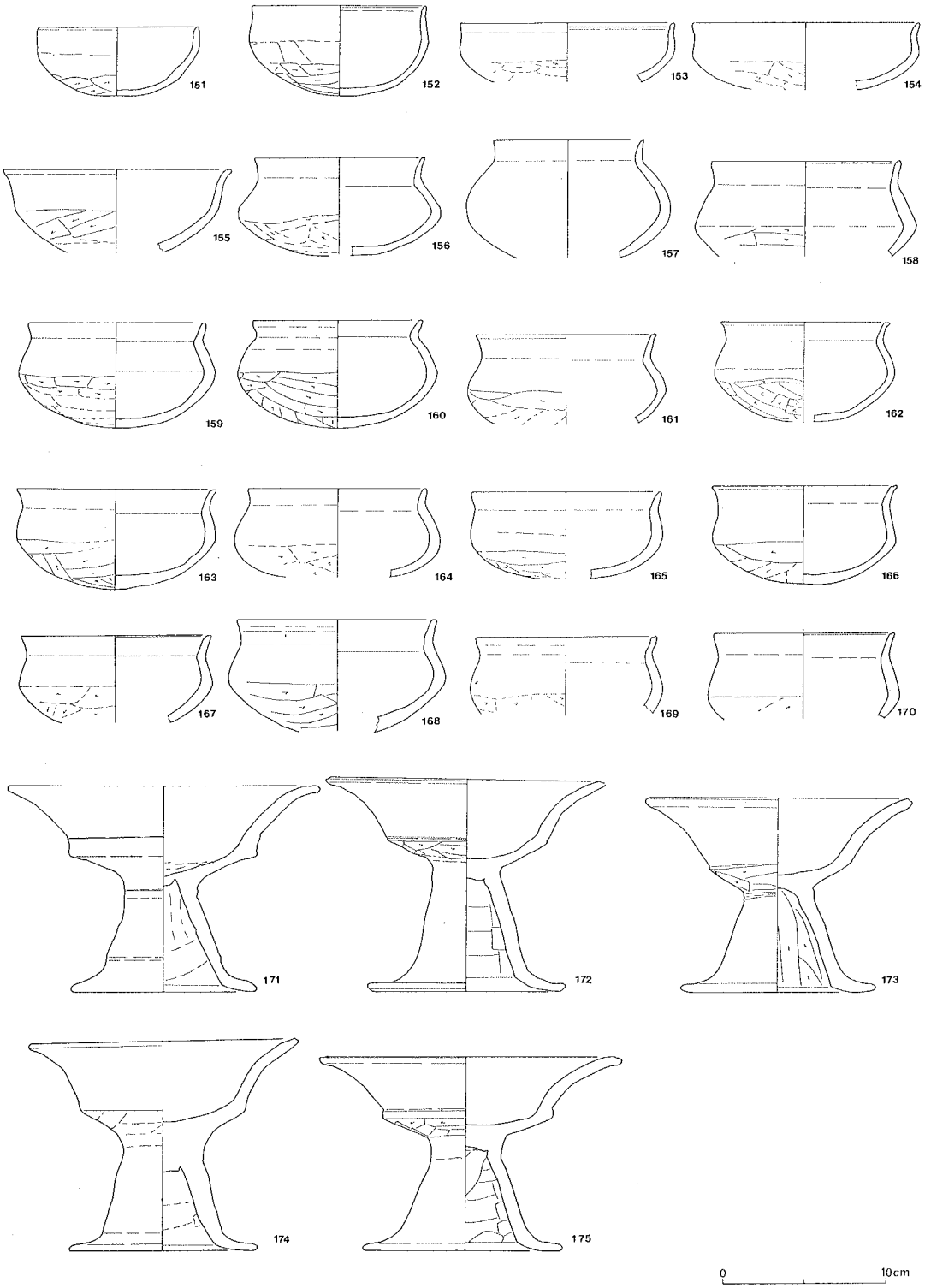


第９図　Ａ区第１号住居跡出土遺物4)（1／4）

番号	器種	口　径	器高	特　　徴	残存率
136	坏	9.8	4.4	口唇部やや尖る。胎土砂を少量含む。ＬＢ。	60%
137	〃	(11.0)	4.0	稜直上に沈線。第２号住居跡からの流入か。	50%
138	〃	(12.0)	(2.8)	第２号住居跡からの流入か。	10%
139	〃	13.4	6.0	口唇部は丸い。焼成やや不良。ＬＢ～Ｏ。	完形
140	〃	13.0	5.0	口唇部は丸い。ＬＢ～Ｏ。	完形
141	〃	11.3	5.2	口唇部は細くやや尖る。体部やや歪曲。ＤＢ。	70%
142	〃	(13.0)	5.9	口唇部は丸い。焼成やや不良。ＲＢ。	70%
143	〃	(14.0)	5.3	口唇部は上面がやや平坦で内側が押えられている。ＯＢ。	40%
144	〃	(13.0)	4.0	口縁部と体部の境は屈曲して弱い稜を作り出す。Ｏ～ＬＢ。	20%
145	〃	11.5	5.5	口唇部は上面が平坦で沈線あり。焼成やや不良。ＬＢ～ＤＢ。	80%
146	〃	11.5	4.8	やや歪曲。口唇部は細くやや丸い。ＬＯＢ。	90%
147	〃	11.9	5.1	口唇部やや尖る。焼成やや不良。ＬＢ～ＤＢ。	80%
148	〃	11.5	4.7	口唇部は丸い。ＬＯＢ。	完形
149	〃	11.6	(4.2)	やや浅い器形。口唇部細く丸い。ＬＢ。	20%
150	〃	(10.5)	(3.8)	小型で歪曲。口唇部は細く丸い。ＤＢ。	40%
151	〃	10.0	4.3	小型で口唇部やや尖る。ＬＢ。	80%
152	〃	10.7	5.6	口唇部内面に沈線あり。ＲＢ。	60%
153	〃	(13.0)	(3.7)	口唇部内面に沈線あり。ＯＢ。	40%
154	〃	(14.0)	(4.1)	口唇部やや尖る。焼成やや不良。ＯＷ。	20%
155	〃	(14.0)	(5.2)	口縁部外反して開く。口唇部は丸い。ＯＢ。	20%
156	埦	(10.5)	(6.1)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＧＢ。	30%
157	〃	(10.5)	(7.3)	口唇部は上面が平坦。ＯＢ。	20%
158	〃	(11.5)	(5.9)	口唇部は上面が平坦で沈線の痕跡あり。焼成良好。ＤＢ。	20%
159	〃	10.9	6.5	底部はやや平坦。焼成良好。ＯＢ。	90%
160	〃	10.5	6.7	口唇部は上面がやや平坦。焼成良好。Ｏ。	完形
161	〃	(11.0)	(5.6)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＢ。	30%
162	〃	(10.0)	(6.2)	口唇部上面平坦沈線あり。体部内側へラナデの後指ナデ。ＤＢ～ＬＢ。	30%
163	〃	(12.0)	6.2	口唇部は上面が平坦で沈線の痕跡あり。ＬＢ～ＯＢ。	80%
164	〃	(11.0)	(5.5)	口唇部上面平坦沈線あり。底部内面へラナデの後指ナデ。ＯＷ。	10%
165	〃	(11.5)	(5.4)	口唇部は丸い。ＯＢ。	30%
166	〃	(11.5)	(6.0)	かなり歪曲。口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＢ。	60%
167	〃	(12.0)	(5.4)	口唇部は上面がやや平坦。ＯＢ。	30%
168	〃	(12.0)	(6.9)	口唇部は上面がやや平坦。ＤＢ～ＯＢ。	20%
169	〃	(11.0)	(4.8)	口唇部は上面が平坦で沈線あり。ＬＢ。	20%
170	〃	(11.0)	(5.3)	口唇部は上面が平坦で沈線の痕跡あり。焼成良好。ＤＢ。	10%

土師器坏・埦は、全般的に、若干軽質で器面がやや磨滅している。

１～121はいわゆる模倣坏である。口径は12～13cm前後、器高は５cm前後である。口縁部は、中



第10図　A区第1号住居跡出土遺物5)（1／4）

位にふくらみを有して少し外傾又は外反するものが多く、口唇部はわずかに外反するものが多い。104のように口縁部が外反してかなり開くものもある。体部は丸く、全般的にやや浅い。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラ削りである。体部内面はよくナデられており、ヘラナデの後指ナデが施されたことが認められるものもある。口唇部は丸いものもあるが、上面が平坦に成形され、おそらくは爪などによる沈線が施されたものが多い。口縁部と体部の境の稜の直上にも爪などにより施されたと思われる沈線が1条又は数条施されたものがある。34・45・68・99は、稜直上にやや太い沈線が巡っている。なお、高坏の可能性があるものも若干数含まれている。

122～134は大型のものである。口径は15cm前後、器高は7cm前後である。形態や調整の様子は1～121に類似するが、口縁部はあまり開かず、口径と稜の部分の径はほぼ同一である。124・134のように口唇部内面に爪などによる沈線が巡るものがある。

135・136は小型のものである。口径は10cmほど、器高は4.5cmほどである。

137・138は、口縁部が内傾し、口唇部と体部の境の稜がつき出した浅いものである。第2号住居跡との切り合い付近より出土し、第2号住居跡から流入したものである可能性がある。

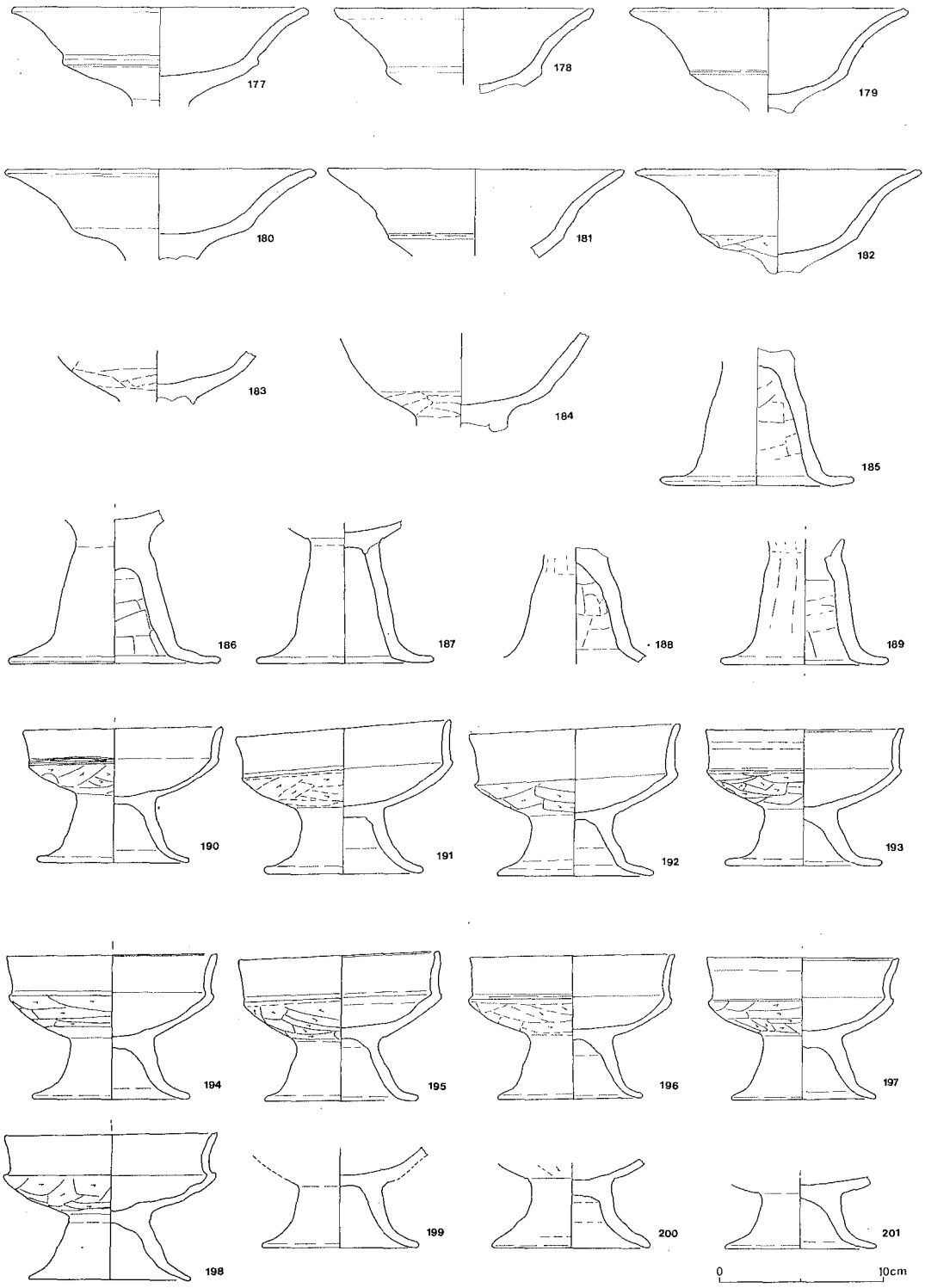
139～155は、口縁部と丸い体部の境が不明瞭なものである。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラ削り、体部内面はよくナデられている。口唇部はわずかに外反するものが多く、内面が平坦にナデられてやや尖るもの、145のように上面に爪などによる沈線が施されたものなどがある。144は口縁部が外傾し、浅い体部との境に弱い稜がある。151は口縁部が外反してかなり開く。

156～170は、口縁部「く」字状に屈曲し、丸く張った体部を有する埦である。最大径を体部中位に有するものが多く、やや下位になるものや、口径とあまりかわらないものもある。口唇部の上面が平坦に成形されているものがあり、爪などによる沈線が施されているものもある。口縁部及び体部外面上位は横ナデ、体部外面下位はヘラ削り、体部内面はよくナデられている。

なお1～170の中に、内面からの圧力により亀裂が入ったと思われるものがある。

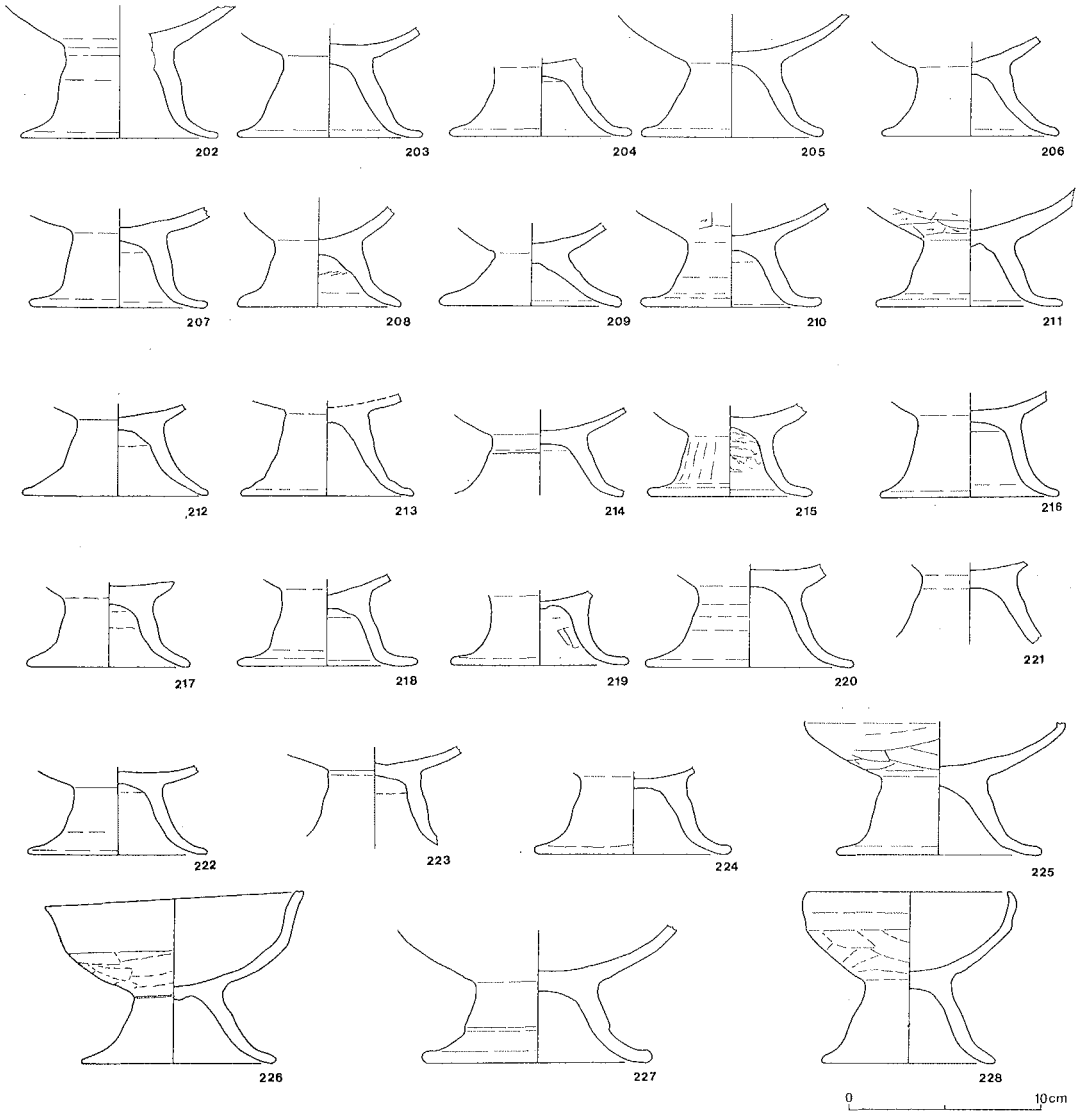
イ．土師器高坏（第10図171～第12図228）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
171	高坏	19.1	11.4	12.8	稜の上・頸部に細い沈線。脚部内面ヘラ削り。OB～LB。	完形
172	〃	17.2	12.2	13.1	口唇部・稜直上に細い沈線。脚部内面ヘラ削り。焼成良好。OB。	完形
173	〃	16.5	(12.0)	12.0	口唇部・稜直上の一部・頸部に細い沈線。脚部内面ヘラ削り。焼成良好。OB～LOB。	80%
174	〃	16.6	11.5	13.0	口唇部の一部に細い沈線。脚部内面ヘラ削り。OB。	80%
175	〃	(18.5)	12.3	12.0	口唇部上面及び稜の上に細い沈線。脚部内面ヘラ削り。LOB。	70%
177	〃	18.1	—	(6.1)	口唇部外面平坦。稜直上に沈線。焼成良好。LO。	坏90%
178	〃	(16.0)	—	(5.3)	口唇部上面平坦沈線あり。稜以下はへら削り。OB。	坏30%
179	〃	(17.0)	—	(6.5)	口唇部外面平坦沈線あり。稜直上に沈線。O～LD。	坏30%
180	〃	18.8	—	(5.6)	口唇部外面平坦、その下側の一部に沈線。焼成良好。OB。	坏90%



第11図　A区第1号住居跡出土遺物(6)（1／4）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
181	高坏	(18.0)	—	(5.3)	口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＯＢ。	坏50%
182	〃	17.4	—	(6.4)	口唇部上面平坦沈線あり。稜以下はヘラ削り。ＯＢ。	坏完形
183	〃	—	—	(3.2)	坏部下位はやや丸く外面ヘラ削り。胎土小石含む。ＲＢ。	
184	〃	—	—	(5.7)	坏部やや深く、外面下位はヘラ削りの後ナデか。ＯＢ。	
185	〃	—	11.8	(8.5)	脚部内面は横位のヘラ削りの後ナデ。焼成良好。ＯＢ。	脚90%
186	〃	—	(13.0)	(9.4)	脚部内面横位のヘラ削り。裾端部に細い沈線。焼成良好。ＯＢ～ＬＯＢ。	脚80%
187	〃	—	(11.0)	(7.7)	脚部内面は横位のヘラ削りの後ナデか。ＬＯＢ。	脚30%
188	〃	—	—	(7.2)	脚部内面は横位のヘラ削りの後ナデ。Ｏ～ＬＯＢ。	
189	〃	—	(10.0)	(7.7)	外面縦位のヘラ削りの後ナデ。内面横位のヘラ削りの後ナデ。外面ＬＯＢ、内面ＹＷ。	脚30%
190	〃	12.1	9.3	8.5	口唇部丸い。稜直上に細い沈線。ＯＢ。	完形
191	〃	13.2	9.5	9.7	口唇部丸い。稜直上に細い沈線。ＬＯ。	完形
192	〃	11.8	9.3	9.6	口唇部丸い。ＯＢ。坏部内面ＹＷ。	90%
193	〃	12.0	8.4	9.5	口唇部は上面が平坦。ＯＢ。	完形
194	〃	12.7	9.6	8.9	口唇部は上面が平坦。稜直上は浅く沈線状。焼成良好。Ｏ～ＬＯ。	90%
195	〃	12.3	9.5	9.4	口唇部上面やや平坦。稜直上浅く沈線状。焼成良好。ＯＢ。	完形
196	〃	12.4	9.8	8.8	口唇部上面平坦沈線。稜直上浅く沈線状。焼成良好。Ｏ。	完形
197	〃	11.8	8.8	8.7	口唇部上面平坦で沈線あり。焼成良好。Ｏ～ＯＢ。	完形
198	〃	12.9	9.9	8.9	口唇部上面平坦沈線あり。稜は鋭い。焼成良好。ＬＯＢ。	90%
199	〃	—	9.6	(6.1)	坏部外面剝落。脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ。	脚90%
200	〃	—	9.6	(5.2)	脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ、脚部内面Ｂℓ Ｂ。	脚完形
201	〃	—	9.2	(4.4)	脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ。	脚70%
202	〃	—	(10.5)	(7.1)	やや大型。脚内面はヘラ削りの後若干のナデ。ＬＤ～ＬＢ。	脚30%
203	〃	—	9.6	(5.8)	脚部内面は丁寧なナデ。ＹＷ～ＬＤ。	脚90%
204	〃	—	(9.0)	(4.1)	焼成やや不良。胎土には気泡多い。ＯＢ。	脚30%
205	〃	—	9.6	(6.5)	脚内面丁寧なナデ。ＬＢ、坏内面ＤＢ、脚内面Ｂℓ。	脚60%
206	〃	—	9.4	(5.0)	坏部かなり傾く。脚部内面ヘラ削りの後丁寧なナデ。ＯＢ。	脚80%
207	〃	—	9.4	(5.2)	脚部内面丁寧なナデ。ＯＢ～ＬＢ。	脚50%
208	〃	—	8.6	(5.8)	坏部は小さいものか。脚内面ヘラ削りの後ナデ、中位以上の調整は粗い。Ｏ。	脚完形
209	〃	—	9.5	(4.4)	かなり低い脚。裾端部下面沈線状。脚内面丁寧なナデ。Ｏ。	脚完形
210	〃	—	9.6	(5.5)	脚部内面は丁寧なナデ。裾端部は平坦。ＯＬ。	脚70%
211	〃	—	9.8	(6.3)	脚部内面はナデ、天井部中央がボタン状隆起。ＬＯ。	脚80%
212	〃	—	(10.0)	(4.9)	やや歪曲。脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ。	脚50%
213	〃	—	(9.0)	(5.0)	脚部内面ヘラ削りの後ナデ。坏部内面剝落。ＬＯ～Ｏ。	脚30%
214	〃	—	—	(4.5)	脚部内面ヘラ削りの後ナデか。ＬＯ。	
215	〃	—	8.8	(5.4)	脚部内面ヘラ削りの後粗いナデ。外面ヘラ削りの後ナデ。	脚80%



第12図　A区第1号住居跡出土遺物7)（1／4）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
216	高坏	—	9.3	(5.5)	脚部内面は丁寧なナデ。ＬＢ。	脚80%
217	〃	—	(8.5)	(4.5)	脚部内面は丁寧なナデ。Ｏ。	脚30%
218	〃	—	(9.5)	(4.5)	脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ。	脚70%
219	〃	—	(9.5)	(4.0)	脚部内面ヘラ削りの後ナデ。天井部ボタン状隆起。ＬＢ。	脚60%
220	〃	—	(11.0)	(5.4)	脚部内面は丁寧なナデ。焼成良好。ＯＢ。	脚60%
221	〃	—	—	(4.3)	脚部内面ヘラ削りの後ナデ。ＯＢ。	
222	〃	—	9.5	(4.6)	脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ～ＤＢ。	脚70%
223	〃	—	—	(5.4)	脚部内面は丁寧なナデ。ＯＢ。	
224	〃	—	10.2	(4.4)	脚部内面は丁寧なナデ。焼成良好。	脚70%

番号	器種	口 径	底 径	器 高	特　　徴	残存率
225	高坏	—	(12.0)	7.0	坏部はやや大型か。脚部内面丁寧なナデ。ＯＢ～ＬＲＢ。	脚80%
226	〃	13.6	10.2	9.1	口唇部上面平坦で沈線あり。坏部の口縁部と体部の境は不明瞭。脚部内面丁寧なナデ、天井部ボタン状隆起。ＬＯＢ。	90%
227	〃	—	12.0	(7.0)	脚部外面中位に明瞭な段。脚部内面丁寧なナデ。ＤＢ。	脚80%
228	〃	11.0	9.0	9.1	坏部はやや小型で口縁部と体部の境は不明瞭。脚部内面は丁寧なナデ。ＬＯ。	90%

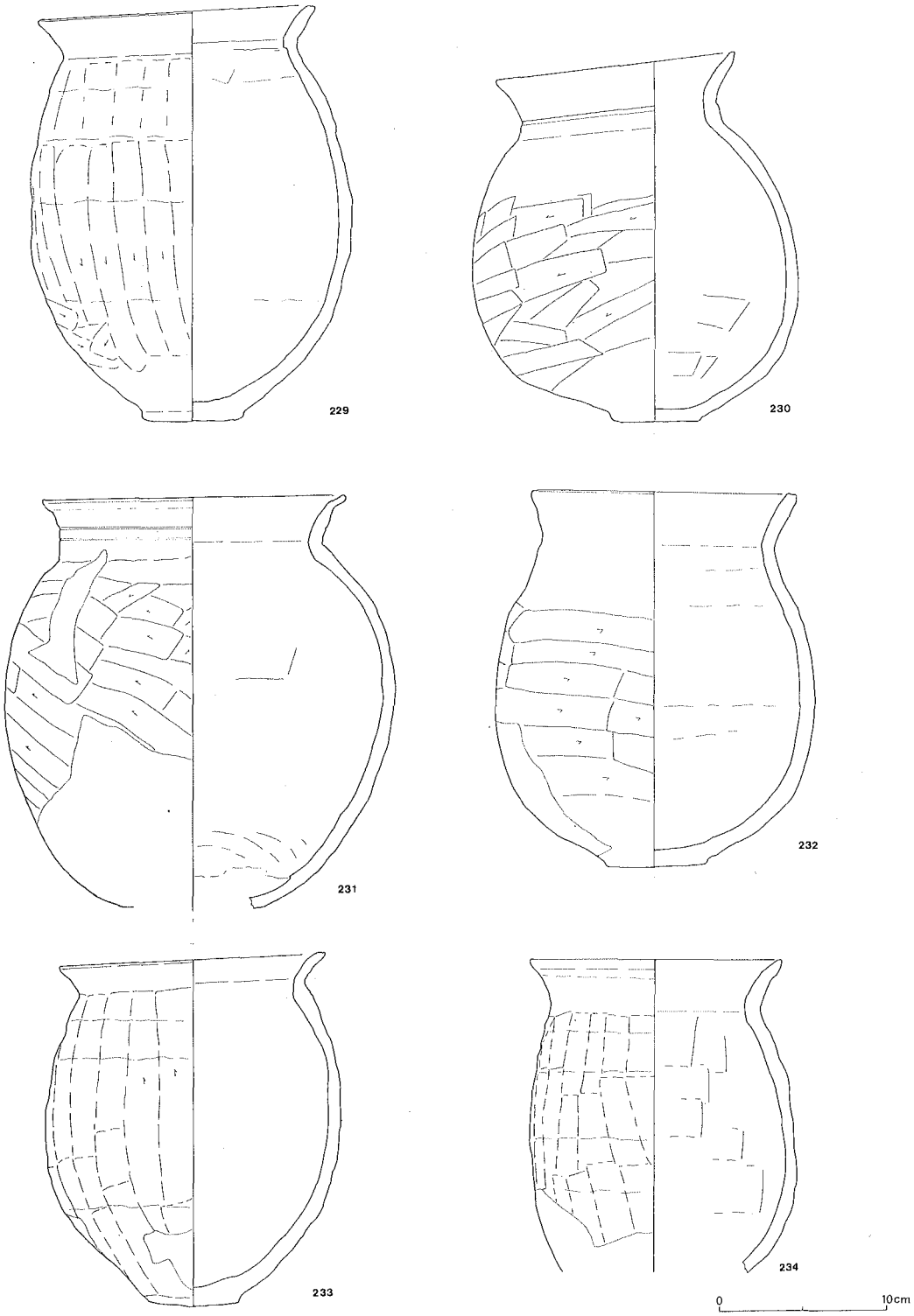
171～189は、和泉式の特徴を受け継いだものである。口縁部は外反して大きく開き、体部下位は屈曲して稜を有する。接合部は締めつけられ、脚部は少し「ハ」字状に開き、若干の丸みを有している。裾は屈曲して平坦に広がる。調整は、口縁部は横ナデ、坏部の体部外面下位（稜以下）はヘラ削り。脚部内面はヘラ削り、又はヘラ削りの後若干のナデ、脚部外面は丁寧にナデられているが、縦位のヘラ削りの後ナデられたものであろう。裾はよくナデられている。171・172～176・182・184・185・187・189などは坏部と脚部の接合の様子が明瞭である。なお、口唇部の上面、坏部の体部外面の稜の上、坏部と脚部の接合部の外面等に、爪などによると思われる細い沈線が施されたものがある。

190～225は、小さい脚の上にいわゆる模倣坏が乗ったものである。坏部の形態が確認できるものは190～198である。口縁部は外反又は外傾し、口唇部上面は平坦なもの、平坦で爪などによる沈線が施されたものが多い。稜直上にも爪などによる細い沈線が施されたものがある。202・205・211・225などの坏部はやや大きかったものと思われる。脚部は、「ハ」字状に開くもの、上位が締められて直立気味になるものなどがあるが、裾は外反して広がり、端部は丸い。209の脚部はかなり低い。脚部の内外面は丁寧にナデられているが、190・193・199・202・206・208・214・215・219・221は脚部内面は、ヘラ削りの後にナデられたようである。196・197・220は、脚部内面が底を上にみて右回転方向にナデられたことが明瞭である。215の脚部外面は縦方向のヘラ削りの後にナデられたようである。なお、器面はやや磨滅したものが多い。

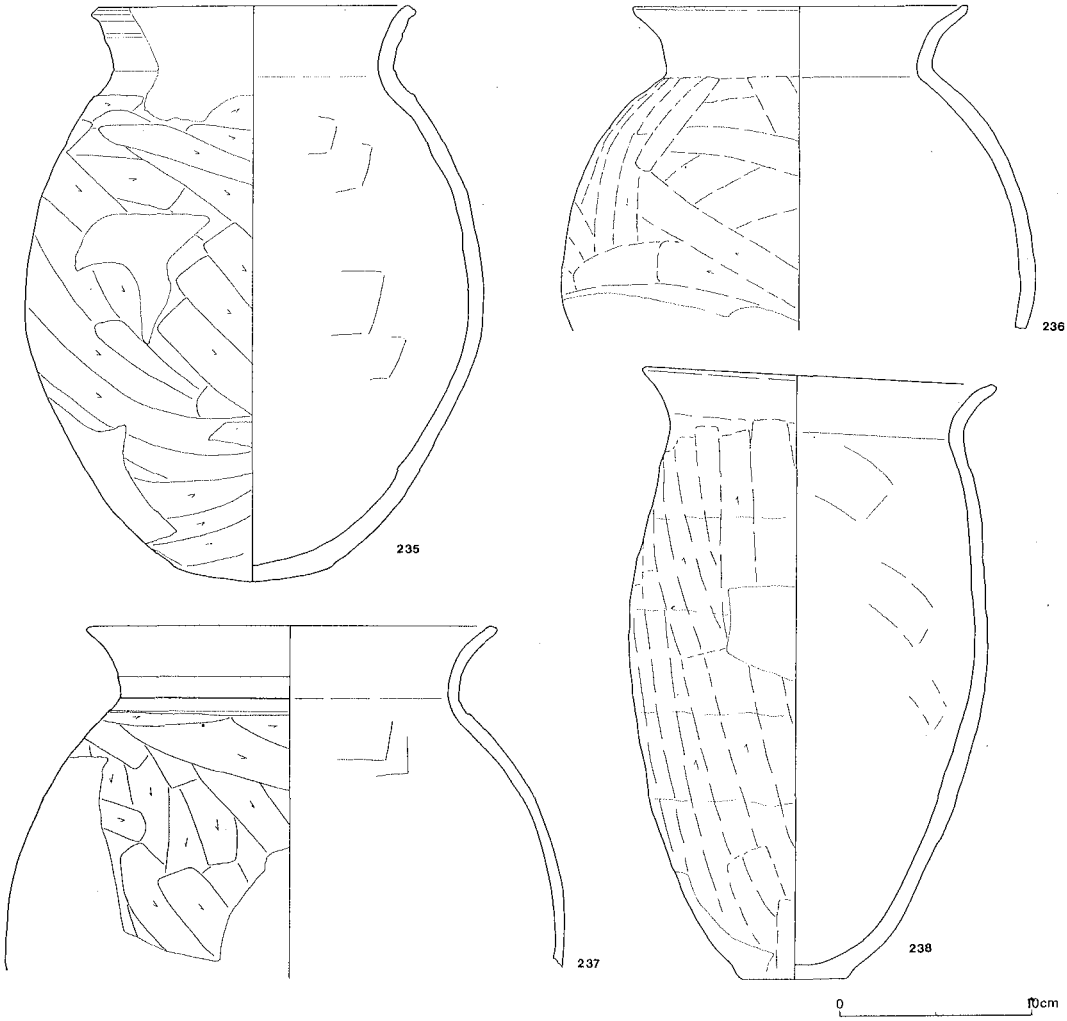
226は、口縁部が外反して開き、坏部の口縁部と体部の境があまりはっきりしないもので、190～198とは形態が異なる。227は底径が大きく、大型の坏部が乗っていたと思われるものである。脚部外面中位に段状の部分を有する。228は、小型の坏部が乗ったものである。口縁部は内彎気味で口唇部はやや尖っている。

ウ．土師器甕・壺（第13図229～第19図284）

番号	器種	口 径	胴 径	底 径	器 高	特　　徴	残存率
229	甕	16.5	19.1	6.0	24.9	口唇部上面平坦沈線あり。内面丁寧なナデ。内外面とも一部輪積痕明瞭。胎土砂を多く含む。ＯＢ。	完形
230	〃	14.4	19.4	5.1	22.5	頸部に沈線。肩部はナデられている。内面丁寧なナデ。胎土砂を含む。ＯＢ。	完形
231	〃	18.1	(24.0)	—	(25.2)	かなり歪曲。頸部に細い沈線。内面ヘラナデ。底は丸底気味か。肩部指の押圧。胎土砂を含むＬＢ。	40%
232	〃	16.6	(23.0)	(6.0)	23.1	口唇部上面平坦沈線あり。肩部はヘラ削りの後指	40%

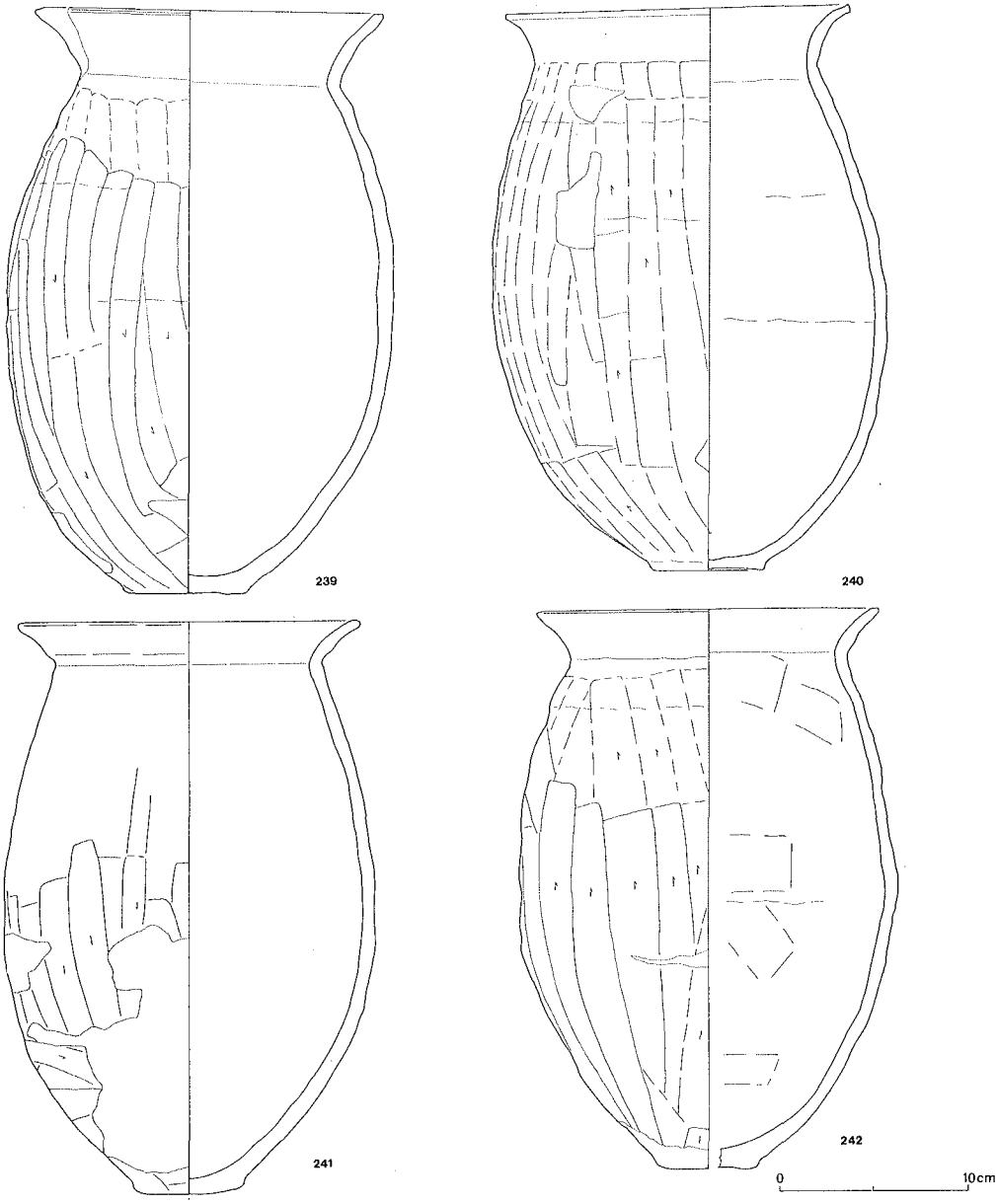


第13図　A区第1号住居跡出土遺物(8) (1／4)



第14図　A区第1号住居跡出土遺物(9) (1／4)

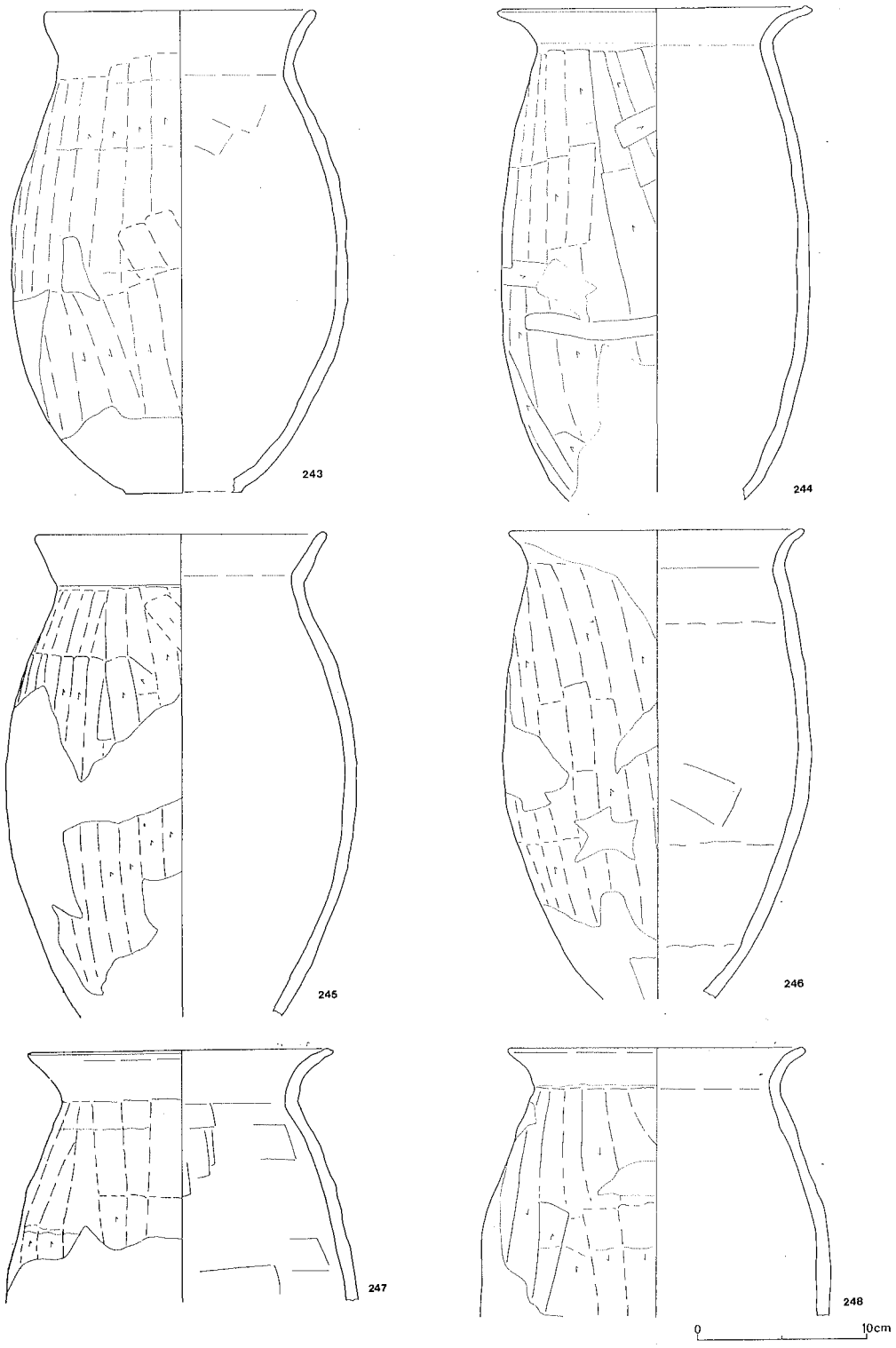
番号	器種	口径	胴径	底径	器高	特徴	残存率
233	甕	16.0	17.5	5.5	21.0	押圧・ナデ。内面丁寧なナデ。胎土砂含む。LB。口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデ。内外面とも一部輪積痕明瞭。胎土砂・小石含む。RB。	70%
234	〃	15.0	15.8	—	(19.0)	内面ヘラナデ。外面輪積痕明瞭。O～LOB。	70%
235	〃	(17.0)	(24.0)	8.5	30.5	かなり歪曲か。口唇部外面平坦沈線あり。口縁部中位に細い沈線。底面やや丸い。内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含む。OB。	30%
236	〃	17.4	24.9	—	(17.2)	内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含む。OB～DB。	—
237	〃	21.4	—	—	(18.3)	口唇部上面平坦。口縁部中位・頸部に細い沈線。内面ヘラナデ。胎土砂多く含。焼成良好。DB。	—
238	〃	18.5	18.8	6.0	32.5	内面ヘラナデ。外面輪積痕明瞭。胎土砂多く含む。	90%



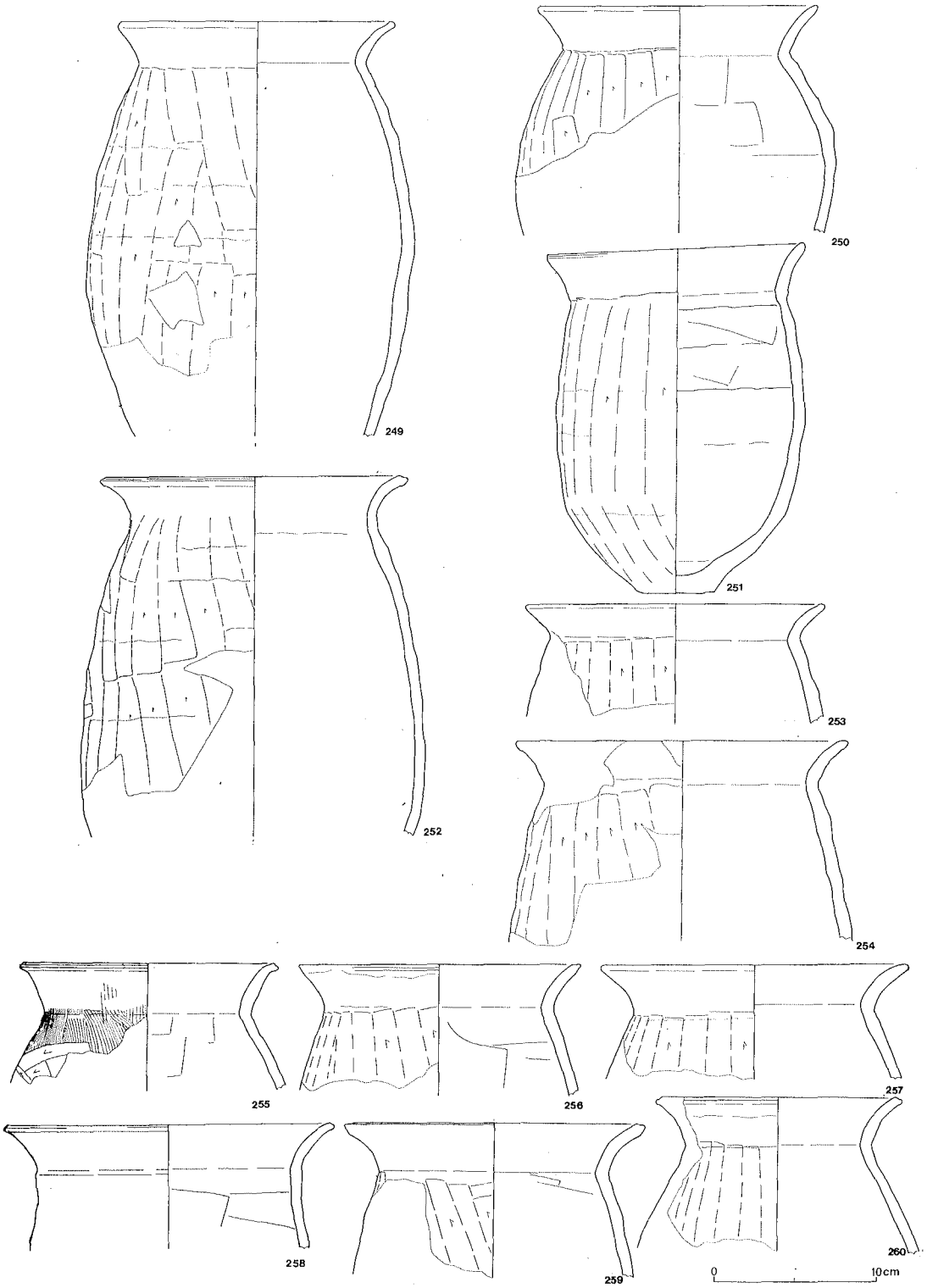
第15図　A区第1号住居跡出土遺物10)（1／4）

番号	器種	口径	胴径	底径	器高	特徴	残存率
239	甕	18.4	20.5	6.5	31.3	ＯＢ。 口唇部上面平坦で浅く沈線状。内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含。ＯＢ～ＤＢ。	80%
240	〃	18.3	20.9	6.0	30.0	口唇部外面平坦。内面ヘラナデ。内面の一部輪積痕明瞭。胎土砂を多く含む。ＬＯ。	完形
241	〃	(18.0)	(19.5)	(6.0)	30.6	胴部外面上位はヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデ。胎土砂を多く含む。ＬＢ。	40%

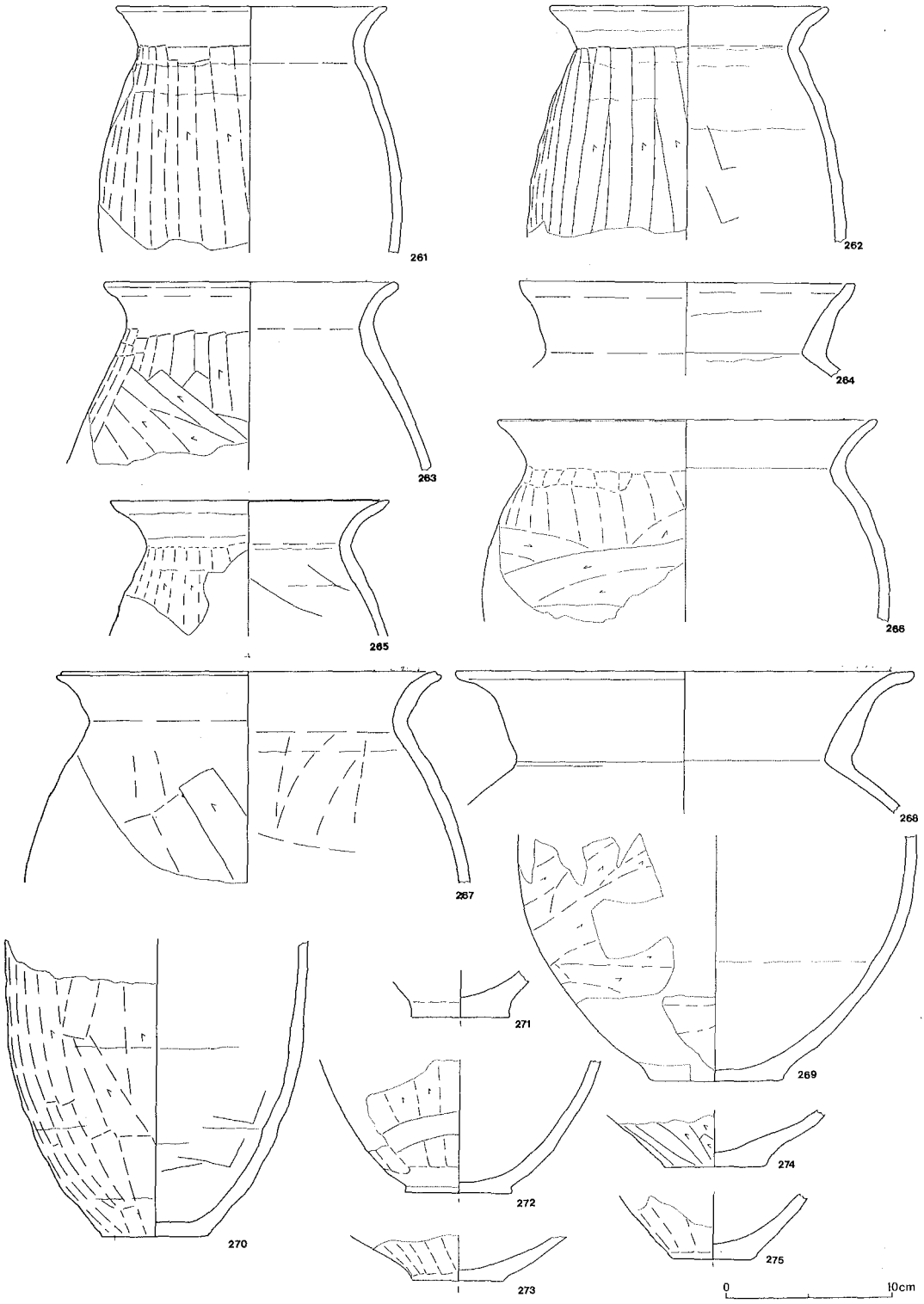
番号	器種	中径	胴径	底径	器高	特徴	残存率
242	甕	18.2	20.1	5.3	30.0	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデ。外面頸部直下に輪積痕。胎土砂を含む。ＹＷ～Ｏ。	80%
243	〃	16.0	19.8	(6.9)	28.9	外面輪積痕明瞭。内面ヘラナデ。胎土砂を多く含む。ＯＢ。	90%
244	〃	(18.5)	(18.0)	—	(29.0)	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデか。胎土砂を多く含む。ＹＷ。	20%
245	〃	(17.0)	(21.0)	—	(28.8)	外面頸部直下はヘラ削りの後ナデか。胎土砂を多く含む。ＯＢ。	30%
246	〃	(17.5)	(18.3)	—	(27.9)	内面横位のナデか。胎土砂・小石を含む。ＯＢ。	30%
247	〃	18.0	—	—	(15.0)	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデ。胎土砂を含む。ＹＷ。	—
248	〃	(17.5)	—	—	(16.0)	内面丁寧なナデ。胎土砂を含む。ＹＷ。	—
249	〃	17.0	20.6	—	(26.0)	内面丁寧なナデ。胎土砂・小石を含む。ＯＢ。	70%
250	〃	17.2	(19.5)	—	(12.0)	頸部部分的に細い沈線。内面ヘラナデ。胎土砂を多く含む。焼成やや不良。ＬＢ。	—
251	小型甕	15.9	15.4	4.8	21.8	口唇部外面の一部に細い沈線。内面ヘラナデ。内面輪積痕明瞭。ＬＯＢ。	完形
252	甕	(19.0)	(21.5)	—	(29.5)	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデの後ナデか。胎土砂を含む。ＯＢ。	—
253	〃	(18.5)	—	—	(7.5)	内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含む。ＹＷ。	—
254	〃	(20.5)	—	—	(12.6)	内面やや粗いナデ。胎土砂を多く含む。ＬＯ。	—
255	〃	(16.0)	—	—	(7.9)	口唇部外面平坦沈線あり。外面ハケ目調整の後ヘラ削り。内面ヘラナデ。胎土砂を含む。ＯＷ。	—
256	〃	(17.5)	—	—	(8.3)	口唇部上面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデ。胎土砂多く含む。ＬＢ。	—
257	〃	(19.0)	—	—	(7.2)	外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデの後ナデか。胎土砂を含む。ＯＷ。	—
258	〃	(20.5)	—	—	(7.8)	口唇部上面平坦一部沈線あり。外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデ。胎土砂を多く含む。ＬＢ。	—
259	〃	(18.5)	—	—	(9.7)	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデ。胎土砂を含む。外面Ｏ、内面ＯＢ。	—
260	〃	(15.0)	—	—	(9.8)	口唇部上面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後ナデか。内面丁寧なナデ。焼成良好。ＬＯＢ。	—
261	〃	(16.5)	(18.5)	—	(15.2)	口唇部上面平坦。内部ヘラナデの後ナデか。胎土砂を含む。ＯＷ。	—
262	〃	(17.0)	—	—	(14.5)	内面ヘラナデの後ナデか。胎土砂を含む。ＬＯ。	—
263	〃	(18.0)	—	—	(11.4)	内面丁寧なナデ。胎土砂を含む。焼成良好。ＯＷ。	—
264	〃	(20.5)	—	—	(5.8)	口唇部上面平坦。胎土砂を少量含む。ＬＯ。	—
265	〃	(17.0)	—	—	(8.4)	口唇部上面平坦。外面ヘラ削りの後ナデか。内面	—



第16図　A区第1号住居跡出土遺物(1)（1／4）



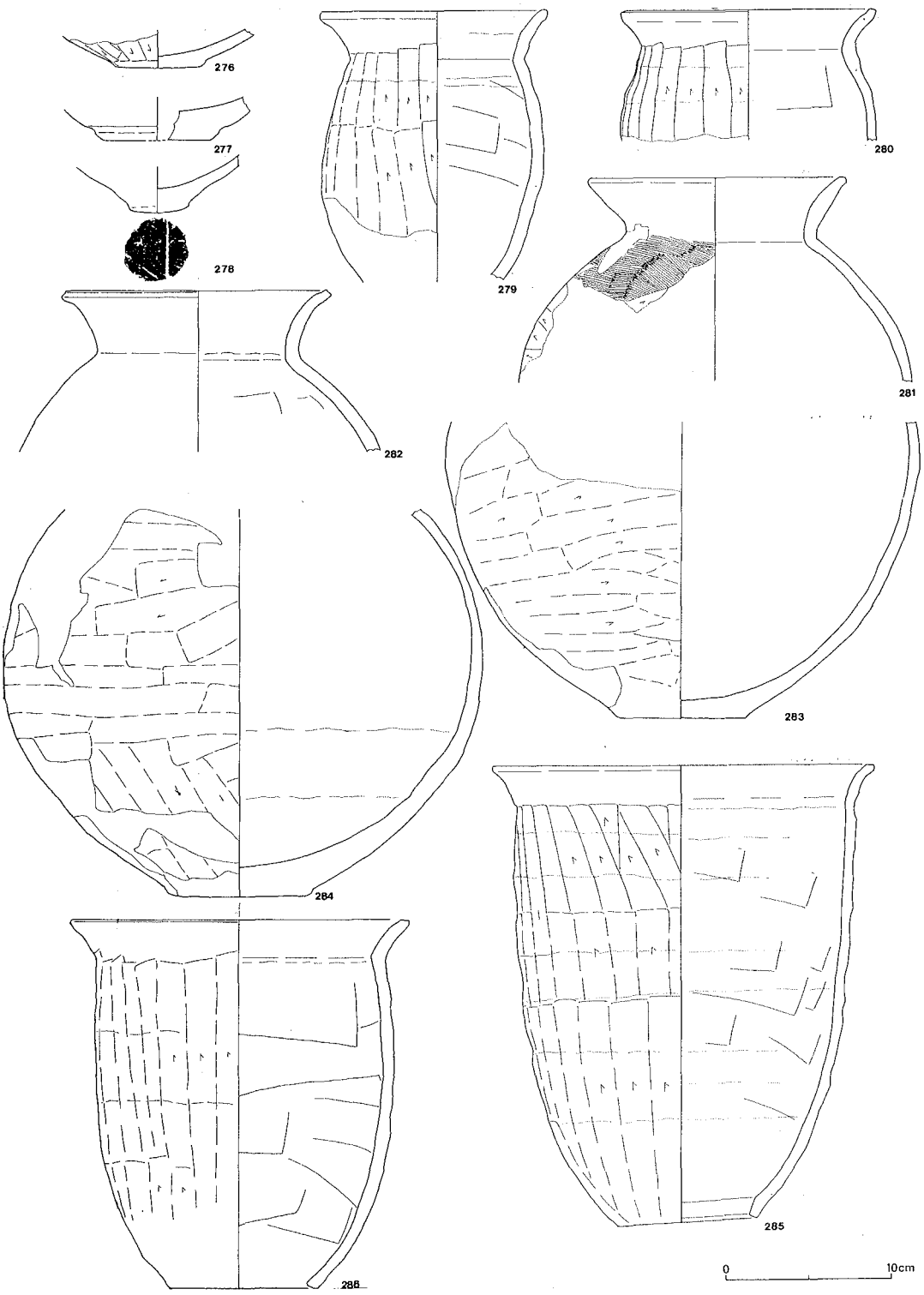
第17図　A区第1号住居跡出土遺物(12)（1／4）



第18図　A区第1号住居跡出土遺物13（1／4）

番号	器種	口径	胴径	底径	器高	特徴	
						ヘラナデ。胎土砂を含む。焼成やや不良。ＹＷ。	
266	甕	(23.0)	(25.0)	—	(12.5)	口唇部上面やや平坦。外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデか。胎土砂を含む。ＯＢ。	—
267	〃	(23.5)	—	—	(13.0)	口唇部外面に沈線。外面上位ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂を少量含む。ＬＯ。	—
268	壺	(28.0)	—	—	(8.3)	大型の壺形のものか。内面斑点状の剥離。胎土砂を少量含む。ＯＢ。	—
269	甕	—	—	7.4	(15.2)	内面ナデ、下位は粗い。胎土砂を多く含む。ＤＢ。	—
270	〃	—	(18.5)	(6.5)	(18.3)	内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂を含む。ＹＷ。	—
271	〃	—	—	(6.5)	(2.7)	胎土砂を含む。ＤＢ。	—
272	〃	—	—	6.4	(8.2)	胎土砂を多く含む。外面ＬＢ。内面ＬＧＢ。	—
273	〃	—	—	(5.5)	(2.8)	内面ヘラナでの後ナデか。胎土砂を含む。ＯＢ。	—
274	〃	—	—	6.1	(3.5)	内面丁寧なナデ。胎土砂を含む。ＯＷ～Ｏ。	—
275	〃	—	—	(4.5)	(5.1)	内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含む。ＯＢ～ＬＢ。	—
276	〃	—	—	5.2	(2.4)	内面丁寧なナデ。胎土砂を含む。ＹＷ～ＬＯ。	—
277	〃	—	—	(6.5)	(2.7)	胎土砂を含む。ＤＢ。	—
278	〃	—	—	3.6	(2.7)	小さい底部。底面はやや丸く木葉痕あり。胎土砂を少量含む。ＬＢ～ＬＯ。	—
279	小型甕	13.6	13.4	—	16.8	やや歪曲。内面ヘラナデ。外面輪積み痕明瞭。胎土砂を含む。ＤＢ。	70%
280	〃	(15.5)	(15.5)	—	(8.0)	口唇部上面平坦。内面ヘラナデ。胎土砂を多く含む。BℓＢ～ＤＢ。	—
281	壺	(15.5)	—	—	(12.6)	外面ハケ目調整の後ヘラ削り。内面ヘラナデ。胎土砂を含む。焼成良好。ＹＷ～ＬＢ。	—
282	〃	(16.0)	—	—	(10.0)	口唇部外面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデ。頸部内面直下は指の押圧。胎土砂を含む。焼成良好。ＹＷ～Ｏ。	—
283	〃	—	(30.0)	(10.0)	(24.0)	内面丁寧なナデ。胎土砂を少量含む。ＬＯ～Ｏ。	—
284	〃	—	(29.0)	(8.0)	(18.3)	内面横位のナデか。胎土砂を少量含む。ＯＢ。	—

土師器甕は、いわゆる甕形のもの、やや長胴化したもの、胴部が丸く張ったものなどがあり、頸部は「く」字状に屈曲したもの、屈曲の緩いもの、やや丸く外反したものなどがある。最大径は胴部中位になるものが多い。口唇部には爪などによる細い沈線が施されたものもある。調整は、器面の磨滅のために不明瞭なものが多いが、口縁部は横ナデ、胴部外面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデの後指ナデ（表にはヘラナデが確認できるもののみを記した）と思われる。胴部外面上位は、ヘラ削りの後に若干ナデられたと思われるものがある。底面は粗く削られたものが多い。255の胴部外面は、頸部直下にハケ目調整が認められ、その下はヘラ削りである。230～232・235はやや特異な形態を呈する。230は、頸部が直立気味で外面に沈線が巡っている。胴部外面は横方向のヘラ削りで、上位はナデられている。231は全体に歪曲しており、口縁部はあまり外傾せず口唇部が外反してい



第19図　A区第1号住居跡出土遺物(4)（1／4）

る。口縁部外面に細い沈線が2条巡っている。胴部外面は斜め方向のヘラ削りである。232は、頸部の屈曲が緩く、胴部外面は横方向のヘラ削りで上位はナデられている。235は、形態・手法が231に類似し、口縁部外面に細い沈線が1条巡っている。底面は丸みをもっている。

268は大型の壺形土器の口縁部と思われる。264も壺形を呈するものかもしれない。281～284は球形の胴部を有する壺形土器である。281は、頸部直下にハケ目調整が認められ、その下はヘラ削りである。281の胴部外面上位は、ヘラ削りの後ナデられているようである。なお、第2号住居跡の方に記載した26・27の壺形土器も、第1号住居跡に伴うものと考えられる。

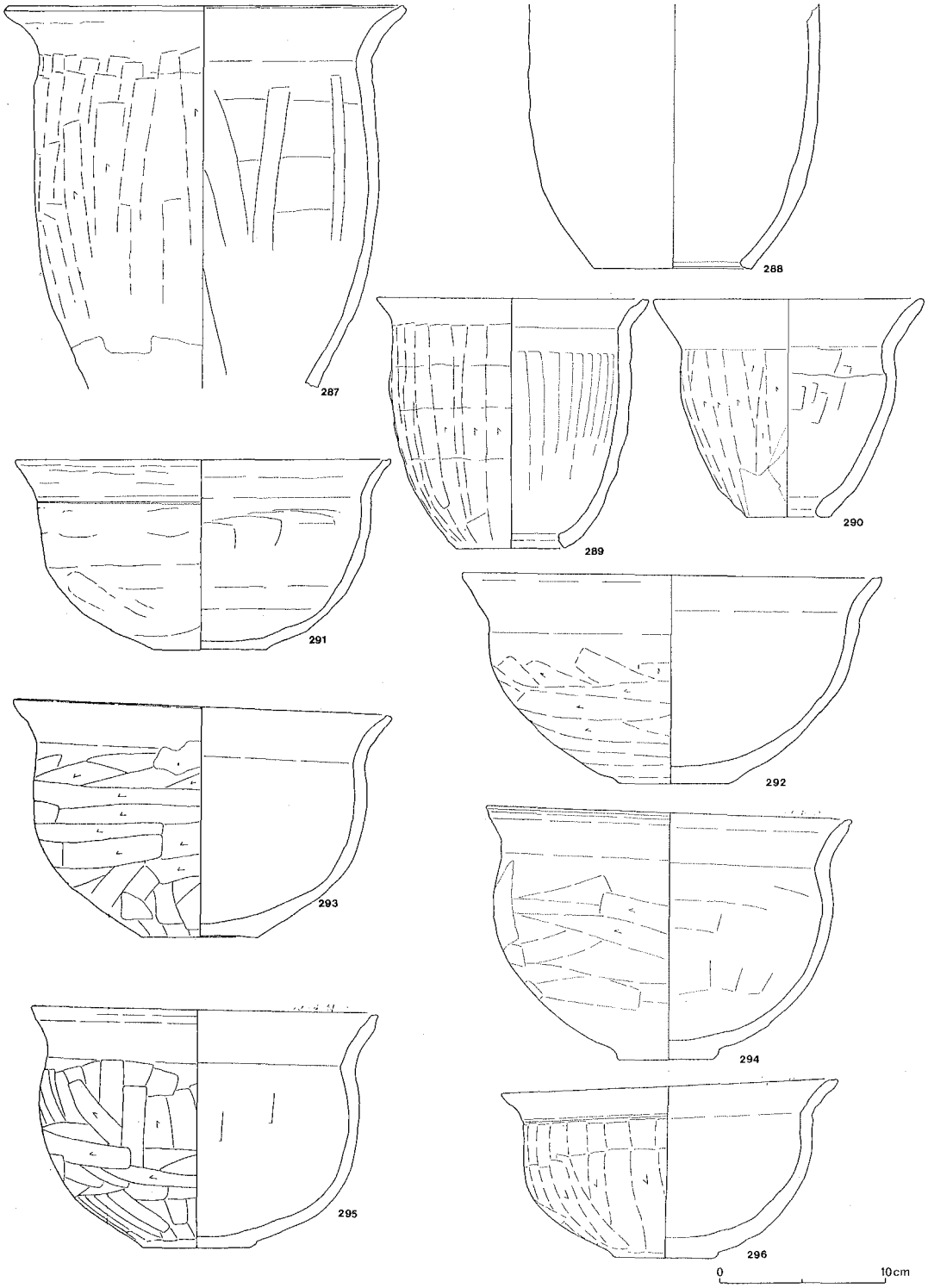
エ．土師器甑（第19図285～第20図290）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
285	甑	23.4	8.5	28.0	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデの後指ナデ。内外面とも輪積痕明瞭。胎土砂を含む。LB～LO。	90%
286	〃	20.7	9.0	22.8	口唇部上面平坦沈線あり。内面ヘラナデ。外面輪積痕明瞭。胎土砂を含む。外面O、内面BℓB。	90%
287	〃	24.0	—	(23.6)	口唇部外面平坦。外面ヘラ削りの後ナデか。内面横のヘラナデの後縦のヘラナデ。胎土砂を含む。外面LO内面BℓB。	70%
288	〃	—	(9.5)	(16.3)	外面縦のヘラ削りか。内面縦に細かく磨かれているようである。胎土砂を含む。LO。	—
289	小型甑	16.6	(6.5)	15.4	口唇部上面平坦沈線あり。内面横のヘラナデの後縦の磨き。外面輪積痕明瞭。LO、外面下位に黒斑。	70%
290	〃	(16.5)	(5.5)	13.4	内面ヘラナデ。胎土砂を含む。LB。	50%

285～289は、口縁部外反し、胴部は上半が直立気味で下半がすぼまり、下端部は平坦にナデられている。287は胴部が若干ふくらんでいる。290は、外反する口縁部はやや長く、胴部は下端へ直線的にすぼまる。調整は、器面の磨滅のためにあまり明瞭ではないが、口縁部横ナデ、胴部外面縦方向のヘラ削り（285・288・289は若干ナデられているようである）、胴部内面は、285・288がヘラナデの後指ナデ、286・287・290がヘラナデ、288・290がヘラ磨きである。

オ．土師器鉢（第20図291～第21図304）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
291	鉢	22.9	7.0	11.7	口唇部上面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後ナデか。内面ヘラナデの後ナデか。OW～DB。	完形
292	〃	25.5	6.7	13.0	口唇部上面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後若干のナデ。内面ヘラナデの後ナデか。OB。	90%
293	〃	23.0	7.0	14.1	口唇部上面平坦一部に沈線。外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。外面OB、内面LO。	70%
294	〃	20.2	5.8	15.2	口唇部上面平坦外面沈線あり。外面ヘラ削りの後若干のナデか。内面ヘラナデの後ナデ。DB。	80%
295	〃	21.1	6.6	14.8	口唇部上面部分的に平坦外面浅く沈線状。外面ヘラ削りの後若干のナデ。内面ヘラナデの後ナデ。OB、底面に黒斑。	80%



第20図　A区第1号住居跡出土遺物15)（1／4）

番号	器種	口 径	底 径	器 高	特　　徴	残存率
296	鉢	20.4	6.0	11.4	口唇部上面平坦沈線あり。外面ヘラ削りの後若干のナデ。内面丁寧なナデ。ＬＯ。	90%
297	〃	(22.5)	—	(7.5)	口唇部上面平坦浅く沈線状。内面丁寧なヘラナデ。胎土砂を含む。ＬＢ。	—
298	〃	(19.5)	—	(10.0)	口唇部上面平坦浅く沈線状。外面ヘラ削りか。内面は横方向のナデか。頸部直上に明瞭な輪積痕。ＬＯ。	—
299	〃	(8.5)	—	(10.6)	外面はヘラ削りの後若干のナデか。内面はナデ。底は丸底か。胎土砂を含む。焼成やや不良。ＲＢ。	70%
300	〃	(13.0)	—	(10.2)	外面粗いヘラ削り。内面横方向のナデ。胎土砂を含む。焼成やや不良。ＬＯ～ＲＢ。	40%
301	〃	13.0	5.8	11.5	体部外面下位ヘラ削り、上位～中位はナデ、内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂を含む。ＲＢ。	完形
302	〃	(12.0)	—	(7.0)	口唇部は丸く内側に沈線あり。外面横方向のヘラ削りの後ナデか。内面指の押圧の後ヘラナデ更にナデか。ＬＯＢ。	—
303	〃	(26.0)	(5.0)	(12.0)	口唇部上面平坦。体部下位屈曲して稜を作り出す。外面ヘラ削りの後若干のナデ。内面ナデ。ＬＯ。	30%
304	〃	(15.4)	—	(9.0)	歪曲。外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。胎土砂を多く含む。焼成やや不良。ＹＷ。	—

291～296は、口縁部外反し体部は半球形を呈する。調整は、器面の磨滅によりやや不明瞭だが、口縁部は横ナデ、体部外面ヘラ削りの後若干のナデ、体部内面はヘラナデの後指ナデであろう。平坦な底面は、削られたもの（291～293）、削られた後に若干ナデられたもの（294～296）がある。297・298も類似した形態を呈するものと思われる。

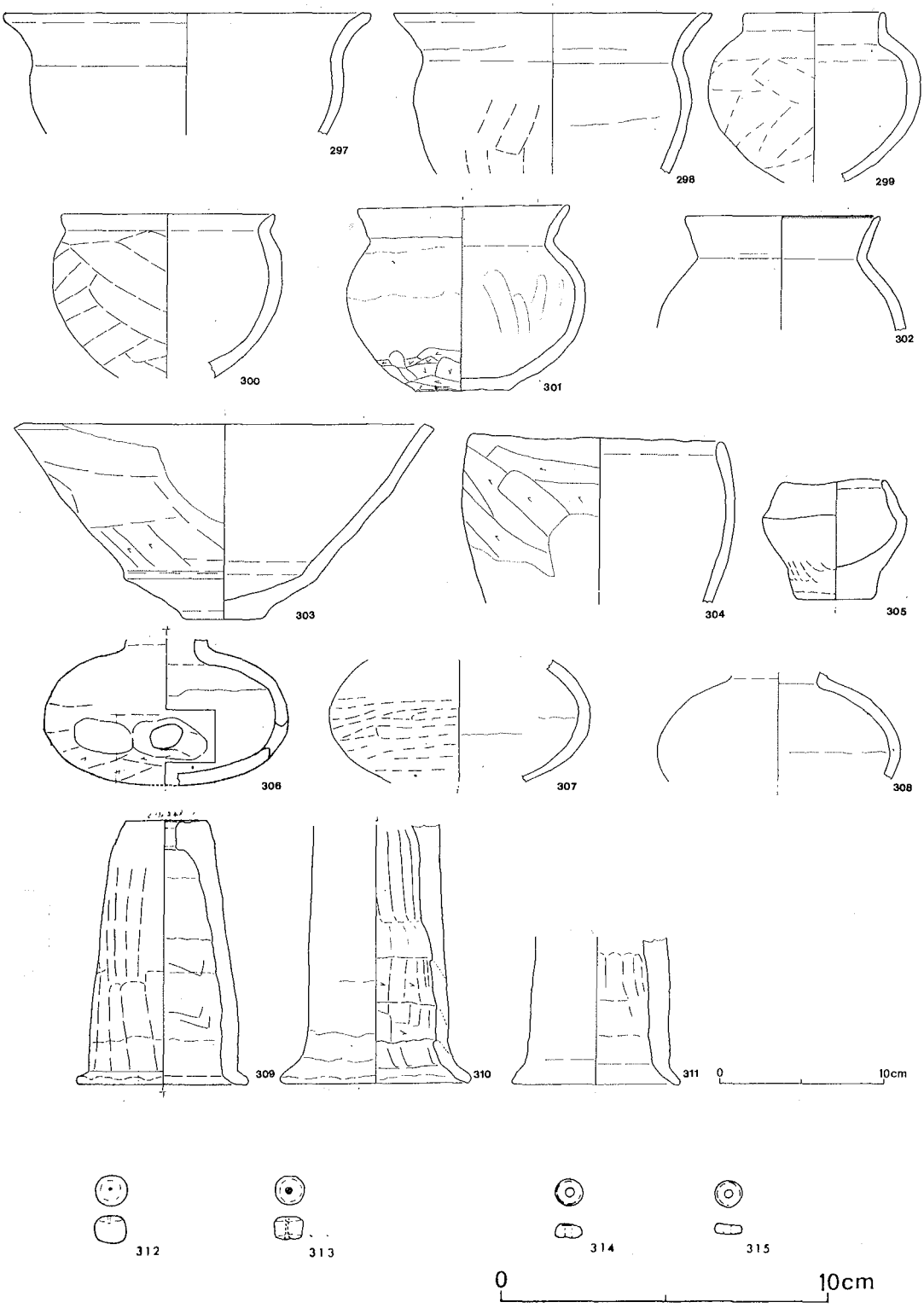
299・300は、体部が球形を呈する小型のものである。口縁部は短く、299は直立、300は外傾する。底は丸底と思われる。

301・302は、口縁部外反し、頸部は「く」字状に屈曲し、体部は丸く張っている。最大径は体部中位である。301の底面は平坦に削られた後、若干ナデられている。

303・304は特異な形態を呈する。301は大きく開いた形態を呈する。口唇部は上面が平坦に成形され断面四角い。体部下位は輪積みを利用して屈曲し、明瞭な稜を作り出す。底面は簡単に削られている。302は甕の胴部以下のような形態を呈し、かなり歪曲している。口唇部は丸く、内側へ若干肥厚している。

カ．土師器その他（第21図305～311）

番号	器種	法　量・特　徴	残存率
305	手捏	口径6.5、底径4.5、器高7.5。やや歪曲。内面丁寧なナデ。外面もナデられているが、下位に指の押圧痕。底部はかなり厚いが切落す予定であったものであろう。ＬＯ。	完形
306	瑟	推定胴径15.0、残存高9.0。外面上位はナデ、下位はヘラ削り。内面上位は指の押圧の後ナデ、下位はナデ。孔は胴部のやや下位に焼成後外側からあけられ周辺が剝離。	—



第21図　A区第1号住居跡出土遺物(16)（1／4・1／2）

番号	器種	法　量・特　徴	残存率
		その向って左側にも穿孔を試みたような表面剥離。ＬＯ。	
307	坩	推定胴径16.0、残存高7.6。外面ヘラ削りの後ナデか。内面上位指の押圧の後ナデ、内面下位ヘラナデの後ナデか。ＬＯ。	—
308	坩	推定胴径15.0、残存高6.7。外面丁寧なナデか。内面頸部直下は指の押圧の後ナデ、それ以下はナデ。ＬＯ。	—
309	支脚	上面径5.0、孔径1.7、底径10.5、器高16.4。上面の孔は外側からあけられ、孔の周囲は沈線状。裾はつまんで作り出される。外面ヘラ削り。内面輪積痕明瞭で横のヘラナデ。ＬＢ～ＬＯ。	完形
310	〃	底径11.8、残存高16.0。裾はつまんで調整。外面は縦のヘラ削りの後ナデ。内外面（特に内面）輪積痕明瞭。内面粗いヘラ削り、特に上位は横方向の凹凸が激しい。ＬＯ。	—
311	〃	底径10.4、残存高9.2。外面ナデか。内面輪積痕明瞭、下位は横方向のヘラ削り、中位以上は上から下へ指で強いナデ。ＬＢ。	—

305～311は、いずれも器面が若干磨滅しているため、調整は不明瞭である。310の支脚はカマド内より出土した。

キ．土玉・臼玉（第21図312～315）

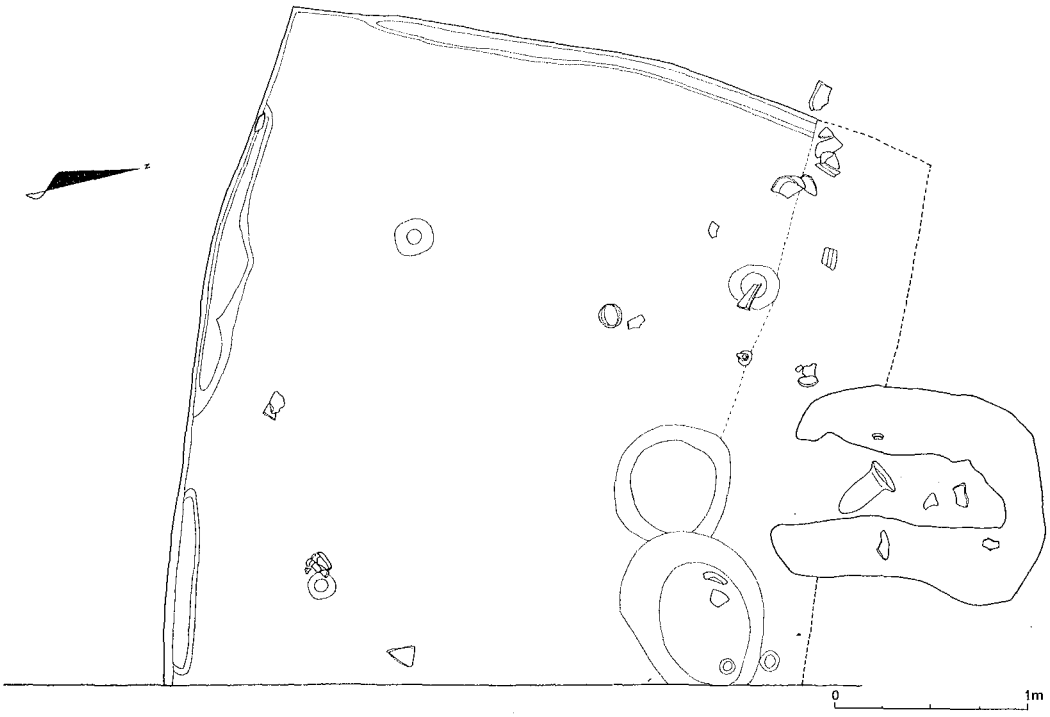
番号	種別	径	孔径	厚さ	特　徴
312	土玉	1.0	0.1	0.9	やや臼形。孔は通っておらず、一方からのみあけようとしたようである。表面の調整は丁寧。焼成良好。Ｂ。
313	〃	0.9	0.1	0.7	臼形。孔はまっすぐに通る。表面の調整は丁寧。焼成良好。Ｏ。
314	臼玉	0.85	0.25	0.45	滑石製。孔はまっすぐに通る。上面・下面ともやや凹凸あり。
315	〃	0.85	0.2	0.3	滑石製。孔はまっすぐに通る。上面・下面とも平坦。

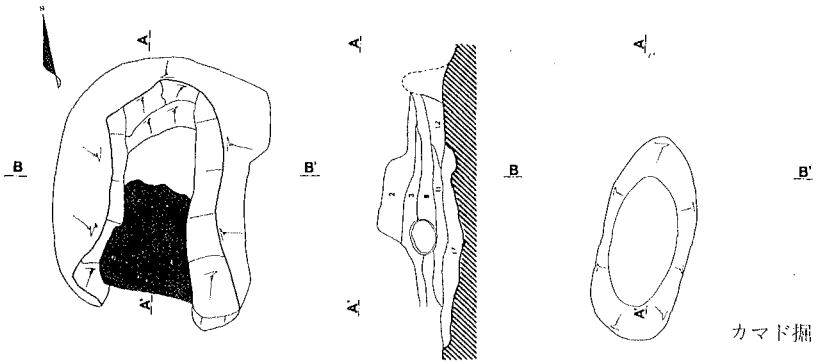
ｂ．第２号住居跡（第３図）

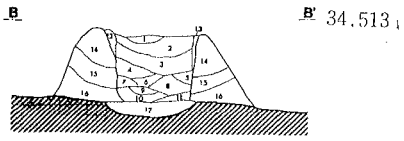
Ａ区の南側に位置し、北側は第１号住居跡を破壊して構築されている。住居跡全体の90％以上を調査しえたものと思われる。

平面プランは、南北3.6ｍ×東西4.0ｍほどの正方形に近い形態を呈するものと思われる。主軸方向はＮ－21°－Ｅで、カマドは北辺の中央に構築されている。北東部は第１号土坑・第２号土坑に破壊されている。床面はほぼ平坦で、深さは確認面より20～30cmである。柱穴は、土坑によって破壊された北東隅を除き３ヶ所確認された。径15～20cm、床面よりの深さ10～15cmほどの小さなもので、西南隅のものは２基切り合っている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は西辺及び南辺で確認されたが、完全に巡ってはいない。

カマドは北辺のほぼ中央に構築され、わずかに北を向いており、主軸方向はＮ－15°－Ｅである。袖は粘質の暗褐色土、黄褐色土で構築されている。焚き口は床面とほぼ同じレベルで幅は 45cm ほどである。燃焼部は壁の線上になるものと思われ、完形の土師器長甕が出土した。なお、このカマド







1．褐 色 土（炭化物・焼土含む）
2．黄褐色土（炭化物・焼土含む）
3．暗褐色土（焼土を少量、炭化物を含む）
4．黄褐色土（炭化物を少量含む）
5．暗褐色土（焼土ブロック・炭化物を含む）
6．焼　　土
7．暗褐色土（焼土を多量に、炭化物を含む）
8．黄褐色土（焼土粒子・ブロックを多量に炭化物を少量含む。しまり悪い）
9．黒褐色土（灰色粒土粒子を多量に含む。しまり悪い）
10．黄褐色土（炭化物を少量含む。しまり悪い）
11．暗褐色土（焼土ブロックを多く含む）
12．黄褐色土
13．焼　　土
14．暗褐色土（焼土・炭化物・砂を少量含む）
15．暗黄褐色土（焼土・炭化物・砂を少量含む）
16．黄褐色土（焼土・炭化物・砂を少量含む）
17．　〃　（砂を含む）

第22図　A区第2号住居跡遺物出土状態・カマド（1／40）

は、1.1m×0.45mほどの長円形の浅い掘り方の上に構築されている。

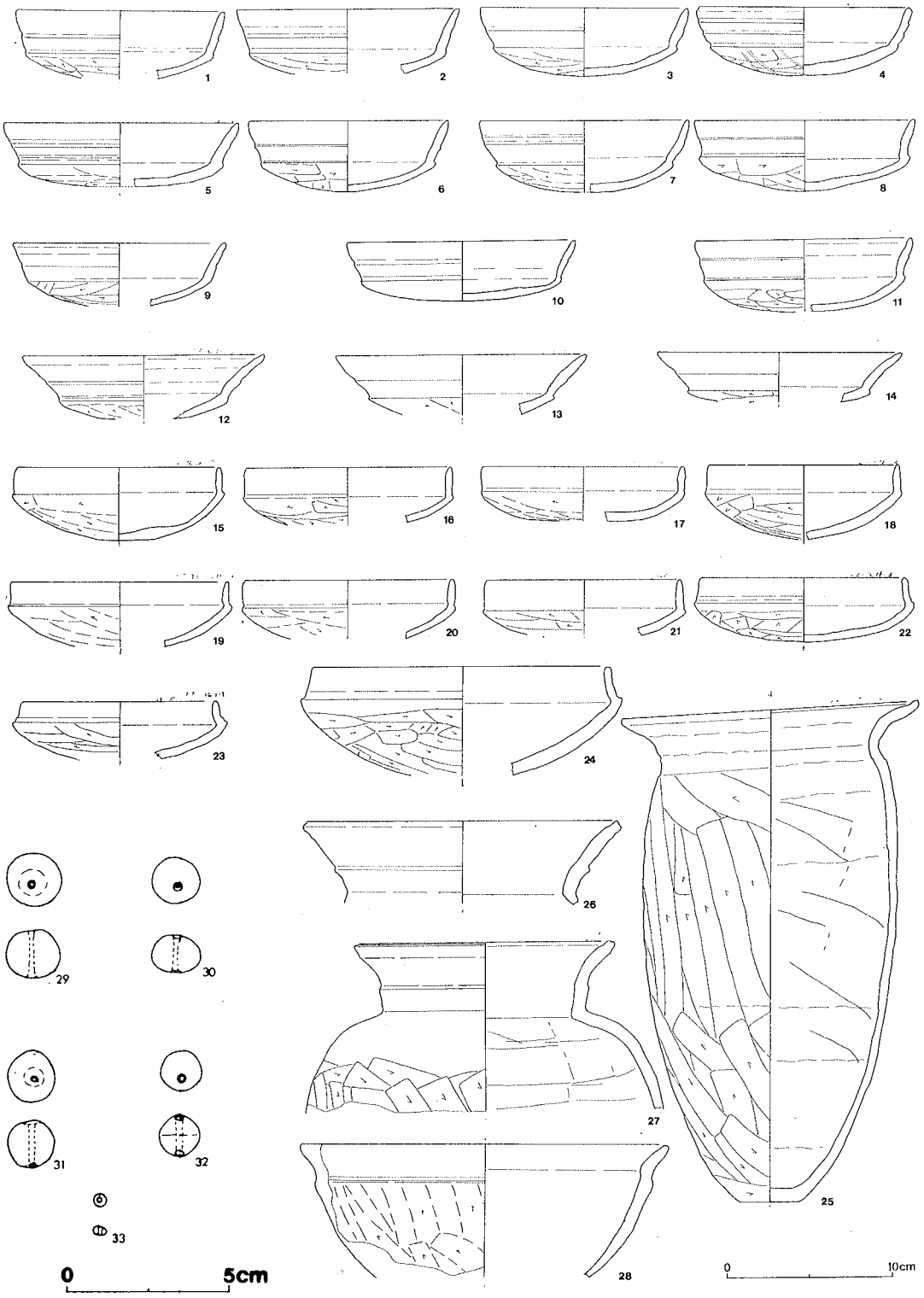
出土遺物はほとんどが土師器で、土玉も4点出土した。

第2号住居跡出土遺物（第23図）

ア．土師器坏・埦（第23図1～26）

番号	器種	口径	器高	特徴	残存率
1	坏	(13.0)	(4.2)	口縁部外面中位・稜直上に沈線。DB～BℓB。	30%
2	〃	(13.5)	(4.0)	口縁部外面中位・稜直上に沈線。DB～BℓB。	10%
3	〃	12.8	4.2	口縁部外面中位に沈線、口唇部やや尖る。外面LB、内面DB。	完形
4	〃	13.2	4.2	口縁部外面に2条・稜直上に沈線。体部外面にヘラ状工具による傷あり。胎土砂を含む。DB。	90%
5	〃	(14.5)	(4.0)	口縁部中位・稜直上に細い数条の沈線。口唇部やや尖る。LB。	20%
6	〃	(12.0)	4.4	口縁部中位・稜直上に細い沈線。口唇部やや尖る。LO。	20%
7	〃	(13.5)	(4.5)	口縁部やや丸く外面に2条の沈線。口唇部やや尖る。LGB。	40%
8	〃	(13.5)	(4.5)	やや歪曲。口縁部外面中位に沈線。DB。	40%
9	〃	(13.0)	(4.0)	口縁部外面中位に浅い沈線。内面炭化物顕著に付着。焼成やや不良。外面OB、内面DB。	20%
10	〃	(13.5)	(4.5)	口縁部外面中位に沈線。口唇部内面強く押えられやや尖る。O。	40%
11	〃	(14.0)	3.7	口縁部外面中位・稜直上に沈線。底部内面皿状に窪む。OB。	50%
12	〃	(15.0)	(4.0)	口縁部外面中位に段状の沈線。口唇部やや尖る。LB。	60%
13	〃	(15.5)	(3.7)	口縁部外面中位に浅い段状の沈線。口唇部内面平坦でやや尖る。LB～LO。	小破片
14	〃	(15.0)	(3.1)	口縁部外面中位に浅い段状の沈線。DB。	小破片
15	〃	12.5	4.5	やや歪曲。体部内面中央窪む。焼成やや不良。YB～LO。	80%
16	〃	(12.0)	(3.6)	口唇部やや尖る。稜直上に沈線。DB。	20%
17	〃	(12.5)	(3.4)	口唇部やや尖る。稜直上に沈線。OB。	40%
18	〃	(12.0)	(4.6)	口唇部やや尖る。DB。	30%
19	〃	(13.5)	(4.0)	口唇部やや尖る。DB	20%
20	〃	(13.0)	(3.7)	口唇部やや尖る。稜直上に浅い沈線。LB～OB。	小破片
21	〃	(12.0)	(3.4)	口唇部やや尖る。外面BℓB、内面DB。	〃
22	〃	(13.0)	(4.0)	口縁部内傾。稜直上に細い沈線。体部内。	70%
23	〃	(12.0)	(3.6)	口縁部内傾。DB。	小破片
24	埦	(18.0)	(6.8)	口縁部内傾。YW～GB。	30%

1～14は、口縁部が外傾して開き、体部の浅いものである。12～14は、特に口縁部が外傾して大きく開くものである。口唇部はやや尖ったものが多く、口縁部外面には沈線が巡る。沈線にはヘラ状工具によると思われる角度の鋭いもの、爪などによると思われるごく細いものなどがある。口縁部と体部の境の稜は、明瞭に突出したものが多い。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラ削り、体部内面は丁寧なナデである。



第23図　A区第2号住居跡出土遺物（1／4・1／2）

15～21は、短い口縁部がほぼ直立し、体部の浅いものである。18のみ体部がやや深い。口縁部と体部の境の稜は明瞭である。口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、体部内面は丁寧にナデられている。

22・23は、15～21に類似するが、口縁部が内傾するものである。23は明瞭に内傾し、稜は突出気味である。器面の調整は15～21と同様である。なお、第1号住居跡の項に記載した137・138は、第2号住居跡に伴うもので、22・23と類似したものと考えられる。

24は、形態的には22・23を大きくしたような埦である。体部は深く、口縁部の2.5倍ほどである。器面の調整は、15～23と同様である。

イ．土師器甕・壺・鉢（第23図25～28）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
25	甕	18.3	3.6	30.6	口縁部強く外反して開く。口唇部外面平坦で内側が浅く窪む。口縁部横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。胴部内面の一部輪積痕明瞭。底面ヘラ削り。胎土砂を多く含み、焼成良好。ＤＢ。	完形
26	壺	(19.0)	—	(5.1)	口唇部外面平坦、内面浅く窪む。口縁部外面中位に段を有する。ＬＯ。１号住からの流入か。	
27	〃	(16.0)	—	(10.5)	口唇部上面沈線あり、内面も浅く沈線状。口縁部外面中位に段を有する。口縁部横ナデ、胴部外面上位ナデ、中位以下ヘラ削り、内面ヘラナデ。ＯＢ。１号住からの流入か。	
28	鉢	(22.5)	—	(8.3)	内面丁寧なナデ、体部下位器肉薄い。ＬＯ。	—

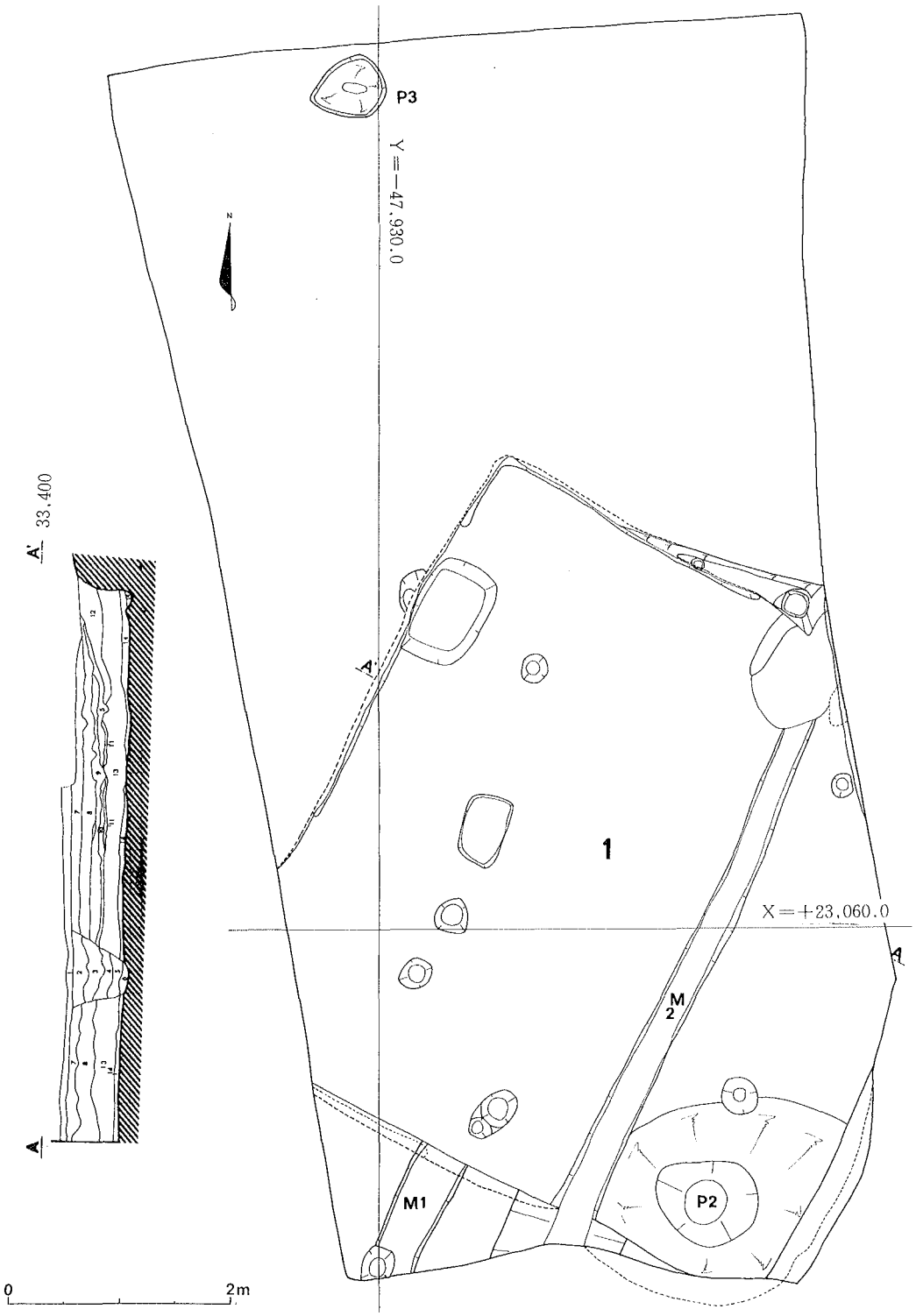
25の長甕はカマド内から出土したものである。

26・27は、外反する口縁部の外面中位に段を有し、頸部が強く屈曲して胴部が丸く張った壺であろう。第1号住居跡と第2号住居跡の切り合い付近の、第2号住居跡寄りより出土したが、第1号住居跡よりの流入遺物と考えられよう。

ウ．土玉（第23図29～32）・小玉（第23図33）

番号	種別	径	孔径	厚さ	特徴
29	土玉	1.7	0.1	1.5	ややいびつ。孔はまっすぐに通る。表面の調整は丁寧。焼成良好。BℓB。
30	〃	1.4	0.15	1.1	孔はまっすぐに通るが中心よりややずれる。表面の調整は丁寧。焼成良好。BℓB。
31	〃	1.4×1.6	0.1×0.15	1.5	いびつ。孔はまっすぐに通る。表面の調整は丁寧。焼成良好。BℓB。
32	〃	1.3	0.2	1.3	ややいびつ。孔はまっすぐに通るが中心よりかなりずれる。表面の調整は丁寧。焼成良好。BℓB。
33	小玉	0.4	0.15	0.25	透明な緑色を呈し、硬玉製と思われる。

A区には、他に住居跡を破壊して構築されている土坑2基や、住居跡の周辺に柱穴状の小ピットがある。



第24図　B区全測図（1／60）

(2)　B区の調査

a．第1号住居跡（第24図）

B区の南側に位置する。住居跡全体の約90%を調査しえたものと思われる。一部を第1号土坑、第1号・第2号溝状遺構に破壊されていた。

平面プランは、一辺約6mほどの正方形を呈するものと思われ、主軸方向はN－28°－Eである。床面はほぼ平坦で、深さは確認面より65～70cmである。柱穴は、壁より1.0～1.6mほど内側に4ヶ所確認された。径20～30cm、床面よりの深さ30cmほどである。他に類似したピットが2ヶ所検出された。また、西辺際に、平面プランが1.0×0.6mの長方形を呈し、床面よりの深さ約25cmの浅い土坑、住居跡中央よりやや西寄りに、平面プランが0.6×0.4m、床面よりの深さ約5cmのごく浅い土坑が検出された。壁は、西辺及び北辺の西側は攪乱により明瞭ではないが、垂直又は下場が若干外側へ入り込んでいたようである。東南隅が袋状になっているのは、第2号土坑によるものであろう。壁溝は、北辺・西辺・南辺に部分的に確認された。

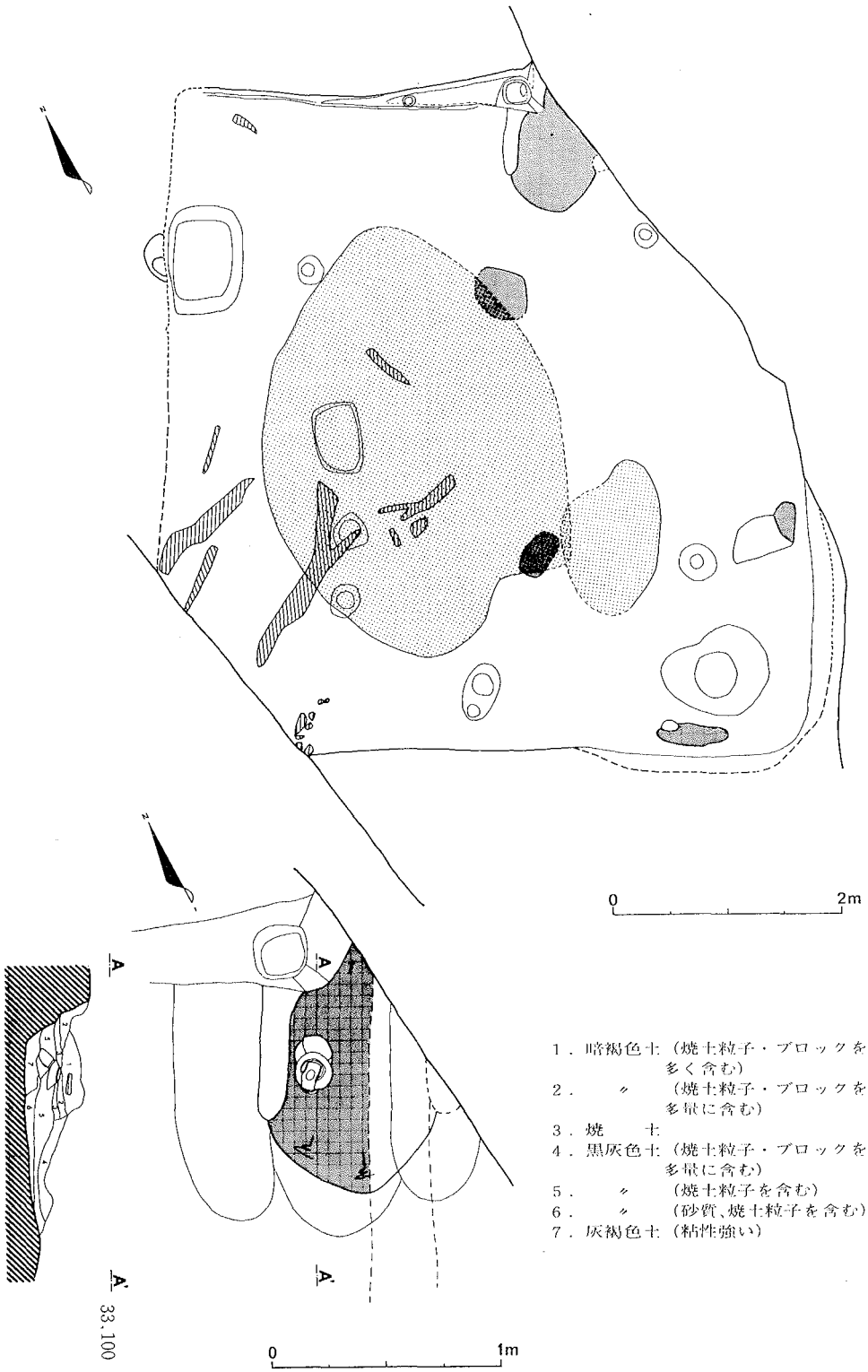
覆土は、暗褐色土を主体とし、住居跡全体に中層～下層には焼土及び炭化物が混入し、特に住居跡中央～西側に多量に混入していた。また、東南隅の床面直上にも焼土塊と粘土塊が確認された。住居跡の西南側では炭化材が床面直上で多量に検出された。焼土を多量に伴出し、炭化材の下には灰白色粘土が薄く広がっていた。

カマドは北辺の中央よりやや東側に構築されていた。調査範囲際であり、第2号溝状遺構に破壊されていたこともあって、袖などの形態は明瞭には把握できなかったが、若干東を向いていたようである（第25図の袖は推定であり、矢印は煙道の方向を示している）。燃焼部は壁の内側で、焚き口の幅は50cmほどであったものと思われる。

出土遺物はほとんどが土師器である。東南隅に甕が集中して出土した。カマド内からは高坏が2点出土している。

前ページの土層

1．灰褐色土（砂質、焼土・炭化物を少量、浮石を多量に含む）
2．暗灰褐色土（焼土・炭化物を少量、浮石を多量に含む）
3．灰褐色土（焼土・炭化物・浮石を少量含む）
4．　〃　（焼土・炭化物・浮石を少量含む。3より暗い）
5．暗褐色土（焼土・炭化物を少量含む）
6．　〃　（焼土・炭化物を少量、砂を多く含む）
7．灰褐色土（焼土・炭化物・浮石を多く含む）
8．　〃　（焼土・炭化物・浮石を多く含む）
9．黒褐色土（焼土・炭化物を多く含む）
10．黒褐色土（焼土・炭化物を多量に含む）
11．灰白色粘質土（焼土・炭化物を多量に含む）
12．暗褐色土（焼土・炭化物を多量に含む）
13．明褐色土（焼土・炭化物を多く含む）
14．黄褐色土（焼土・炭化物・砂を多く含む。粘性強い）
15．暗褐色土（焼土・炭化物を少量含む）



第25図　B区第1号住居跡焼土・炭化物検出状態（1／60）・カマド（1／30）

第26図　B区第１号住居跡遺物出土状態（1／40）

第１号住居跡出土遺物（第27図・第28図）

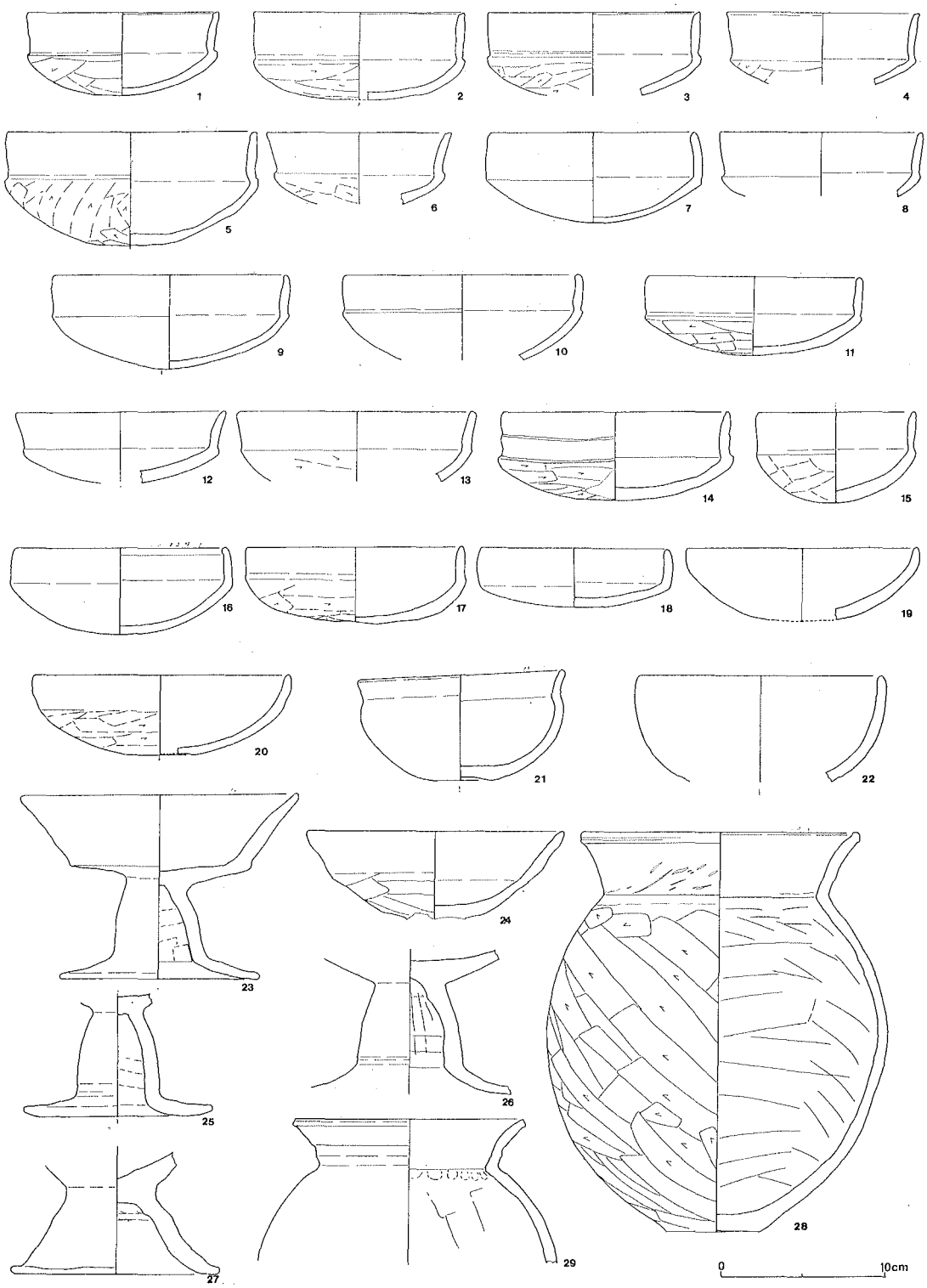
ア．土師器坏・埦（第27図１～22）

番号	器種	口 径	器 高	特　　徴	残存率
1	坏	11.9	5.2	口唇部上面平坦。ＤＢ。	完形
2	〃	(13.0)	(5.5)	口唇部上面平坦、部分的に沈線状。ＬＢ。	50%
3	〃	(13.0)	(5.2)	口唇部上面平坦。稜直上に細い沈線。ＬＢ～ＬＯ。	小破片
4	〃	(12.0)	(4.5)	口唇部上面平坦沈線あり。ＬＯ。	20%
5	〃	15.5	15.6	大型。口唇部上面やや平坦。ＬＯ。	50%
6	〃	(11.5)	(4.5)	口唇部平坦沈線あり。ＬＯ。	小破片
7	〃	12.4	5.7	口縁部わずかに内彎。口唇部丸い。ＬＢ。	80%
8	〃	(12.5)	(4.0)	口唇部丸い。ＬＢ～ＤＢ。	30%
9	〃	(15.0)	5.9	やや大型。口唇部丸い。ＬＯ。	40%
10	〃	14.8	(5.4)	やや大型。口唇部丸い。ＬＢ。	60%
11	〃	13.0	5.0	口唇部丸い。ＬＢ。	完形
12	〃	(13.0)	(4.4)	口唇部丸い。ＬＯ。	20%
13	〃	(15.0)	(4.4)	やや大型。口唇部丸い。ＯＢ。	小破片
14	〃	(14.0)	5.5	口唇部やや尖る。口縁部外面中位に沈線。内面剥離激しい。胎土砂を含む。Ｂℓ Ｂ。	40%
15	〃	(10.0)	5.7	小型。口唇部丸い。ＯＢ。	60%
16	〃	(13.0)	5.4	口縁部若干内傾、口唇部は丸く内側に肥厚。ＯＢ。	50%
17	〃	13.6	4.8	やや歪曲。口唇部やや尖る。底部は薄い。ＯＢ。	完形
18	〃	11.5	3.6	やや歪曲。口縁部若干内傾。口唇部丸い。体部かなり浅い。外面ＤＢ、内面ＬＢ。	90%
19	〃	(14.5)	(4.5)	口唇部丸い。外面ＤＢ、内面ＬＢ。	20%
20	〃	(16.0)	5.0	底径（4.0)。口唇部やや尖る。底面若干窪む。ＬＯ。	40%
21	埦	12.6	6.6	底径3.5。口縁部屈曲して短く外反。口唇部外面平坦。底面若干窪む。ＤＢ～ＯＢ。	70%
22	〃	17.0	(7.3)	口唇部丸い。外面ヘラ削りの後ナデか。ＯＢ。	50%

１～17は、いわゆる模倣坏タイプのものである。口唇部上面が平坦で爪などによる沈線が巡るものもあるが、口唇部は丸いものが多い。口縁部は直立又は少し外反するものが多く、口唇部がわずかに開くものがある。７・16の口縁部は少し内傾している。５は大型のもの、15は小型のものである。９・10・13は、口径はやや大きいが器高はそれに比して浅い。14は、口縁部外面中位に沈線が巡る。器面の調整は、磨滅により不明瞭なものが多いが、口縁部は横ナデ、体部外面はヘラ削りである。

18は、口縁部が少し内彎し、体部がかなり浅いものである。器面は磨滅しているが、口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削りであろう。

19・20は、口縁部と体部の境が明瞭でない、浅い皿状のものである。やはり器面はやや磨滅しているが、口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削りである。



第27図　B区第1号住居跡出土遺物1)（1／4）

21の埦は、口縁部が屈曲して短く外反したものである。底面は少し窪んでいる。器面の調整は磨滅により不明瞭だが、口縁部横ナデ、内面及び外面上位はナデ、外面下位はヘラ削りの後若干のナデのようである。

22は半球形を呈する埦である。破片のため底部の形態は不明である。器面は磨滅しているが、体部外面はヘラ削りの後若干のナデであろう。内面はよくナデられている。

イ．土師器高坏（第27図23～27）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
23	高坏	17.2	12.4	11.5	坏部稜より下位はヘラ削りの後ナデか。接合部は強く締めつけられている。脚部内面横位のヘラ削りの後ナデ。焼成良好。ＲＯ～ＬＢ。	90%
24	〃	16.0	—	(5.5)	稜は不明瞭。体部外面ヘラ削りの後若干のナデか。ＯＢ。	坏完形
25	〃	—	(11.6)	(7.6)	脚内面横のヘラ削り、天井部中央に突起あり。ＬＯＢ。	脚70%
26	〃	—	—	(6.9)	脚内面横のヘラ削り、上位に絞り目。ＯＢ。	脚30%
27	〃	—	(13.0)	(6.9)	脚内面は横のナデ、天井部は削られている。坏部内面の調整粗く、中央が窪んでいる。胎土砂を多く含む。ＯＢ。	脚完形

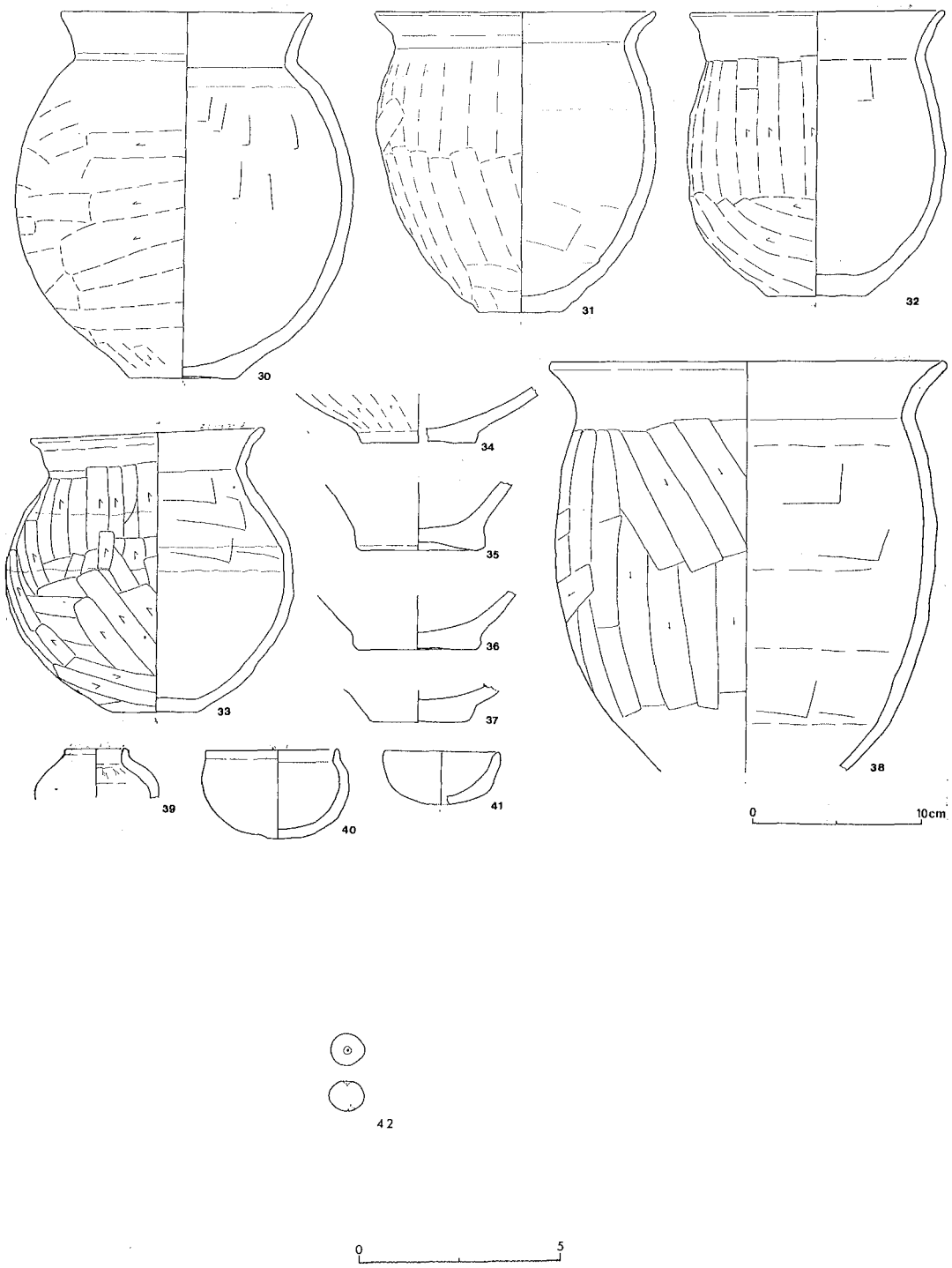
23・24はカマド内より出土した。23は、口縁部が直線的に外傾して開き、接合部は強く締められ脚部は屈曲して裾が大きく広がる。24は、口縁部は直線的に外傾するが、稜は不明瞭で体部には丸みがある。

25の脚部は、接合部が強く締められ、上位は細く、裾は屈曲して平坦に広がる。26の脚部は、裾が外反して開く。27は「八字状」に開き、上位が少しふくらみ、裾は外反している。

なお、23・24の口縁部は横ナデ、坏部内面は丁寧にナデられている。また、23・25～27の脚部外面及び裾部の内外面も丁寧にナデられている。

ウ．土師器甕・甑（第27図28～第28図37）

番号	器種	口径	胴径	底径	器高	特徴	残存率
28	甕	16.8	21.0	5.8	25.0	口唇部外面平坦、一部に沈線あり。胴部内面ヘラナデ。胎土砂・小石を多く含む。焼成良好。ＤＢ。	完形
29	〃	(14.5)	—	—	(9.0)	口唇部外面平坦。胴部外面上位ヘラ削りの後ナデ。胴部内面ヘラナデの後ナデ。内面頸部直下に指の押圧痕。焼成良好。外面ＯＢ、内面Bℓ。	—
30	〃	15.0	20.0	6.4	22.0	胴部外面ヘラ削りの後若干のナデか。胴部内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂・小石含む。ＬＯＢ。	90%
31	小型甕	(16.5)	16.5	4.9	18.1	やや歪曲。胴部外面ヘラ削りの後若干のナデか。胴部内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂を多く含む。焼成良好。ＯＢ～ＤＢ。	70%
32	〃	15.2	15.5	5.8	17.1	胴部内面ヘラナデの後ナデ。胎土砂・小石を含む。ＲＢ。	80%



第28図　B区第1号住居跡出土遺物2)（1／4・1／2）

番号	器種	口 径	胴 径	底 径	器 高	特　　徴	残存率
33	小型甕	13.9	16.8	5.0	16.8	胴部内面上位ヘラナデ、下位ナデ、中位に輪積痕明瞭。胎土砂・小石を含む。ＤＢ。	70%
34	甕	—	—	(7.0)	(3.4)	底面はヘラ削り。胎土砂多く含む。ＤＢ～ＯＢ。	—
35	〃	—	—	7.5	(4.0)	やや上げ底。底面はナデ。胎土砂多く含む。ＯＢ。	—
36	〃	—	—	(7.0)	(3.6)	底面ヘラ削りの後ナデか。胎土砂を含む。外面ＬＢ、内面ＬＧＢ。	—
37	〃	—	—	6.0	(2.1)	底面粗いヘラ削り。胎土砂・小石を含む。ＯＢ。	—
38	甑	23.4	22.8	—	(24.8)	胴部内面ヘラナデの後ナデ、輪積み痕明瞭。胎土砂を含む。ＯＢ。底部のみ欠損。	90%

28～30は、口縁部が外反し、頸部が「く」字状に屈曲して胴部が丸く張ったものである。最大径は胴部中位。28の平坦な口唇部外面の一部に細い沈線が認められる。

31～33は小型のものである。31・32は口径と胴部最大径がほぼ等しいが、33は頸部が強く「く」字状に屈曲して胴部が丸く張り、壺状の形態を呈する。32の頸部の屈曲は緩い。

34～37は底部の破片である。34の胴部は球形に張ったものであろう。

38は底部を欠損しているが甑であろう。最大径は口径で、胴部はやや丸みを有する。

なお、胴部外面の調整は、表中に特に記さなかったものはヘラ削りである。また、31・33の底面はヘラ削り、28・30・32の底面はヘラ削りの後ナデである。

エ．手捏土器（第28図39～41）

番号	器種	口 径	器 高	特　　徴	残存率
39	手捏	(3.8)	(2.8)	小型の無頸壺状の形態。体部内面に絞り目、調整はナデ。ＯＢ。	—
40	〃	8.0	5.3	埦状の形態。やや歪曲。内面ナデ、外面上位ナデ、下位ヘラ削りであろう。ＬＢ。	70%
41	〃	(7.0)	(3.2)	やや歪曲。内面はナデ。底面はヘラ削りか。ＯＢ。	—

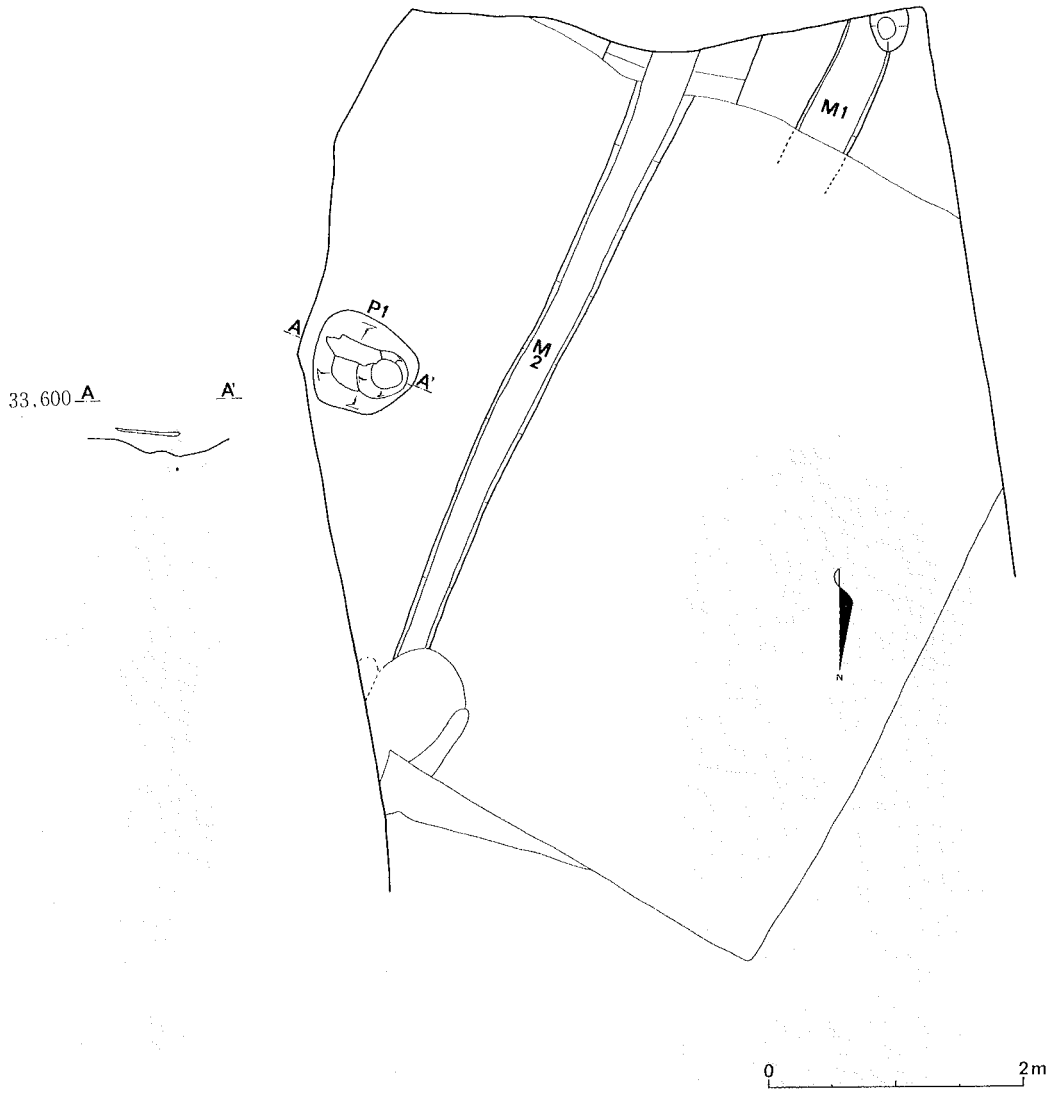
オ．土玉（第27図42）

番号	種別	径	孔 径	厚 寸	特　　徴
42	土玉	1.0	—	0.9	ややいびつ。孔は両側からあけようとしているが通っていない。表面の調整は丁寧。焼成良好。Ｂ。

ｂ．第１号土坑（第29図）

Ｂ区の東南部分にあり、第１号住居跡の覆土上層を破壊して構築されている。覆土は暗灰褐色土を主体とし、第１号住居跡の覆土との判別が困難であったが、平面プランは0.8ｍ×0.7ｍの不整円形を呈し、深さは確認面より約20cmで、皿状の形態を呈することが確認された。

完形の小型の板石塔婆が出土している。



第29図　B区中世以降の遺構（1／60）

第１号土坑出土板石塔婆（第30図）

ほぼ完形であるが、周縁部、特に正面左側辺が若干欠損している。表面はかなり磨滅している。長さ48.0cm、幅17.2cm、厚さ1.7～2.2cm、小型の阿弥陀種子一尊の板石塔婆である。

二条線は浅く刻まれ、主尊のキリークも浅い薬研彫で蓮台の上に乗っている。銘文も彫りは浅く不明瞭だが、「応安七年八月日」と読むことができる（応安７年＝1374年、北朝年号）。

裏面は左右にノミ痕が明瞭で、中央は平坦である。基部の調整は粗く、先端が薄くなっている。

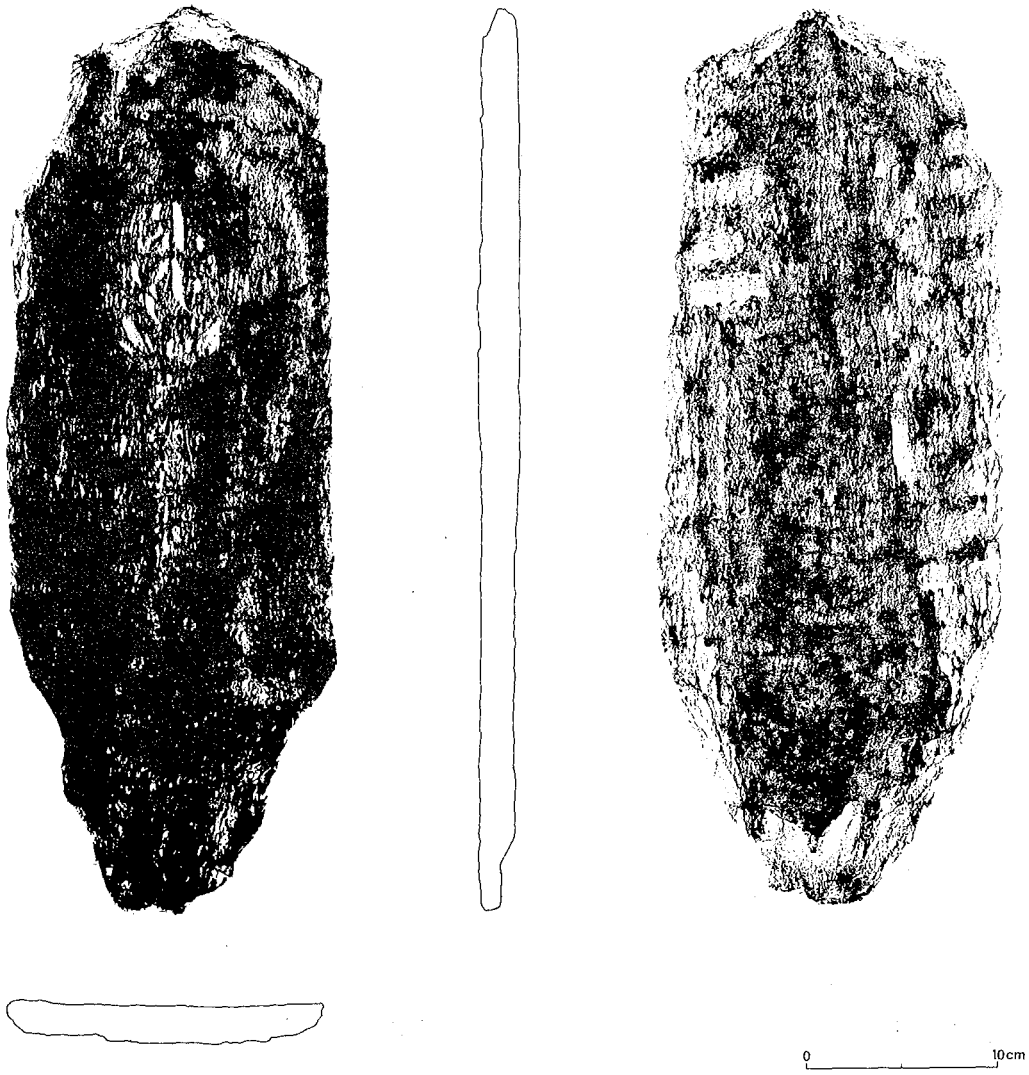
なお、この板石塔婆は、裏面を上に水平に近い状態で出土しており、意識的に埋設されたものと考えられる。

c．第２号土坑（第24図）

Ｂ区の東南隅、第１号住居跡の東南隅に位置し、第１号住居跡の床面で確認された。覆土は上層暗灰褐色土、下層は暗褐色土を主体とし、覆土の状態や第１号住居跡の遺物出土状態等から、第１号住居跡より以前に構築されたものと考えられる。

平面プランは不明だが、周縁部が中央へ向かって浅く皿状に窪み、中央は垂直に近い状態でかなり深くなっており、その深さは第１号住居跡の床面より1.5m以上である。遺構の上位の壁は、東南隅の状態から袋状になっていたものと考えられる。

出土遺物はないが、井戸跡と考えられよう。



第30図　Ｂ区第１号土坑出土板石塔婆（1／4）

d．第３号土坑（第24図）

Ｂ区の北隅に位置する。平面プランは0.7×0.6ｍほどの卵形を呈し、確認面よりの深さは約20cmで、浅い皿状を呈する。出土遺物はない。

e．第１号溝状遺構（第29図）

Ｂ区の南西隅で確認された。幅0.45ｍ、確認面よりの深さ約15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。第２号住居跡を破壊して、第２号溝状遺構と平行に北東方向へ延びていたものと考えられるが、覆土が第１号住居跡との判別が困難であったため、その形状は不明である。

f．第２号溝状遺構（第29図）

Ｂ区の東南部分で確認された。方向はだいたいＮ－25°－Ｅである。第１号住居跡を破壊して構築されているが、覆土は第１号住居跡との判別が困難であった。確認面での幅は0.7～1.0ｍ程度であったものと思われ、壁は斜めに立ち上がる。底幅は0.25ｍほどで、確認面よりの深さは55～65cmである。常滑焼の小破片と思われる遺物などが出土し、中世に構築されたものと考えられる。

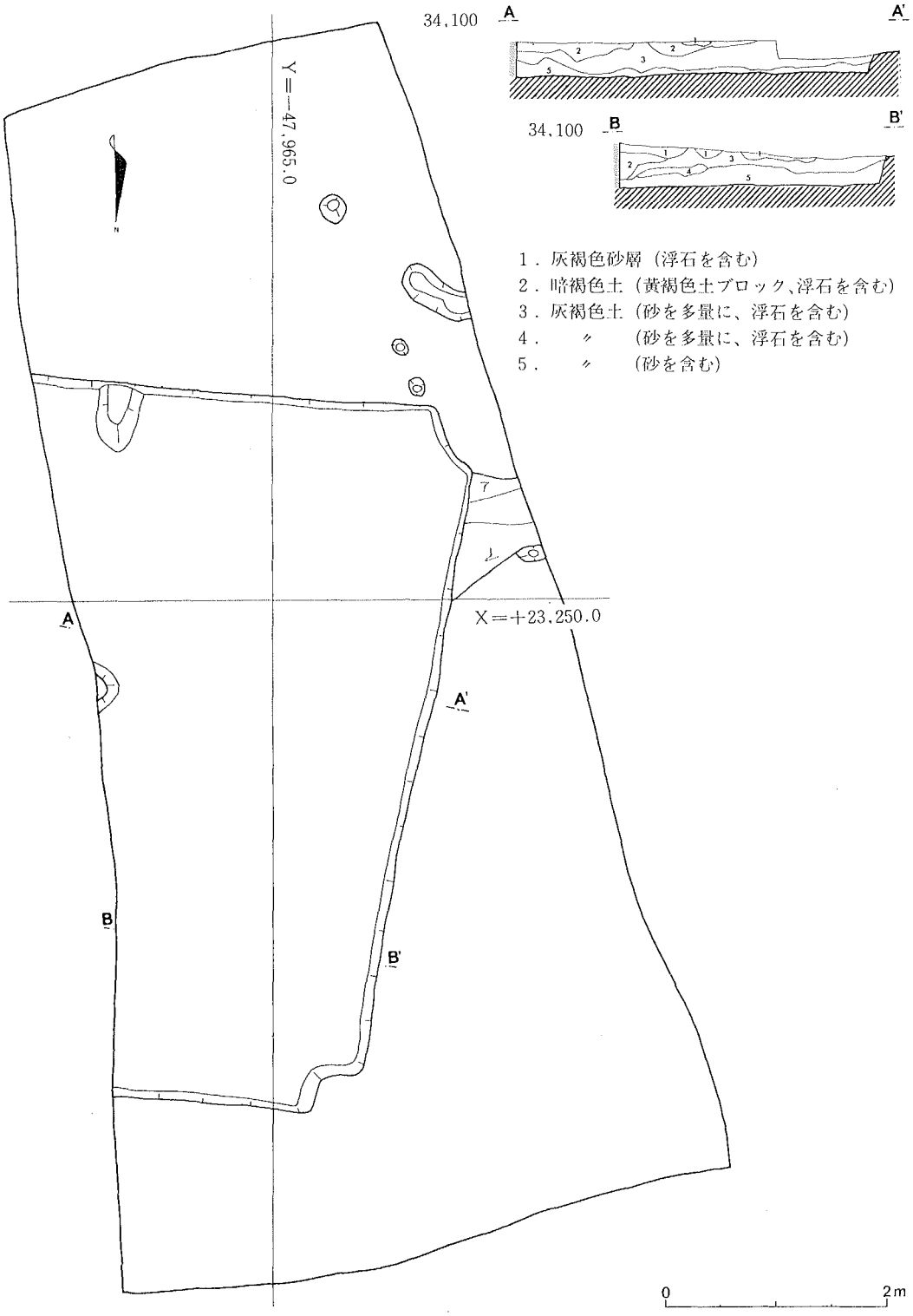
(3)　Ｃ区の調査

a．竪穴遺構（第31図）

性格不明の竪穴遺構で、全体は確認できなかった。平面プランは正方形又は長方形状を呈するものと思われるが、コーナーが内向きに丸く湾曲している。確認面よりの深さは30～40cmで、床面は平坦で、台状になった部分が２ヶ所確認された。ピット等はない。

近世の陶器や土器などの小破片が出土し、近世に構築されたものと考えられる。

なお、Ｃ区では、竪穴遺構の他に小ピット等が検出された。また、Ｃ区の南西隅や北側からは土師器の小破片や、弥生土器片と思われるごく小破片等も出土したが、図示しうるものはなかった。



第31図　C区全測図（1／60）

Ⅳ　上敷免北遺跡発掘調査

1．調査の概要

(1)　調査の経過

昭和58年６月14日、重機によりＡ区、Ｂ区の表土を削除した。６月16日に作業を開始する予定であったが、雨のために順延となり、６月18日より作業を開始した。調査期間の前半は、雨に悩まされた。

６月18日、Ａ区の精査から調査を開始した。溝状遺構１条と土拡２基を確認した。

６月22日、Ａ区の調査と平行してＢ区の調査を開始した。精査を行い、溝状遺構１条を確認した。Ｂ区の溝状遺構は小規模で遺物の出土量も少なかったため、６月27日にはＢ区の調査を終了した。

Ａ区の溝状遺構は、遺物の出土量が比較的多いため、出土状態の撮影と実測を行いつつ調査を進めた。また、覆土と地山の判別が難しいため、６月27日よりサブトレンチを４本設定し、壁の確認を急いだ。なお、この溝状遺構からは焼土や炭化物が多く検出された。

６月30日に第１号土坑の調査を開始し、７月２日に第２号土坑の調査を開始した。いずれも比較的深い土坑で、第２号土坑は７月７日に水が出てきたため、掘り下げることを断念した。

７月７日、Ａ区の溝状遺構を掘り上げ、７月９日、Ａ区全体の実測と撮影を行い、調査を終えた。

なお、Ａ区・Ｂ区とも座標軸に合わせて基準杭を設定し、特にグリッドは設定せず、遺構の平面測量は平板を用いて行った。

(2)　調査結果の概要

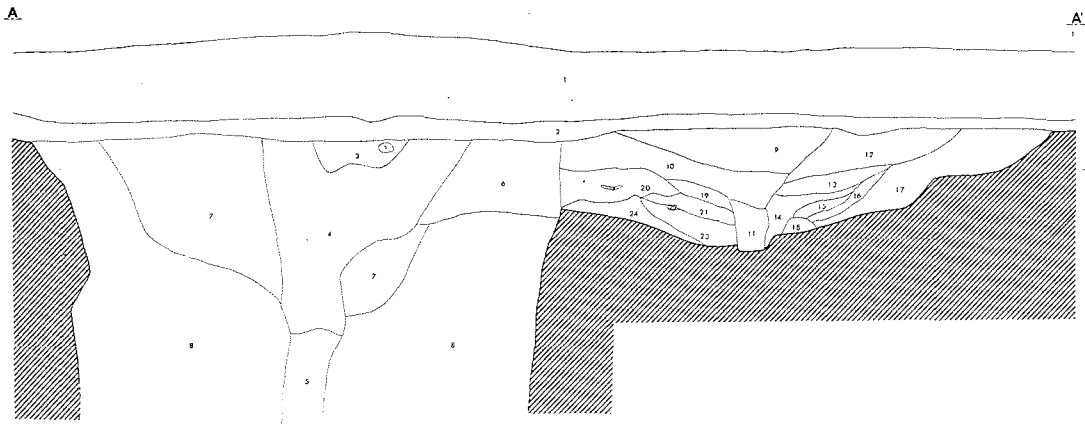
調査区は、約60ｍ離れた２地点で、南よりＡ区、Ｂ区と呼称した。調査面積は、Ａ区が約40m^2、Ｂ区が約30m^{2}である。

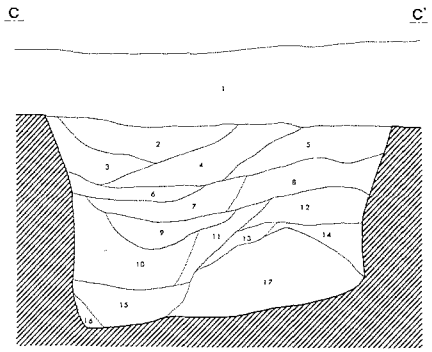
Ａ区では、溝状遺構１条と土坑２基が確認された。第１号溝状遺構は、覆土に焼土・炭化物が多く混入しており、通常の溝とは性格が異なるものと思われる。土師質土器、須恵器、灰釉陶器などが出土した。第１号土坑と第２号土坑は全体を調査することはできなかったが、第２号土坑は井戸跡とも考えられる。いずれも土師質土器、須恵器、灰釉陶器、須恵質陶器などが出土した。

Ｂ区では、溝状遺構１条が確認されたのみである。水路跡と考えられ、土師質土器などが出土した。

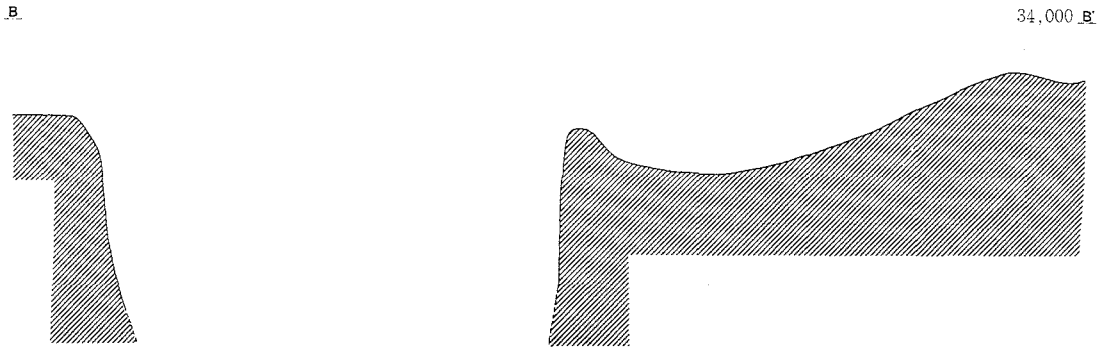
なお、Ａ区・Ｂ区とも地山は細かい砂を多く含む黄褐色土である。

第32図　A区全測図（1／40）





1．表　　土
2．黒褐色土（黒色土を含む、耕による攪乱を受ける）
3．　〃　（粘性強い）
4．暗褐色土（黄白色粘土を少量含む）
5．　〃　（4より暗い）
6．　〃　（黄白色粘土粒子・ブロックを多く、砂を含む）
7．　〃　（黄白色粘土粒子・ブロックを多く含む）
8．　〃　（黄白色~灰白色粘土粒子・ブロックを多量に含む、粘性強い）
9．黒褐色土（焼土・炭化物・黄白色粘土粒子を含む）
10．暗褐色土（焼土・炭化物・黄白色粘土粒子を含む）
11．　〃
12．　〃　（炭化物・焼土を少量含む）
13．暗褐色土（炭化物・焼土を少量含む）
14．黒褐色土（炭化物・焼土を多く、黄白色粘土を含む）
15．明褐色土（黄白色粘土を多量に含む）
16．黒褐色土（炭化物・焼土を含む　6より明るい）
17．明褐色土（炭化物・焼土をわずかに含む）
18．黄褐色土（黄白色粘土ブロック）
19．暗褐色土（炭化物・焼土を含む）
20．明褐色土（炭化物・焼土を少量含む）
21．暗褐色土（炭化物・焼土を含む）
22．焼　　土
23．黒褐色土（炭化物・焼土を多く含む）
24．暗褐色土（炭化物・焼土・黄白色粒土を多く含む）



1．表　　土
2．暗褐色土（焼土、炭化物、黄白色粘土を多く含む）
3．　〃　（2より明るい）
4．　〃　（焼土・炭化物を少量、黄白色粘土を含む）
5．　〃　（4より明るい）
6．灰褐色土（炭化物、灰白色粘土を含む）
7．暗褐色土（炭化物、黄白色粘土を多量に含む）
8．　〃　（黄白色粘土を多量に含む）
9．　〃　（黄白色粘土を多く、炭化物を含む）
10．明褐色土（炭化物をわずかに、黄白色粘土を少量含む）
11．　〃
12．暗褐色土（黄白色粘土を少量含む）
13．明褐色土（11より明るい）
14．暗褐色土（黄白色粘土を含む　12より暗い）
15．　〃　（黄白色粘土をわずかに含む）
16．明褐色土（黄白色粘土を多量に含む）
17．黄白色粘土塊

0　1m

第33図　A区土層断面（1／40）

2．遺構と出土遺物

(1)　A区の調査

a．第1号溝状遺構（第32図）

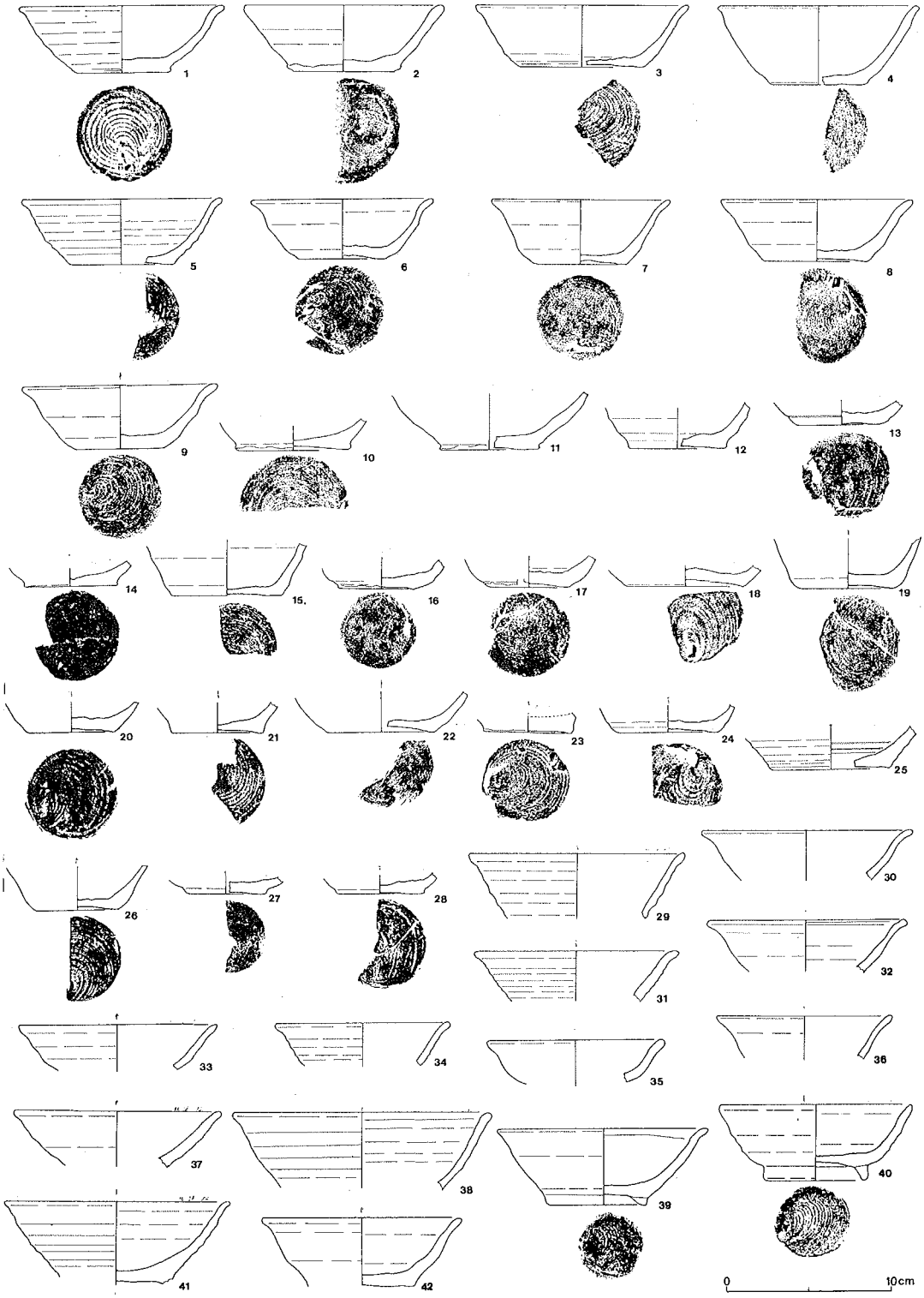
A区の中央を東西に、緩くS字状にカーブしている。幅2.1～2.5m、確認面よりの深さ50～70cmで、壁は緩く立ち上がり、部分的に稜を有する。底面には皿状に窪んだ部分が1ヶ所認められた。北東部分は第1号土坑に破壊されていた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山との判別が困難であったが、焼土・炭化物が（特に下層に多く）混入していた。

土師質坏・高台付坏・甕、灰釉皿、須恵器甕などの破片が、中～下層より比較的多く出土した。

第1号溝状遺構出土遺物（第34図1～第35図79）

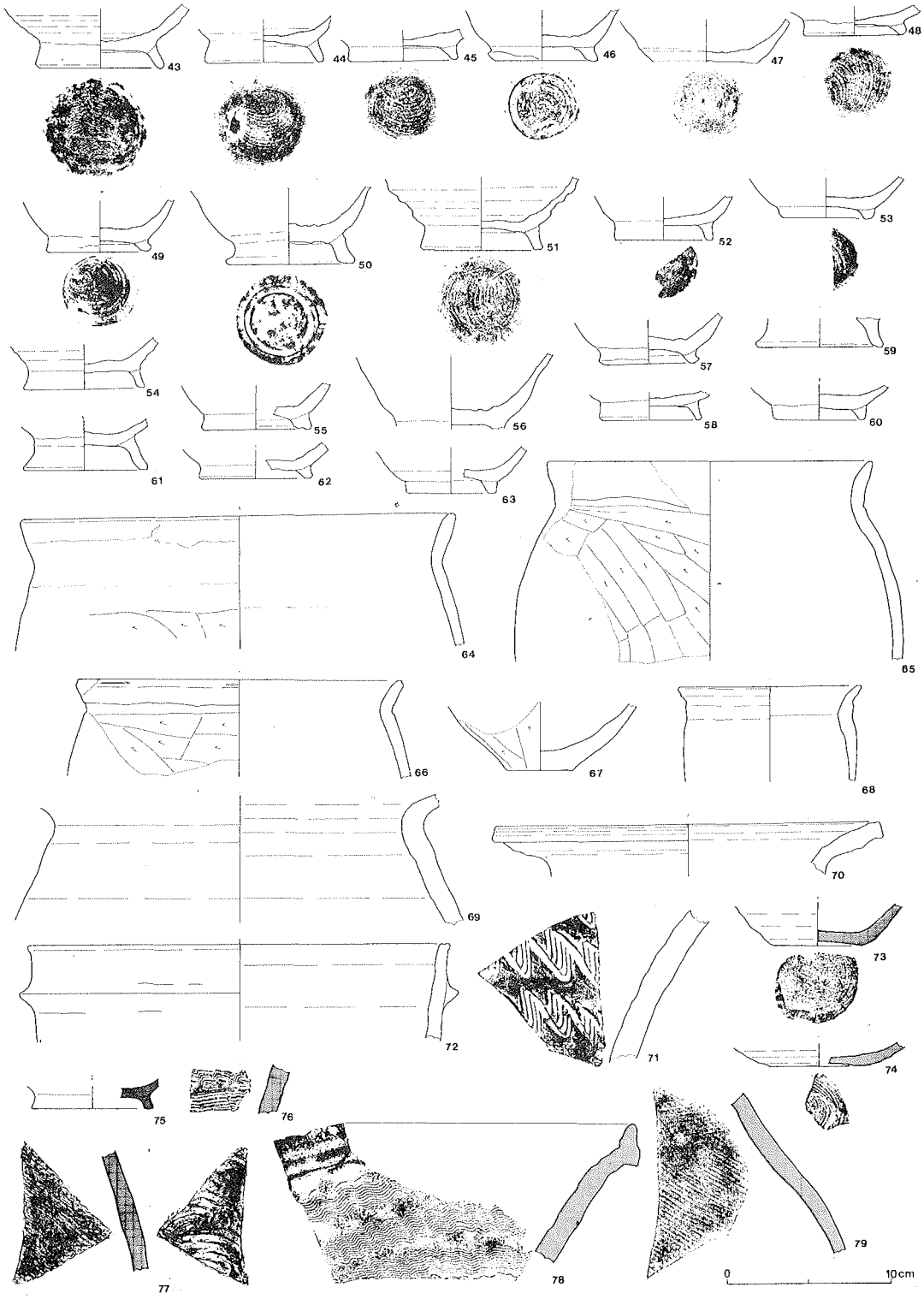
ア．土師質坏・高台付坏（第34図1～第35図63）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
1	杯	12.4	5.8	4.2	やや歪曲。底面回転糸切り。ロクロ右回転。YW。	完形
2	〃	(12.0)	(6.0)	4.1	底面回転糸切りの後ナデ。ロクロ右回転。やや軽質。LB。	40%
3	〃	(13.5)	(8.5)	4.0	底面回転糸切り。DB。	20%
4	〃	(12.5)	(6.0)	4.9	底面回転糸切りの後若干のナデか。焼成やや不良。BℓGB～LB。	20%
5	〃	(12.0)	(6.0)	4.1	底面回転糸切り。ロクロ右回転。LB～YW。	30%
6	〃	(11.0)	(5.5)	3.9	底面回転糸切り。ロクロ右回転。LB～YW。	40%
7	〃	(11.0)	(5.5)	4.0	やや歪曲。底面回転糸切り。ロクロ右回転。LB。	50%
8	〃	(12.0)	5.3	3.8	やや歪曲。底面回転糸切り。ロクロ右回転。LWB。	70%
9	〃	(12.0)	(5.5)	3.9	やや歪曲。底面回転糸切り。ロクロ右回転。YW。	50%
10	〃	—	7.0	(1.7)	底面回転糸切りの後若干のナデ。LO～LB。	—
11	〃	—	(6.0)	(3.5)	底面回転糸切り。LB～LO。	—
12	〃	—	(6.0)	(2.5)	底面回転糸切りの後若干のナデ。LB～LYW。	—
13	〃	—	(5.5)	(1.1)	外面底部直上に細い沈線。底面回転糸切り。ロクロ右回転YW。	—
14	〃	—	(5.5)	(1.3)	底面回転糸切り。内面中央に竹管状工具で刺突したような痕跡。YW。	—
15	〃	—	(6.5)	(3.1)	底面回転糸切り。LGB。	—
16	〃	—	(4.5)	(1.9)	やや歪曲。底面回転糸切りの後若干のナデか。YW。	—
17	〃	—	(5.0)	(1.7)	外面底部直上に細い沈線、さらに下から上へ器肉ナデつけ。底面回転糸切り。ロクロ右回転。YW～LB。	—
18	〃	—	(7.0)	(1.3)	やや歪曲。底面回転糸切り。やや大きい埦か。LWB。	—
19	〃	—	(6.0)	(3.2)	底部回転糸切り。ロクロ右回転。YW。	—
20	〃	—	(5.5)	(1.8)	底面回転糸切り。ロクロ右回転。LO～YW。	—



第34図　A区出土遺物(1)（1／4）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
21	坏	—	(5.5)	(1.8)	底面回転糸切り。YW。	—
22	〃	—	(6.5)	(2.6)	やや大型か。底面回転糸切り。YW。	—
23	〃	—	(5.4)	(1.0)	内面剥離。底面回転糸切り。YGW。	—
24	〃	—	(6.5)	(1.7)	底面回転糸切り。ロクロ右回転か。YW。	—
25	〃	—	(7.0)	(2.6)	底面回転糸切りの後若干のナデか。内面に細い沈線3条。焼成良好。OB。	—
26	〃	—	(5.0)	(2.7)	底面回転糸切り。ロクロ右回転か。焼成良好。LB～DB。	—
27	〃	—	(5.0)	(1.0)	底面回転糸切り。焼成良好。LGB。	—
28	〃	—	(5.5)	(1.2)	底面回転糸切りの後粗い削りか。焼成良好。LO。	—
29	〃	(13.0)	—	(4.0)	やや軽質。WB。	—
30	〃	(13.0)	—	(3.1)	LWB。	—
31	〃	(12.0)	—	(3.0)	ロクロ右回転か。WB。	—
32	〃	(13.5)	—	(3.2)	口唇部内面沈線状の浅い凹みあり。焼成良好。YG。	—
33	〃	(12.0)	—	(2.8)	やや浅い器形か。軽質。LYG～YW。	—
34	〃	(12.0)	—	(2.5)	やや小型。LGB。	—
35	〃	(11.0)	—	(2.7)	浅く小さい。LYW。	—
36	〃	(11.0)	—	(2.5)	軽質。LB～YW。	—
37	〃	(12.5)	—	(3.4)	やや浅い器形か。軽質。GW～BℓG。	—
38	〃	(16.0)	—	(4.7)	やや大きい埦状。ロクロ右回転。焼成良好。YW。	60%
39	高台付坏	13.0	5.2	(4.7)	底面回転糸切り。高台貼付。ロクロ右回転。LB。	90%
40	〃	(12.0)	(6.0)	(4.7)	底面回転糸切り。高台貼付。GB～LO。	20%
41	〃	(14.0)	—	(5.0)	底面回転糸切りの後回転ナデ。高台は貼付であろう。ロクロ右回転。DB。	50%
42	〃	(12.5)	—	(4.2)	底面回転糸切りの後若干のナデ。高台剥離。YW。	60%
43	〃	—	8.0	(3.7)	底面回転糸切り。高台貼付。ロクロ右回転。LB。	—
44	〃	—	7.4	(2.8)	底面回転糸切り。高台貼付。O～DB。	—
45	〃	—	6.0	(1.3)	底面回転糸切り。高台貼付。LB。	—
46	〃	—	6.0	(3.2)	底面回転糸切りの後ヘラ状工具による若干のナデか。高台貼付。ロクロ右回転。YW。	—
47	〃	—	6.5	(2.8)	底面回転糸切り高台貼付の後若干のナデか（糸切り痕は高台剥離部分に明瞭）。ロクロ右回転。LB。	—
48	〃	—	6.2	(1.9)	底面回転糸切り。高台貼付。ロクロ右回転。LO。	—
49	〃	—	6.6	(3.2)	底面回転糸切り。高台貼付。ロクロ右回転。YW。	—
50	〃	—	8.0	(4.7)	少し傾く。底面回転糸切り後回転ナデ。高台貼付。ロクロ右回転。LB～YW。	約50%
51	〃	—	7.5	(4.6)	底面回転糸切り。高台貼付。ロクロ右回転。YW。	—
52	〃	—	(6.0)	(2.7)	底面回転糸切り後若干のナデか。高台貼付。LB～BℓB。	—
53	〃	—	(6.0)	(2.6)	底面回転糸切り。高台貼付。焼成不良。BℓG～GW。	—
54	〃	—	(7.4)	(2.8)	底面回転糸切りの後ナデか。高台貼付。調整粗い。DB。	—



第35図　A区出土遺物(2)（1／4）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
55	高台付坏	—	(6.5)	(2.8)	底面回転糸切り。高台貼付。ＹＷ。	—
56	〃	—	—	(4.5)	底面回転糸切りの後ナデ。高台は削り出しの可能性あり。ロクロ右回転。ＬＢ。	60%
57	〃	—	6.2	(3.7)	底面回転糸切りの後ナデ。高台は貼付。ＬＷＢ。	—
58	〃	—	5.4	(1.8)	底面回転糸切りの後ナデ。高台は貼付。ＬＧＢ。	—
59	〃	—	7.8	(1.8)	貼付の高台のみ輪状に残存。ＬＢ。	—
60	〃	—	5.4	(2.0)	底面回転糸切り後ナデか。高台貼付。外面ＬＢ、内面BℓＢ。	—
61	〃	—	7.6	(3.2)	底面回転糸切り後回転ナデ。高台は貼付。裾端部下面平坦で沈線あり。ロクロ右回転。ＬＢ。	—
62	〃	—	(7.0)	(1.8)	底面回転糸切りの後ナデか。高台は貼付。焼成やや不良、軽質。外面BℓＧ、内面ＧＷ。やや須恵質に近い。	—
63	〃	—	(5.0)	(2.9)	底面回転糸切りの後ナデか。高台貼付。焼成良好。外面ＹＷ、内面ＬＯ。	—

１～63の坏・高台付坏は、器形・成形・調整はいわゆる国分式の須恵器のものと同様であるが、焼成は土師質で、軽質で黄白色や淡褐色を呈するものが多い。坏も高台付坏も、貼付の高台の有無以外は特に基本的な違いはない。したがって、29～38は高台付坏の可能性がある。

口唇部はほとんどが外反している。巻き上げにより成形され、ロクロで調整されており、ロクロの回転方向は確認できるものは全て上から見て右回転である。

底面は回転糸切りで、若干ナデられているものもある。高台はほとんどが貼付で、56のように削り出しの可能性があるものもある。高台付坏の底面は、高台を貼り付ける前に若干ナデられたものもあり、直接貼り付けたものもある。高台の内外面のきわは、丁寧にナデつけられている。

イ．土師質甕・その他（第35図64～72）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴
64	甕	(26.5)	—	(8.3)	口縁部指の押圧の後ナデ。内外面とも輪積痕明瞭。ＹＷ。
65	〃	(20.0)	—	(12.4)	口唇部に指の押圧痕。頸部に沈線状。内面ナデ。ＬＢ。
66	〃	(20.0)	—	(6.0)	口縁部指の押圧の後ナデか。頸部に沈線。内面ナデ。焼成良好でやや軽質。ＬＢ。
67	〃	—	4.0	(4.0)	底面は砂底状で無調整。内面丁寧なナデ。焼成良好。ＬＢ
68	小型鉢？	(11.0)	—	(5.9)	口唇部外面平坦。胴部外面ヘラ削りの後ナデか。胴部内面ヘラナデの後ナデか。外面ＤＢ、内面ＹＷ。
69	大甕	—	—	(8.0)	ロクロ調整。口縁部大きく開くか。内面輪積み部分で上から下へのナデつけが明瞭。焼成良好。ＬＯ。
70	甕？	(24.0)	—	(3.2)	かなり外反。口唇部の上面と外面が平坦。ロクロ調整か。ＬＤ。
71	大甕	—	—		ロクロ調整。外面に青海波状文。内面ナデ。ＹＷＧ。
72	羽釜	(26.0)	—	(6.0)	ロクロ調整。口唇部上面平坦3～4条の沈線あり。突帯貼付ＬＤ。

64～67の甕は、焼成は坏や高台付坏に類似し、やや軽質で黄白色を呈する。

外反し、胴部外面はヘラ削りである。69～72はロクロ調整である。69は大甕の頸部から肩部にかけての破片と思われる。なお、64～72はいずれも小破片である。

ウ．須恵器・灰釉陶器・須恵質陶器（第35図73～79・第36図８・９）

番号	器種	中 径	底 径	器 高	特　　徴
73	坏	—	(3.5)	(2.4)	底面回転糸切り。重ね焼痕あり。焼成やや不良で軽質。GW～BℓG。
74	皿	—	(6.0)	(1.2)	底面回転糸切り。胎土緻密。焼成良好。G。
75	高台付坏	—	(7.5)	(1.4)	底面回転糸切り。高台貼付。焼成良好。G。
76	甕？	—	—	—	外面に櫛描きの波状文など。焼成堅緻。BℓG。
77	甕	—	—	〃—	外面櫛目状の叩目。内面鱗状の叩目。胎土緻密。焼成堅緻。BℓG。
78	大甕	—	—	〃—	外面櫛描き青海波状文。BℓG。
79	甕	—	—	〃—	外面平行叩目。内面やや粗いナデ。胎土緻密。焼成堅緻。G。
8	灰釉皿	(13.5)	—	(3.1)	内外面に薄い灰釉。調整やや粗い。焼成良好。ＬＧ。
9	〃	(14.5)	—	(3.2)	内面に灰釉。胎土微細。焼成堅緻。ＧＷ。

上記はいずれも小破片である。第36図８は、灰釉陶器としては胎土は精選されておらず、焼成もあまり良くない。

ｂ．第１号土坑（第32図）

第１号溝状遺構の南側に位置する。全体を調査できなかったため形態は不明だが、平面プランは長円形又は不整円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは約105cmで、底面はやや斜めで壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土を主体とし、底に大きな粘土塊が堆積していた。

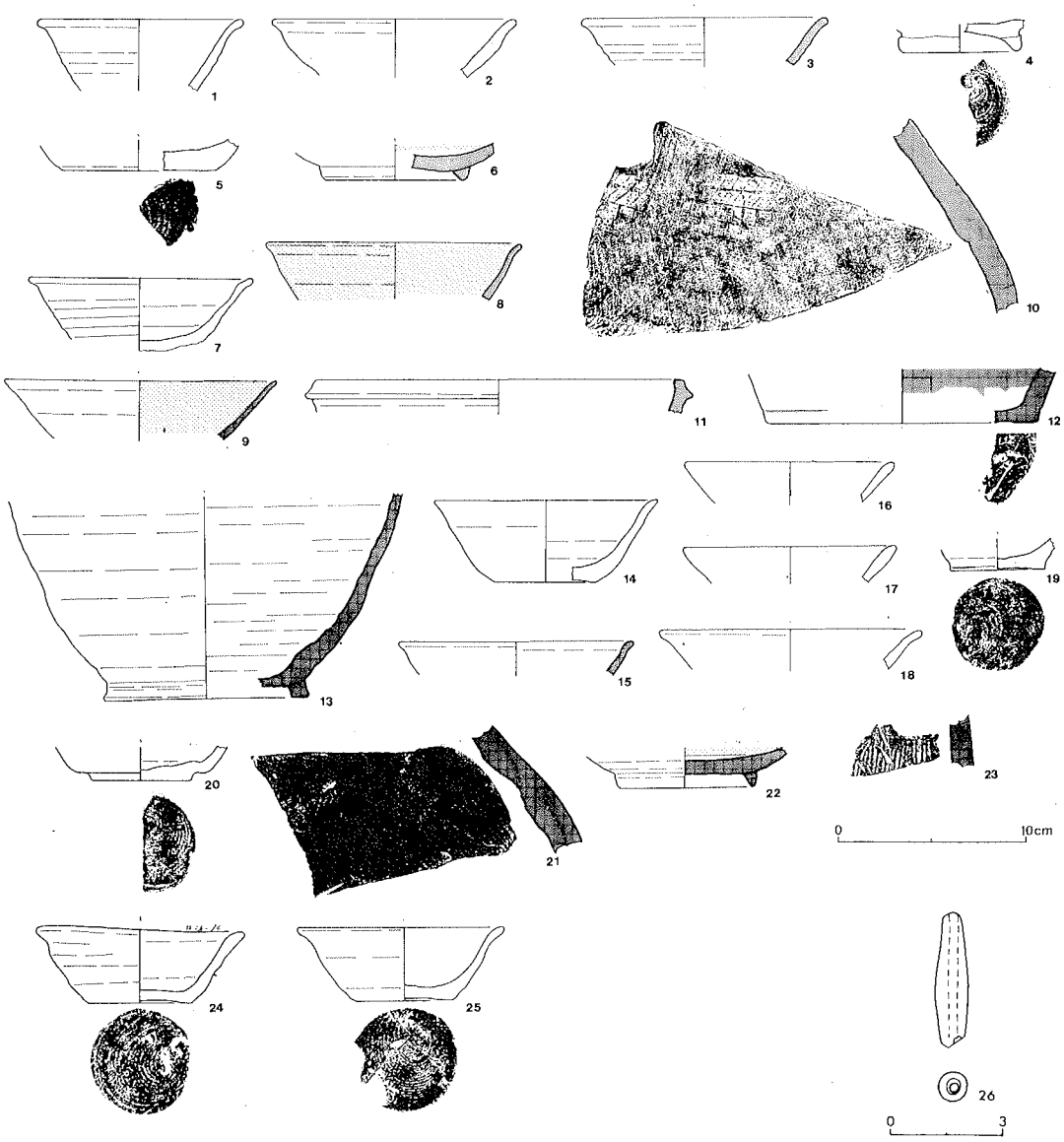
土師質土器、須恵器、灰釉陶器などが出土した。

第１号土坑出土土器（第36図１～７・10～13）

ア．土師質土器（第36図１・２・４・５・７）

番号	器種	口 径	底 径	器 高	特　　徴	残存率
1	坏	(11.0)	—	(3.9)	やや小型か。ＹＷ。	—
2	〃	(13.0)	—	(3.1)	ＬＹＷ。	—
4	高台付坏	—	(6.5)	(1.5)	底面回転糸切り。高台は貼付。ＬＯ。	—
5	鉢？	—	(8.0)	(1.7)	鉢形か。底面回転糸切り。焼成良好。ＬＢ。	—
7	坏	12.0	—	(3.9)	やや歪曲。底面剥離。ロクロ右回転。ＬＧＢ。	80%以上

１・２・４・７は、第１号溝状遺構の場合と同様である。１・２・７は高台付坏の可能性もある。５は坏よりも大きく、鉢形を呈するものと思われる。



第36図　A区出土遺物3)（1／4・1／2）・B区出土遺物（1／4）

イ．須恵器・灰釉陶器・須恵質陶器（第36図３・６・10～13）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴
3	坏	(13.0)	—	(2.5)	焼成やや不良で軽質。ＧＷ。
6	灰釉灰	—	(8.0)	(1.3)	高台貼付。体部内面（底を除く）に斑点状の灰釉。胎土微細。焼成堅緻。ＧＷ。
10	大甕	—	—	—	外面にごく薄い自然釉外面上位に格子目状の叩き目、下位櫛目調整。輪積部分上から下へナデつけ。胎土緻密。焼成堅緻。BℓG。

番号	器種	口径	底径	器高	特徴
11	広口壺？	(19.5)	—	(1.8)	広口壺の口唇部か。焼成堅緻。Bℓ G。
12	壺？	—	(14.0)	(3.0)	外面に部分的に自然釉、内面に緑色の自然釉。底面回転糸切り。底部円板貼付。胎土緻密。焼成堅緻。G。
13	壺	—	(11.0)	(10.9)	底面回転糸切り。高台貼付。内外面とも調整粗い。焼成堅緻。G。

6は灰釉陶器の高台付皿の底部であろう。底面は回転糸切りの後丁寧な回転ナデが施されている。10は中世陶器に近い須恵質の土器である。13は長頸壺であろう。なお、第1号土坑からは常滑焼の小破片も出土している。

C．第2号土坑（第32図）

第1号溝状遺構の北側に位置し、第1号溝状遺構を破壊して構築されている。全体を調査することはできなかったが、平面プランは径3mほどの不整円形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は湧水のために確認できなかった。覆土は暗褐色土を主体とし、中心に柱穴の土層がみられることが特徴的である。

土師質坏、須恵器、灰釉陶器、土錘などが出土した。

第2号土坑出土遺物（第36図14～23・26）

ア．土師質坏（第36図14・15～20）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴
14	坏	(12.0)	(5.5)	4.4	底面回転糸切り。ＬＢ。20%残存。
16	〃	(11.0)	—	(2.3)	内外面に油煙状の物質が付着。ＹＷ、部分的にBℓ。
17	〃	(11.0)	—	(2.0)	口唇部若干肥厚。ＹＷ。
18	〃	(14.0)	—	(2.2)	ＹＷ。
19	〃	—	5.1	(1.6)	底面回転糸切り、ＤＢ。
20	〃	—	(5.5)	(1.8)	底部明瞭に作り出される。底面回転糸切り。ロクロ右回転。ＹＷ。

20は他のものに比べて底部の形態が異なっている。

イ．須恵器・灰釉陶器（第36図15・21～23）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴
15	坏	(12.5)	—	(1.8)	胎土緻密、焼成堅緻。G。
21	甕	—	—	—	須恵質陶器。外面櫛目状の叩き目か。輪積痕明瞭。内面の調整粗く上から下へナデつけ。焼成堅緻。G。
22	灰釉皿	—	(7.5)	(2.1)	底面回転糸切りの後回転ナデ。高台貼付。内面底部周縁の細い沈線の外側に斑点状の灰釉。胎土緻密。焼成堅緻。ＧＷ。
23	甕	—	—	—	外面櫛目状の叩目。焼成良好。G。

ウ．土錘（第36図26）

土師質の焼成。長さ3.6cm、径0.8cm、孔径0.2cm。一端を欠損。孔はまっすぐに通る。表面の調整は粗い。

(2)　B区の調査

a．第1号溝状遺構（第37図）

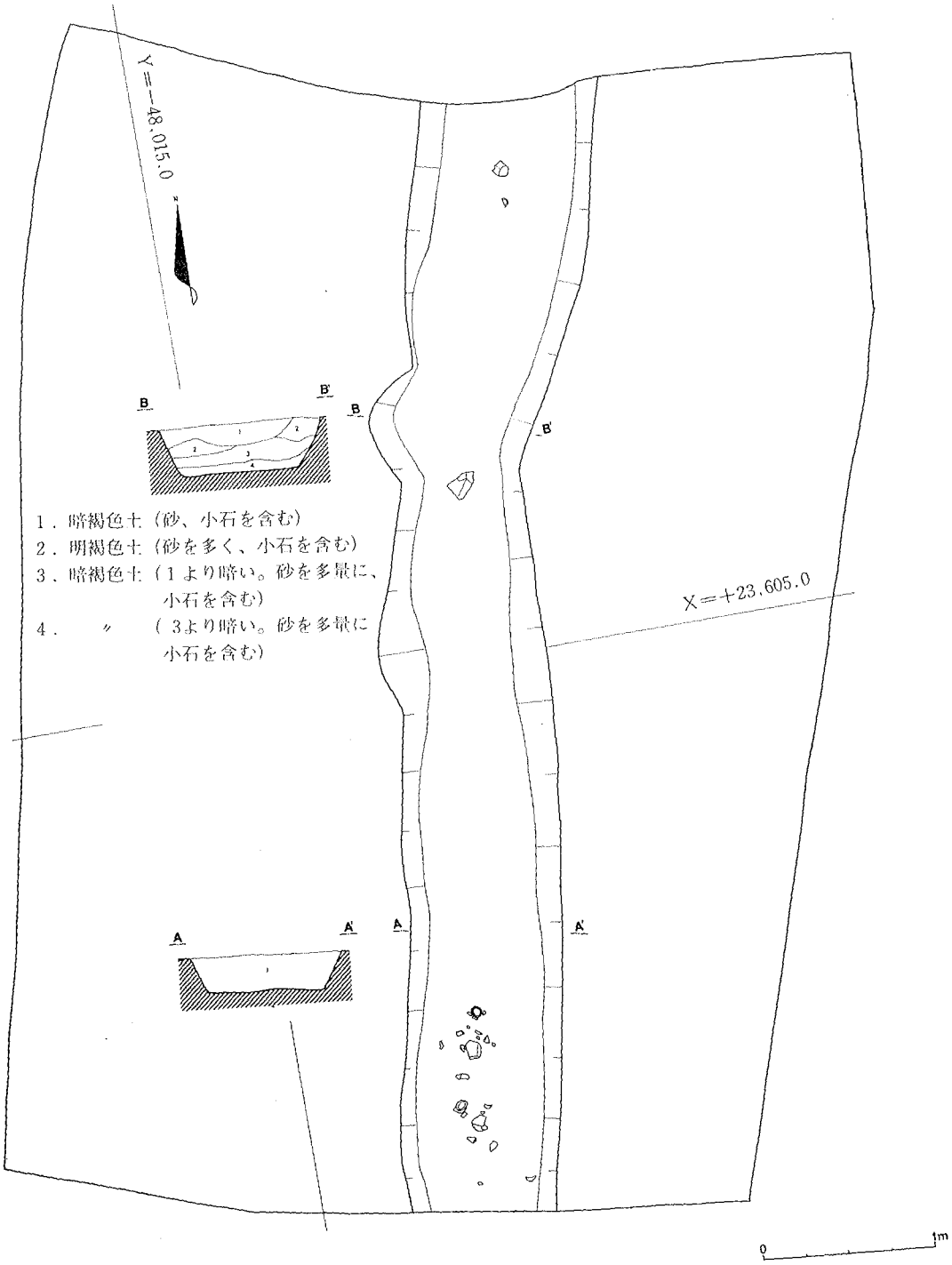
B区の中央を南北に通っている。幅0.6～1.1m、確認面よりの深さは20～30cmほどである。底は比較的平坦だが、南の方がやや浅く、土層B—B′のあたりがやや深い。壁は斜めに立ち上がる。

土師質坏が出土した。

第1号溝状遺構出土土器（第36図24・25）

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	残存率
24	坏	11.2	5.6	3.8	口縁部部分的に歪曲。底面は回転糸切り。ロクロは右回転。YW。	90%
25	〃	11.0	5.2	3.8	やや歪曲。底面回転糸切り。LB。	90%

上記2点はいずれも土師質土器で、A区出土のものと同様である。



第37図　B区全測図（1／40）

Ⅳ 結　語

上敷免遺跡、上敷免北遺跡とも妻沼低地の自然堤防上に形成された、かなり大きな広がりをもつ集落跡であると考えられるが、今回の発掘調査は全くの点の調査でしかない。したがって、遺跡の全体的な様相などを検討することはできない。ところで、埼玉県北部の児玉・大里地域では、大規模な発掘調査により土師器などの良好な資料が豊富に発表されており、土師器の編年などについて詳細な検討がなされている（中村1979、石岡・浅野1981、利根川1982、鈴木1983)。こうした諸兄の研究を参考として、今回の発掘調査で検出された各遺構の出土遺物の時期について、若干の検討を行うことで結語としたい。

まず、上敷免遺跡第２次発掘調査で検出された住居跡３軒について考えてみたい。

Ａ区第１号住居跡は、南辺を第２号住居跡に破壊されているが、大量に土師器が出土したことが注目される。図示しえたものだけでも300点を超え、器種も豊富である。

坏は最も多く出土しており、その中でも特に多いのは鬼高式のメルクマールとされるいわゆる模倣坏である。１～121はほぼ同様な大きさであるが、122～134のように大型のもの、135・136のように小型のものもある。１～121は、概ね口縁部がわずかに外反し体部はあまり深くない。口唇部上面は、平坦なもの・やや凹面となるもの・平坦で沈線が巡るものなどが圧倒的に多いが、この特徴は埼玉県北部から群馬県南部にかけての地域では一般的にみられるもので、須恵器を忠実に模倣したものと考えられる。

埦の中で特徴的なのは、口縁部が「く」字状に屈曲して体部が張った丸底のものである（156～170)。和泉式からの系譜を引くものと考えられ、時期的にも形態的にも最も類似すると思われるものは、後張遺跡（横川ほか1983）49号住、80号住、89号住、群馬県尾島町の歌舞伎遺跡（井上・大江1982）Ａ60号住、Ｂ42号住、Ｂ46号住などにみられる。

高坏は、いわゆる和泉型のもの（190～224）もあるが、鬼高型といわれるものも数多い（ 190～224)。和泉型のものは、坏部が浅く、口縁部は外反し、有段の脚はない。

甕は、既に長胴化の傾向が明瞭に認められ、最大径は胴部中位にあり、底部は若干突出して作られている。なお、230～232は壺とみるべきかもしれない。

甑は、285～288が大型のもので、289・290が小型のものである。285～288の胴部上位はほぼ直立する。289は大型のものとほぼ同様の形態を呈し、290は底部がすぼまり作りもやや粗い。

上記以外のもので最も注目されるのは、小型の甑のような形態を呈する鉢であろう（291～298)。後張遺跡27号住、29号住、東谷遺跡（柿沼・小久保1978）21号住、臺遺跡（中村ほか1980）５号住、六反田遺跡（梅沢ほか1981）35号住、夏目遺跡（石橋ほか1985）61号住などに類例があり、六反田遺跡13号住、31号住のものは若干古い段階にあるものと考えられる。

なお、甕、壺、甑、鉢などにも坏、埦、高坏にみられたような、口唇部の上面ないし外面が平坦に調整されて細い沈線が巡っているものなどがある。

Ａ区第１号住居跡から出土した大量の土師器を概観すると、以上のような特徴が認められる。こ

れらの出土状況、成形技法や焼成などを観察すると、出土した土師器にあまり大きな時間的幅を認めることは困難である。むしろ、器種によって、形態や技法などにおいて新しい要素に敏感に反応しているものと、比較的古い要素が根強く残っているものがあることを認めるべきであろう。前者としては日常什器である坏・甕・甑などが、後者としては埦・高坏などが挙げられよう。以上のことを考慮して、A区第1号住居跡出土遺物は、6世紀第2四半期頃のものとみておきたい。

なお、A区第1号住居跡は、規模・構造などにおいて特殊な点を指摘するのは困難である。また、筆者は浅学にして同じ頃の住居跡からこのように大量の土師器が出土した例を知らない。御教示いただければ幸いである。

A区第2号住居跡からは土師器坏・埦・甕・鉢などが出土した。坏は、外傾する口縁部の中位に沈線が巡って段状となるものや、口縁部が短く直立又はわずかに内傾するものなどがある。甕はかなり長胴化しており、口縁部は強く外反して口径が最大径となっている。体部外面は斜めのヘラ削りである。こうした特徴はいわゆる鬼高式の末期に位置づけられ、7世紀第3四半期頃とみられよう。

B区第1号住居跡からは土師器坏・埦・高坏・甕・甑・手捏土器などが出土した。坏は、いわゆる模倣坏を主体とし、12・13のように口縁部が外反するものもあるが、直立するものが多く、16のようにやや内傾するタイプのものもある。口唇部上面が平坦なもの・やや凹面となるもの、平坦で細い沈線が巡るものなどは半数以下である。14は口縁部中位に沈線が巡っており、A区第2号住居跡でみられるものの祖型とも考えられよう。高坏は、いわゆる和泉型のものはあるが鬼高型のものはない。甕は長胴化したものはなく、28の口唇部は須恵器を模倣したものと思われる。38の甑は胴部が若干ふくらんでおり、胴部最大径と口径がかなり近い値を示している。以上のような特徴からB区第1号住居跡出土遺物は、A区第1号住居跡出土遺物より少し古い段階、6世紀第1四半期頃のものとみておきたい。

次に上敷免北遺跡の遺構と出土遺物について若干考えてみたい。遺構は、A区の第1号土坑が少し新しい段階のものと考えられる他は、A区・B区ともかなり近接した時期のものと考えられよう。出土遺物の中で最も多いのは、報文中で土師質土器と呼んだ坏と高台付坏である。技法・器形ともいわゆる国分式の須恵器と類似した特徴をもっている。すなわち、巻き上げ成形、ロクロ調整、底面回転糸切り、高台は貼り付け、口唇部が外反、底径は口径に比して小さい、などである。酸化炎焼成で、淡褐色・黄白色などを呈し、やや軽質である。須恵系土師器とも呼ばれるが、質的に前段階の土師器とはかなり変化しており（焼成法も変化したであろう）、土師器という名称は避けるべきではないかと考えたため、ここでは土師質土器という名称を用いた。他に羽釜（口縁部の小破片のため形態は不明）が出土しているが、いわゆる「コ」字状の口縁部の甕はない。また、須恵器や灰釉陶器が出土している。以上のような状況から、今回の上敷免北遺跡の発掘調査で出土した遺物は、A区第1号土坑のものを除き、11世紀後半頃のものと推定しておきたい。なお、上敷免北遺跡の範囲に含まれる東本郷地区での発掘調査で類似した遺物が出土している（佐藤1982）が、この時期の資料は豊富とはいえず、今後の資料の増加を待って再検討したい。

以上、上敷免遺跡第2次発掘調査、上敷免北遺跡発掘調査で出土した遺物の時期について、簡単な検討を行ってみた。しかし、これは飽くまで周囲の地域で出土した遺物との技法・形態・組成等

の類似点を対比して一応の目安を設定しただけのものである。型式学的な検討と時間軸の比定という、必ずしも同一視はできない要素を混同しているという批判は免れず、いずれ再検討されねばならない。むしろ、上敷免遺跡第２次発掘調査Ａ区第１号住居跡の出土遺物には遺構というある時間枠の中にある遺物に、様々な型式学的要素が包含されているように思われる。

最後に、良好な資料を得ながらも、諸条件の制約などのために、まことに粗雑な報文となってしまったことを諸兄にお詫びしたい。

引用文献

石岡憲雄・浅野晴樹　「出土遺物について」『六反田』　1981年３月　大里郡岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館

石橋桂一ほか　『夏目遺跡発掘調査報告書』　1985年３月　本庄市教育委員会

井上唯雄・大江正行　『歌舞伎遺跡』　1982年３月　群馬県埋蔵文化財調査事業団

梅沢太久夫ほか　『六反田』　1981年３月　大里郡岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館

柿沼幹夫・小久保徹　「東谷遺跡の発掘調査」『東谷・前山２号墳・古川端』　1978年３月　埼玉県教育委員会

佐藤忠雄　『長塚・富士ノ腰・東本郷』　1982年９月　東京電力籠原線遺跡調査会

鈴木徳雄　「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第７号　1983年７月　土曜考古学研究会

利根川章彦　「古墳時代集落構成の一考察――児玉地方の５～８世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として――」『土曜考古』第５号　1982年１月　土曜考古学研究会

中村倉司　「児玉郡における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』　1979年12月　埼玉県遺跡調査会

中村倉司ほか　『臺遺跡』　1980年８月　埼玉県遺跡調査会

横川好富ほか　『後張』本文編Ⅱ・図版編Ⅱ　1983年３月　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写　真　図　版

１．Ａ区全景（北より）

２．Ａ区第１号住居跡　カマド

図版 2

3．A区第 1 号住居跡遺物出土状態(1)

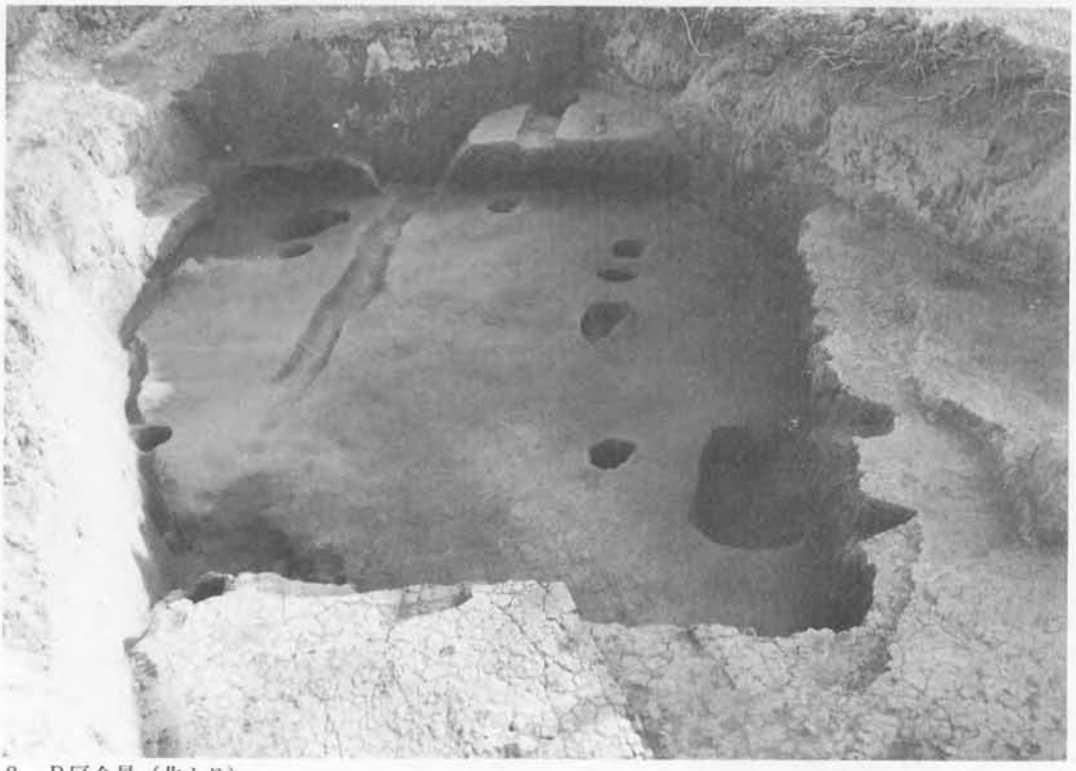
4．A区第 1 号住居跡遺物出土状態(2)

5．A区第1号住居跡遺物出土状態(3)

6．A区第1号住居跡遺物出土状態(4)

図版 4

7．A区第2号住居跡　カマド



8．B区全景（北より）

9．B区第1号住居跡遺物出土状態

10．C区全景（北より）

図版 6

4

17

22

23

25

27

30

31

37

38

40

49

50

52

54

55

56

58

59

64

65

11．A区第１号住居跡出土遺物(1)

67

69

74

77

79

82

83

87

89

84

96

117

90

118

119

125

126

129

130

135

136

12．A区第1号住居跡出土遺物(2)

図版 8

151

147

148

140

152

159

160

162

163

171

172

173

174

175

190

191

193

195

13．A区第１号住居跡出土遺物(3)

196

198

226

227

228

229

230

232

233

238

239

240

14．A区第１号住居跡出土遺物(4)

図版10

241

242

251

282

285

286

289

290

291

294

298

15．A区第１号住居跡出土遺物(5)

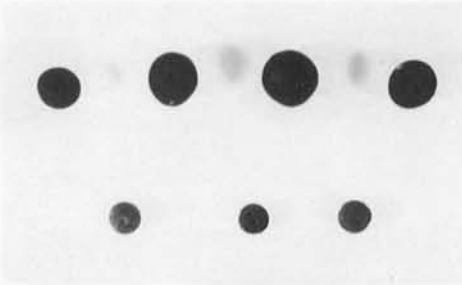
307

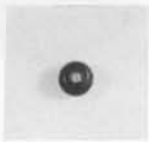
305

306

319

16．A区第1号住居跡出土遺物(6)





17．上敷免遺跡第2次発掘調査出土玉類

1

3

4

12

16

22

27

25

24

18．A区第2号住居跡出土遺物

図版12

1

5

7

10

11

15

17

18

21

23

28

30

31

33

38

19．B区第１号住居跡出土遺物

20．A区全景（北より）

21．A区第1号溝状遺構遺物出土状態

図版14

34-1

34-2

34-5

34-7

34-8

34-38

34-39

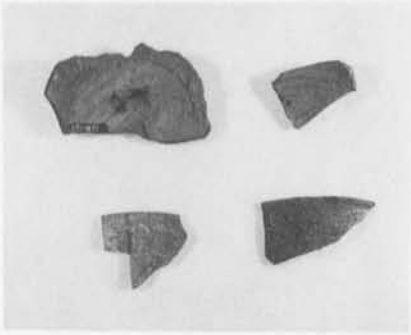
35-50

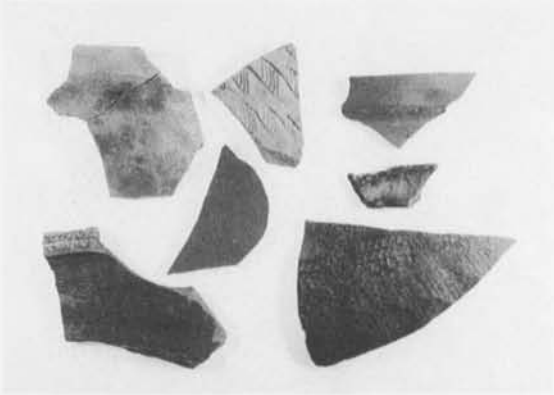
36-7

36-24

36-25

36-13





22．上敷免北遺跡出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集

上敷免遺跡（第2次）
上敷免北遺跡

印刷　昭和60年3月21日
発行　昭和60年3月31日

発行　深谷市教育委員会
印刷　大屋印刷株式会社

正誤表

ページ	部分	誤	正
5	土層D－D′	2．晴褐色土 3．晴褐色土	2．暗褐色土 3．暗褐色土
〃	土層E′－E	1．暗褐色土 2．　明褐色土	（消す） （消す）
6	土層L－L′	4．黒褐色土 ローム及び	3．黒褐色土 ローム及び
7	土層P－P′	3．晴褐色土	3．暗褐色土
20	14行目	元豊通宝（初銭	元豊通宝（初鋳
22	スケール	10m	10cm
23	11行目	（第19図，第21図1～3）	（第19図，第20図1～3）